虚構からの知識獲得のための
哲学的虚構論の検討

筑波大学
図書館情報メディア研究科
2019 年 03 月
鈴木　友里亜

目次

1．序論　……1
1.1．はじめに　……1
1.2．本研究の目的・方法　……1
1.3．背景および先行研究　……1
1.3.1．読書と知識獲得について　……1
1.3.2．虚構について　……3
2．ルイスの可能世界論　……4
2.1．反事実的条件文の分析　……4
2.2．ルイスによる可能世界虚構論　……6
3．ライアンの虚構論　……8
3.1．中心移動　……9
3.2．虚構のやり取りの規則　……11
3.3．到達関係　……14
3.4．最小離脱法則　……18
4．ライアンの虚構論に対する補足　……20
4.1．最小離脱法則の逆用　……20
4.1.1．最小離脱法則と到達関係の再解釈　……20
4.1.2．最小離脱法則の逆用　……21
4.2．様相的知識の知られ方　……23
4.3．世界間の距離と到達関係　……25
4.4．文学理論から―間テクスト性と分裂存在論　……26
4.4.1．間テクスト性　……26
4.4.2．分裂存在論　……27
4.5．ライアン虚構論への批判とその反論　……28
4.5.1．河田“語る行為の存在論”におけるライアン批判　……28
4.5.2．岩松の“物語論の新展開と可能世界意味論”におけるライアン批判　……29
4.5.3．両者への反論　……30
5．読書感想文の分析　……30
5.1．分析対象の選定　……30
5.2．分析の方法　……36
5.3．分析結果　……38
5.3.1．第 63 回青少年読書感想文全国コンクールの作品の分析　……38
5.3.2．第 62 回青少年読書感想文全国コンクールの作品の分析　……58

5.3.3. 第 61 回青少年読書感想文全国コンクールの作品の分析 ……81
5.4. 分析結果のまとめ ……109
6. 考察 ……110
6.1. 分析結果への考察 ……110
6.2. 他の理論への親和性 ……111
7. 結論 ……112

参考文献一覧 ……114
分析対象文献一覧 ……116

1. 序論

1.1. はじめに

読書をする時、我々は様々な本を読み、内容に応じ様々なものを得ると考えられている。それらは単なる個人の所感にとどまる場合もあれば、何らかの出来事の疑似体験であったり、現実世界に対応する知識であったりする場合もある。

我々が読む本の中には現実にあったことではない、虚構の話が書かれた作品もある。我々はそのような作品からも、現実世界で有用な知識を得ることがある。現実ではないことについて述べられたものから、我々はどのようにして現実の知識を得ているのか。

本稿では、虚構的作品から得られる現実世界についての知識に対して、それらがどのように得られているのかについて説明が可能な理論を提示し、当理論を実際に用いての分析を行うことで理論の有用性と有効範囲について考察したい。

1.2. 本研究の目的・方法

本稿では、虚構的作品からの現実世界ついての知識獲得に対しての説明が可能な理論を、ライアンの虚構論をベースに展開する。更にその理論に基づき実際に虚構的作品についての読書感想文の分析を行うことで、理論の有用性と有効範囲について考察する。

理論の構築に関しては文献調査、読書感想文の分析に関しては感想文中の知識獲得が見られうる箇所に対して理論を適用する形でそれぞれ行う。

1.3. 背景および先行研究

1.3.1. 読書と知識獲得について

読書が知的活動の一つと見做されており、読書と知識獲得を含む学習の概念が一般的にも結び付けて考えられている事は、読書教育、読書推進運動という言葉を鑑みても明らかであろう。

『読書教育を学ぶ人のために』[1]において山本は「読書とは、①自分の内なる世界を「築く」ことであると同時に自分の内面に「気づく」ことであり、②知識を得るためだけでなく、それ以上に私たち人間に多くの作用をもたらすものでもあり、③情報をそのまま受け止めるのではなく、表面にとらわれずに対象の質を見極める力や、それらの情報を取捨選択する基準と判断力を養う行為でもあります。」[2]とし、読書の知識や情報を得るといった効果は前提として、それ以上の効能を示している。ここでの読書材は特には限定されておらず、故に虚構的作品の読書をとりわけこのような効能のないものであるとする理由は存在しない。

読書の効能は、司書科目の一つである「読書と豊かな人間性」においても論じられている。同科目のテキストである『読書と豊かな人間性』[3]において長崎は、読書の目的として「読書は情報を得たり、知識を蓄積したりする」[4]とした上で、さらに特にストーリー性のある物語（ただしここでのストーリー性は小説は勿論だが、科学書や歴史書、説明文などにおける文脈と書き手の伝達意図を含んでいる[5]）の読書を指して、「・書物の中から、感動を受け

たり、思想を学んだりして、人格形成を行なっていく。・未知のことに対して興味を持ち、実際には体験し得ないことも書物の中で知ることができる。・物語の中の人物と自分を一体化して物語を楽しむ。・物語を読むことによって、さまざまなことを想像したり、自分で物語を創り出したりする。」[6]こととしている。また、同科目の別のテキストである『読書と豊かな人間性』[7]では、黒古が「ヴェルヌの『海底探険二萬里』を読んだ子どもは、まだ見ぬ海の底がいかに神秘と不思議に彩られた世界であるかを、その原子力潜水艦に乗った人々の「冒険」に胸を躍らせながら、「知る」のではないか。また、『小公子』の主人公に自分を重ねて涙しつつ、日本とは異なる 19 世紀末のイギリス貴族のあり方を「知る」ということもあるはずである。」[8]と述べ、特に虚構的作品と「知る」こととの関係を指摘している。

以上のように、読書は学習と深く結びついて理解されており、それは虚構的作品の読書についても原理的には変わらないものである。

一方で、情報や知識の獲得についての研究分野では、虚構からの知識獲得は大きくは論じられていない。

先述の「読書と豊かな人間性」のテキスト 2 冊において、児童小説や児童文学といった虚構的作品は、自然科学・人文科学・社会科学、場合によっては芸術やスポーツについての資料も含めた所謂「知識の本」と呼ばれるものとは明確に異なるものとしてジャンル分けがなされている。

岩崎は情報行動における教育学的な研究をレビューした上で、当該分野の課題を「「読書」を「情報行動」の一部としてとらえることができるにもかかわらず，教育学的な研究を概観すると，「読書」と「情報利用」が，そのほとんどで切り離されて論じられていることである。」[9]と述べている。

武者小路[10]は図書館情報学分野における「知識」観を概観した上で、「図書館・情報学では、伝統的に、知識の種類として科学・学術・専門知識を扱ってきており、また情報メディアと関連付けられるような記述可能な知識やモデル化するのになじみやすい知識を扱ってきた」[11]と述べる。武者小路はこの論文において図書館情報学の研究領野を 10 に分けて分析しているが、論文や百科事典との関わりで述べられた知識はあるが、虚構的作品や小説作品との直接の関連が述べられている知識概念は挙げられなかった。

また初期の、特に公立図書館では「フィクション問題」とも呼ばれるべき論争が生じていたという。ロスらの『読書と読者』第 1 章 2 節[12]によれば、1880 年代ごろから 1900 年代半ばにかけて、フィクションはその他の「真面目な図書」に質的に劣り、公立図書館でのフィクション蔵書の貸し出しは単なる娯楽のための資料提供をしているとの批判を受け、フィクション蔵書の禁止・減少やフィクションの貸出冊数減少のための方策、フィクションに対する厳しい選書などの対応が取られたという。更に、当時のフィクション擁護の主張は「小説は踏み台で、読者が高い水準の資料に移行するのを助けるもの」という文脈で行われており、ロス自身も「いまや公立図書館調査から 50 年以上が経過しているが、反対者の主張が通り、リクリエーションの資料提供を行うという目標は完全に認められてきた」[13]、「楽し

みのための読書が自信に満ちた読者を育成するのに重要だとする研究が蓄積されるにつれて、態度は変化しつつある」[14]と節を締めくくる。あくまで娯楽としてのフィクションが市民権を得たに過ぎず、現在に至るまで、虚構的作品そのものの持つ知的価値は積極的に認められてはいないと言えよう。

これらの現状を踏まえ、本稿では、虚構的作品の知識資源としての可能性を提示し、虚構的作品からの知識獲得について論ずるための下地とするべく、我々の虚構からの知識獲得の過程について分析可能なモデルについて検討を行う。

1.3.2. 虚構について

虚構、すなわち事実ではない「作り事の話」についての考察は、哲学分野において、古くはプラトン、アリストテレスの時代から「ミメーシス」として行われてきた[15]。

哲学分野においてはこれまで、虚構に対し、明確で統一的な定義づけは行われていない。しかしながら、虚構とは何であるのかという意味論、虚構的存在とは何であるのかという存在論の観点からこれまでに様々な研究が行われている。これらの近現代における哲学的虚構研究については三浦の『虚構世界の存在論』の第 4 章、「虚構的対象とは何なのか 諸説概観」[16]に詳しい。

本稿で主に取り上げるライアンの虚構論は、ルイス、サール、ウォルトンの虚構論に由来するものである。本文中で後述するルイスは可能世界論に基づいた虚構論を唱えているが、存在論、意味論の両面に展開する可能世界論に基づく虚構の分析では、虚構的存在は実際の世界ではなく可能世界に存在しているとされた[17]。サールの言語行為論による説明においては、主に意味論の面から理論が展開され、虚構は言語行為を行う「ふり」をするものであるとされる[18]。同じく意味論的な展開を見せる、ウォルトンが提唱する虚構の「ごっこ遊び説」においては、虚構とは作者と鑑賞者の間で行われる「make-believe」であるとされ、虚構のゲームが現実の感情に及ぼす影響について考察がなされている[19]。

日本国内における虚構論としては、三浦の「虚構実在論」[20]や、清塚による視覚的フィクションをも含めた考察[21]が有名である。

これらの先行研究については、いずれも虚構や虚構的存在を分析対象としたものである。中には「虚構的作品の知識」として、虚構的作品そのものについて、キャラクターの属性情報や行動、心理等についての真偽を取り扱うものもある。しかしながら、本稿では虚構の中だけにとどまる虚構についての知識ではなく、虚構的作品から取り出される現実世界で利用可能な知識と、読者たる我々との間の作用について考察することを目的としている。この点で、哲学分野の先行研究とは一線を画すものである。

また文学分野におけるテクスト論にも虚構的作品の機能や読者との相互作用を検討する領野が存在する。中でもイーザーは、「虚構は現実についてなにかを我々に伝達する」[22]として、虚構的テクストを非-現実としてのものではなく現実を補完・再構成して伝達するものとして解釈するテクストモデルを提唱した。イーザーは、虚構的テクストは先行するテク

ストや社会規範ないし歴史的規範、テクストが生み出された当時の社会的文化的コンテクストなどに関連した知識を取り込んでいるとしている。イーザーはそれら現実世界の知識の断片をレパートリイと呼び、それらはテクストに取り込まれることによってある種の変形を受け、伝達にとって本質的な条件を成り立たせると述べた。しかしながらイーザーの分析における知識はあくまでテクストが読者との相互作用を及ぼす際の、虚構的テクストの持つ一要素としてのものに留まり、読者が虚構的作品から現実世界についての知識を再抽出し、現実世界に利用するという所には至っていない。

また文学分野の研究で、虚構的作品から現実世界について得られるものを「情報」であるとして、現実世界についての情報と虚構的作品との関連について述べた論文が、Colatrella の“Information in the Novel and the Novel as Information System”[23]である。しかしながらこの研究は、虚構的作品を Dickens の Little Dorrit と Drabble の Radiant Way 三部作に限った事例研究であり、全ての虚構的作品に一般化できるものではない。

以上に見て来た通り、これら哲学・文学の先行研究において、虚構的作品から読者が抽出する現実世界についての知識という観点から、知識資源としての虚構的作品の可能性を検討したものは存在しない。この点において、本稿は先行研究とは異なるものであり、虚構的作品の研究領域において新たな視点から貢献できると考えられる。

2. ルイスの可能世界論

2.1. 反事実的条件文の分析

ルイスは反事実的条件文の分析を可能世界の理論を用いて行っている。ここではルイスの著作『反事実的条件法』[24]より本論に深い関わりのある部分、すなわち、ルイスの反事実条件文の分析とそこでの可能世界の扱い方についてまとめる。

ルイスは必然性演算子と可能性演算子とを、諸可能世界にわたって制限された普遍量化子のようにふるまう演算子であるとしている。そして、特定の種類の必然性は、特定の制限を満たすすべての可能世界における真理であるとした。この「特定の制限を満たす可能世界」を到達可能と称し、これはそれらの可能世界がまさに考察している類の必然性と結び付いた制限を満たすことを意味するという。ルイスは必然性の定義について「必然性はすべての到達可能な世界における真理であり、異なる種類の必然性は異なる到達可能性制限に対応する」[25]と述べている。これに対して可能性とは、いくつかの到達可能な世界における真理であり、課せられる到達可能性制限は、課せられる類の可能性に依存しているという。

これらに基づきルイスは、必然性演算子□、可能性演算子◇、ある種の厳密条件文と対応する形で、各々の世界 i に対して世界の集合 Si を割り当て、これを i から到達可能な世界の集合、すなわち i の周りの到達可能性の圏域と呼んだ。そして、可能・必然のそれぞれの演算子と厳密条件文について、以下のように定義している。

□Φが世界 i で真であるのは、Φが i の周りの到達可能性の圏域 Si でくまなく真であ

る時、その時に限る

◇Φが世界 i で真であるのは、Φが i の周りの到達可能性の圏域 Si におけるどこかで真である時、その時に限る

厳密条件文□（Φ⊃Ψ）が世界 i で真であるのは、Φ⊃Ψが i の周りの到達可能性の圏域 Si でくまなく真である時、つまりΨが Si におけるすべてのΦ世界で真である時、その時に限る[26]

反事実的条件文は可能世界の比較可能な類似性に基づくある種の厳密条件文と関係づけられるという。反事実条件文Φ□→Ψが世界 i で真であるのは、Ψが特定のΦ世界で成り立つとき、その時に限られるが、ルイスはこのときすべてのΦ世界が問題になっているわけではないという。これについてルイスは、しっぽの無いカンガルーの例を挙げ以下のように説明している[27]。

「もし仮にカンガルーがしっぽを持っていなければ、ひっくり返るであろう」という文は、カンガルーが松葉杖をついて歩き回ったり、直立していたりという、我々の世界からはるかに遠い可能世界を全く考慮しなければ、我々の世界において真（あるいは偽）である。この反事実条件文で意味されているのは、物事が我々の世界において現にある事とほぼ同じである時に、カンガルーがしっぽを持っていなければひっくり返るであろうということである。であれば、カンガルーがしっぽを持たず、その他のあらゆることが現実と同じである世界に関心を限るのが最良であるように思われる。しかしそのような世界は存在しない。何故なら、「しっぽがない」という事実は、それに伴い足跡や遺伝子構造などの点で現実世界との差異を生むためである。類似性と相違性はトレードオフの関係にあるため、一つの観点で現実世界との正確な類似性を求めすぎれば、他の観点で過度の相違性を被ることになるという。これを踏まえルイスは、「反事実的条件文は、世界の類似性――類似性の観点とは反目するどこかバランスの取れない相違性の観点を持つ全体的類似性――によって決定された到達可能性割り当てに対応する厳密条件文のように見える」[28]と述べている。

また、ルイスは貫世界同一性の問題について、二つ以上の世界に住まうものなど存在しないとし、貫世界同一性の代理となるものとして対応者関係を挙げている。この対応者についてルイスは、「一般には、あるものは特定の世界での対応者として、内的性質と外的関係の重要な観点においてそれと十分密接に似ており、そこに存在する他の物事の場合と同様にそれと密接に似ているところの、そこで存在する物事を持つ」[29]と言い、「それらは個別の世界にこそ住まっていないが、あらゆる世界の基準からは同様のものとして存在する」[30]としている。この対応者関係において、ルイスは対象の持つ可能的性質については「或るものがしたかもしれないこと（または、そうであったかもしれないこと）は、それが身代わりとなってすること（または、そうであること）である。そして、このことがその対応者がすること（または、そうであること）である」[31]、必然的性質については「或るものについて本質的なことは、それがその全ての対応者と共有していること、それがいかなる世界であれ、

身代わりとなって欠くことがないことである」[32]としている。

2.2. ルイスによる可能世界虚構論

ルイスは反事実的条件法の分析との類似性に基づき、虚構についての分析をも行っている。彼が着目したのは主にフィクションにおける真偽に関する議論であった。以下はルイスによる「フィクションの真理」[33]をまとめたものである。

ルイスは「然々の物語において……」という「虚構オペレータ」を設定し、虚構文はこの虚構オペレータの省略された形だとしている。これについてルイスは、「『物語 f において、Φ』というオペレーター付きの文が真であるのは、Φが、ある集合に属する全ての可能世界の中で真であるとき、またその時のみに限る」[34]とし、この「ある集合」は物語 f によって決定される、すなわち物語 f が事実として語られているような諸世界であると述べている。

またルイスは、「物語を語るということは、ふりをするということである」[35]とも述べている。物語の語り手は自分が知っている事実について述べ、自分が知っている人物について固有名による名指しという典型的手段によって語ろうとする。しかし物語がフィクションであるならば語り手は現実にはこのようなことを行っているとは言えず、そうするふりをしているということになる。この「ふり」に騙される人は少なく、またそもそも語り手自身も誰かを騙す意図をもって「ふり」を行う訳ではないという。

以上のようなフィクションへの考察を通し、ルイスは「我々が考察すべき世界は、フィクションとしてよりむしろ、事実として物語が語られるような諸世界である」[36]と述べる。そしてフィクション中の真理についての推論が反事実的推論に酷似しているとし、自らの反事実的条件文への分析に従って、以下のような分析を行っている。

> 「物語 f においてΦ」がトリヴィアルでなく真であるのは、f が事実として語られ、かつ　Φが真であるようなある世界が、 f が事実として語られていながらΦが真でないようなどんな世界よりも、全体的に見て、我々の世界とより類似している時、かつその時のみである。
> また、この文がトリヴィアルに真であるのは、f が事実として語られるようないかなる可能世界も存在しないとき、かつその時のみである。[37]

この分析によれば、ある物語が事実として語られる諸世界の中に我々の世界と最も類似しているようないくつかの世界があるならば、それらがその物語の諸世界という事になる。そして、物語の中の真偽については、そのような諸世界を通じて真であることが物語の中で真、偽であることが物語の中で偽、ある所では真だがある所では偽であるようなものは、物語の中では真でも偽でもないということになるとルイスは定めている。

一方でルイスは、この分析の弱点も提示している。先の分析では、ルイスは「その前提を真とすることを明示するものがあるからではなく、むしろそれを偽とするものが何もない」

[38]として、可能世界の分析を経ることで現実世界の背景知識をフィクションの世界に持ち込んでいる。この場合、その分析の下では、あるフィクションにおける真理は現実世界の偶然的事実に依拠していることになる。この時依拠される偶然的事実が現実世界で一般によく知られているようなものの場合にはルイスの分析は非常にうまくいくが、現実世界においてあまり慣れ親しまれていないような偶然的事実に基づくとなると厄介だとルイスは述べる。その例として、ルイスはガンスによる議論を挙げている。

> 「まだらのひもの冒険」において、シャーロック・ホームズは、被害者はベルのひもを伝ってきた、ラッセルの毒ヘビに殺されたのだと推理して、殺人事件の謎を解いた。だが、ホームズは、ラッセルの毒ヘビが、動物を締め殺せるような種類のヘビではなかったことには、気づいてはいなかった。このヘビは、従って、アコーディオンのジャバラのような動きはできなかったし、ひもを伝わることもできなかった。よって、そのヘビは被害者に他の仕方で近付いたのか、あるいは事件は依然謎のままであるかのいずれかになるのである。[39]

ルイスは、先の分析が正しければこのガンスの分析も正しくなるとする。すなわち、ホームズの物語が事実として語られている世界の中で、ホームズの推理が正しい世界よりも、ヘビが何か他の仕方で被害者に近づいた世界の方が我々の世界により近く、故にホームズは失態を晒したことになる、というのである。

この点に対し、ルイスは論中において、中立を守り、両者の要求を満たす立場をとると宣言している。すなわち、先の分析はガンスのような立場を支持するものとし、その対として「我々の世界に関して殆ど、あるいはまったく知られていない事実はフィクションにおける真理とは無関係である」[40]とするような立場を支持するための案を提示している。そこでは物語の適切な背景を、現実世界の真理ではなく、フィクションが創られた共同体の中での公然の諸信念に求める。

ある共同体の中で公然の諸信念は各々独立に実現可能であり、また同時に実現可能でもあるとすると[41]、その共同体には一つの可能世界の集合を割り当てることができる。これをその共同体の「共有信念世界」と呼び、公然の信念がすべて真となる世界の全体であるとする。これを利用した場合、考察すべきは「フィクションが事実として語られる諸世界の集合」と「フィクションが創られた当時の共同体の共有信念世界の集合」の二つであり、前者はフィクションの内容を決定、後者は一般的信念の背景を決定する、という事になる。このことに基づき、ルイスは以下のように分析を行う。

> 「物語 f では、Φ」がトリヴィアルでなく真であるのは、次の時、また次の時に限る。すなわち、w が f が語られた当時の共同体の共有信念世界の一つであるときはいつでも、f が事実として語られΦが真である世界が、f が事実として語られてかつΦが真で

ないような如何なる世界よりも、全体として、世界wに類似している時、かつその時のみである。
また、f が事実として語られるような如何なる可能世界も無い時、かつその時に限り、それはトリヴィアルに真である。[42]

これによりルイスの理論は、フィクションにおける真理について、我々の世界の事実に厳密に基づくことを支持する立場と、殆どないし全く知られていない事実は排除して考える立場とに対応できるようになった。しかし、これらの分析でも解決できない問題点を、ルイスは続けて自ら挙げている。それは不可能なフィクションに関する問題である。

ルイスは、「フィクションが事実として語られるような世界が存在しないとき、かつその時に限り、そのフィクションは不可能である」と定めた。そして、考えうる不可能なフィクションとして、筋自体が不可能である場合と、筋自体から当の事柄を知ったり語ったりする立場にいる人が誰もいないことが帰結される場合の二つを挙げる。これらについて、先のルイスの二つの分析のどちらを採用した場合でも、不可能なフィクションにおいてはいかなるものもトリヴィアルに真であることになる。

しかし、フィクションが作者の不注意により不可能になってしまう場合もある。ルイスの例によれば、ホームズ一連の作品の中で、ワトソンが昔戦場で受けた古傷の位置は物語ごとに変わっているという[43]。しかし、それを理由にホームズの物語の中ではどんなことでも真となるとすれば、ホームズの物語は成り立たなくなってしまうだろう。ルイスはこの例を「不可能の程度の軽いフィクション」と呼び、このような場合に何が真であるのか、以下のように説明している。

まず、元々のフィクションから、オリジナルに最も近い幾つかの可能な改訂版を考える。そうして、フィクションにおける、先のトリヴィアルでない真理の分析のいずれかに従って、これらの改訂版のいずれにおいても真であるものが、オリジナルでの真であるのだとする。[44]

ルイスはこれを先ほどのワトソンの古傷の例に適用してみせている。ドイルはワトソンの傷をいろいろな場所においたため、改訂版はその各々を正しいとする複数のものが出来ることとなる。それらに共通する傷の位置は存在しないことから、ワトソンの傷の位置に関して確定的に真であるものは何もないことになるという。しかし一方で、ドイルは古傷を決して左足の親指には置かなかったことから、どの改訂版においてもワトソンの左足の親指に傷は無く、故にワトソンの古傷は左足の親指にあるのではないという事は真として述べられるとしている。

3. ライアンの虚構論

ライアンの虚構論は、ルイスの可能世界虚構論をベースとし、サールの言語行為論やウォルトンのごっこ遊び論の要素を取り入れたものとなっている。

以下ではライアンの著書『可能世界・人工知能・物語理論』[45]の第 1 部において展開される虚構論について概観する。

3.1. 中心移動

ライアンの論は虚構的テクストに議論の焦点を当ててはいるものの、その理論に乗っ取ればあらゆるテクストについて分析を行うことができるようなモデルを提示している。

ライアンは、テクストを解釈するにあたり、複数の世界とそれを取り巻く可能世界宇宙の体系を想定する。

まずは我々の住んでいる、我々にとっての現実世界である AW（Actual World）を中心とする現実体系。そしてテクストによって出現させられる世界、テクストの実際の世界としての TAW（Textual Actual World）を中心としたテクスト宇宙。さらに、テクストが表象している、その元となる世界である TRW（Textual Reference World）を中心とした指示対象宇宙である。

ライアンはルイス型の可能世界論に則っているため、言及される世界はどれも《実際の世界》である。そして我々の世界についてそうであるように、各世界の周辺は無数の可能世界が取り巻いており、様相体系を作っている[46]。各々の体系における《現実の世界》としてその体系の中心となるのが、AW、TAW、TRW のそれぞれの世界というわけである。我々にとっての《実際の世界》は我々の住む世界、即ち AW だけである。TAW や TRW は我々から見れば代替可能世界（APW）のひとつと見ることができるが、一方で TAW や TRW 自身が中心となるような可能世界宇宙の体系では、それぞれがその体系の《実際の世界》となるのだ。

ライアンの理論において我々が虚構を鑑賞するとき、中心となるのが「可能世界宇宙の中心移動」という概念である。

ライアンはルイスの可能世界論に対して、「実際の世界をひとつの様相体系の中心と見なし、諸 APW は実際の世界の周囲を回る衛星であると考えると、宇宙総体の中心はその諸天体のひとつひとつに移動することができる」と述べている。我々の世界から見ればひとつの APW に過ぎないような世界であっても、その世界に住む住人からすればその世界こそが彼らの《実際の世界》であり、むしろ我々の世界こそが APW である。我々にとっての可能世界宇宙の中心、本当の《実際の世界》は我々の住んでいる世界だけだが、それ以外の世界を《実際の世界》として選び出すことを、ライアンは可能世界宇宙の中心移動と呼んでいるのだ。ライアンによれば、我々が虚構を鑑賞する際にはこの中心移動が起き、それによって鑑賞者は現実世界を中心とした体系から TRW が中心である体系へ、旅行者として押し入れられるという。

しかし我々にとって《実際の世界》は我々の住む世界のみであるし、ルイスの理論によれ

ば世界同士はいかなる時間的・空間的因果関係も持たないという。では我々は虚構の世界とどのように関係を持っているのか。この点に、ライアンはウォルトン[47]のごっこ遊び理論を取り入れている。

ウォルトンの「ごっこ遊び〔make-believe〕説」は、虚構作品の鑑賞を子供のごっこ遊びをモデルに解釈したものであり、「ふりをする」という行為を虚構の受け手の側にまで適用し、むしろそちらをこそ虚構を空想する活動の本質であるとした理論である。これを踏まえライアンは、虚構の鑑賞者はテクスト宇宙が実際には我々の現実体系の架空の代替物であることは承知の上で、虚構ゲームに参加している間は、テクスト宇宙における《実際の世界》、即ち TRW こそが本当の《実際の世界》であるかのように振る舞うと述べる。

ライアンは、虚構を可能世界を用いて定義するための基盤として、次のような公理を定めている[48]。

(1) AW はひとつしかない。
(2) テクストの送信者（作者）はつねに AW に位置する。
(3) いかなるテクストもひとつの宇宙を投影する。この宇宙の中心には TAW がある。
(4) TAW は TRW というもうひとつの世界の正確な像として呈される。TRW は（ほんとうに、さもなければごっこ遊びにおいて）TAW とは独立して存在するとされる。
(5) いかなるテクストにもひとり、内包された話者〔implied speaker〕（テクスト言語行為の適切性条件〔felicity conditions〕を満たす個人として定義される）がいる。テクストに内包された話者はつねに TRW に位置する。

ここで（4）について、テクストによって作り出される世界像 TAW は原則として虚構の指示対象世界 TRW を正確に反映しており、両者は区別出来ないものとして扱われるが、内包された話者（implied speaker　: IS）が嘘を吐いたり、精神的に不安定であったりする「信頼できない語り手」である場合、TAW と TRW の乖離が起こるとされる。

これら AW・TAW・TRW の差異に基づいて、ライアンはミメシス言説[49]を以下のように分類する。[50]

	TAW＝AW	AW=TRW	TAW＝TRW	AS＝IS
非虚構の正確な言説	＋	＋	＋	＋
間違い	－	＋	－	＋
嘘	－	＋	－	－

偶然真になってしまった嘘	＋	＋	＋	－
通常の虚構	－	－	＋	－
実話もの	＋	－	＋	－
虚構における信頼できない語り	－	－	－	－

AW＝実際の世界　AS＝実際の話者

TAW＝テクストの《実際の世界》　IS＝内包された話者

TRW＝テクスト指示対象世界

図 1　「図 1　ミメシス言説の分類」[51]

1 列目の TAW＝AW、3 列目の TAW＝TRW における等号は両項の厳密な同一ではなく相似、両立を示している。2 列目の AW＝TRW は、話者がテクストによって AW を記述しようと意図している際に＋価がつくものであり、両者の厳密な同一を表すものである。4 列目では両話者が一致した際には＋価、乖離していれば−価がつく。

ライアンのこの分類では、非虚構は AW を指示するもの、虚構は TAW と見分けのつかない TRW を指示するものとして区別している。また、虚構と非虚構かつ非事実の言説（即ち嘘や間違い）との差も表しており、非事実言説の場合では語り手は AW に立脚したまま代替物である APW を喚起し、AW での真実を表すのに使われる。即ち、虚構では中心移動を伴うのに対し、非事実言説の場合は可能世界体系の中心は AW のままであり、中心移動は起こらないのである。

3.2. 虚構のやりとりの規則

ライアン、および彼女が元にしているルイスの虚構論においては AW と TRW の二重性に着目して虚構的作品を鑑賞する身振りへの分析を行った。ライアンはこの「二重世界・二重意図・単一構造」[52]こそが虚構伝達行為を構成するものであるとし、発語内行為的な視点からさらに詳細な枠組みを設定している。

AW に位置する虚構の作者は、擬装によって TRW の構成員（内包された話者、代理話者：IS）となり、虚構内の事物についての事実言説を行う。これは無人格叙述による虚構作品でも同様で、その場合はダミーの代理話者を設定することになる。

言語行為には受信者が必要であるため、二重構造の語り手の設定に伴い、聞き手及び代理の聞き手についても措定する必要がある。TRW において聞き手が不可視である場合、代理の聞き手もダミーで埋めることになる。

以上を踏まえ、ライアンは虚構のやりとりについて以下のような定式化を行なっている[53]。

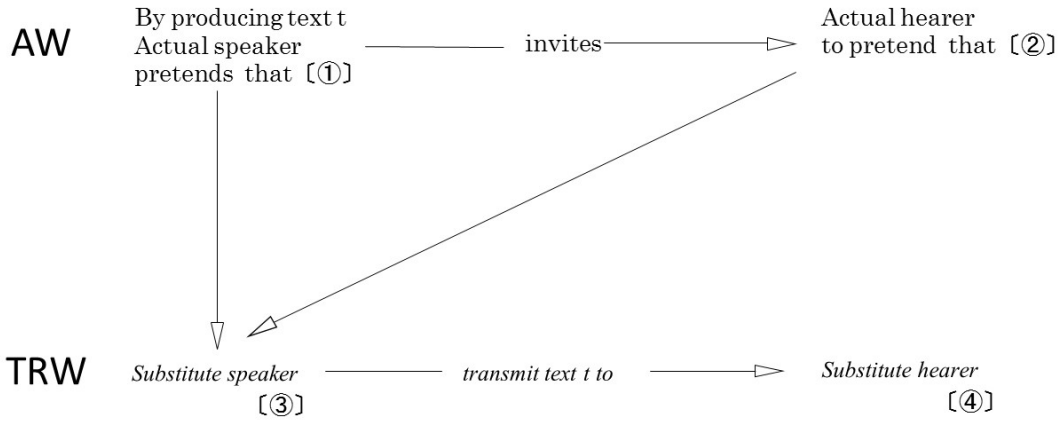
話者 S はテクスト t を発話することによって、以下のことを意図する。

(a) AW とは違うひとつの世界 TRW に位置する代理の話者・聞き手の組を S‘・H’とするとき、聞き手 H が、テクスト T とは H’に向けられた S’の発話である、という擬装をすること。

(b) 同じ名によって明示的に指示されない限り、S’が S と対応関係にない、と H が受け取ること。

(c) H が S’・H’間のやりとりをもとに TRW の匿名の一員（H’が個人化しない聴取者なら、この一員は H’に含まれる）として自己投影することによって、TRW を中心とする現実体系を「ごっこあそびで信じる」こと。

この規則を図示したものが以下である。[54]



〔この図は①→③→④と読めば「テクスト t を産出することによって，実際の話者は**《代理話者が代理の聞き手にテクスト t を伝達しているのだ》**という擬装をする」，①→②→③→④と読めば「テクスト t を産出することによって，実際の話者は**《代理話者が代理の聞き手にテクスト t を伝達しているのだ》**という擬装をするように実際の聞き手を誘う」と読むことができる。〕

図 2 「図 6 虚構伝達の構造 ヴァージョン 3」[55]

代理話者について、ライアンはその現れ方には存在論上の２つの型があるという。一つには個人化し人格を持った語り手、もう一つは無人格の語り手である。

個人化した語り手は作者と登場人物の心の間に介在させられる自立した心として機能し、その私秘的領域における諸世界が、テクスト宇宙の必須部分を形成するという[56]。このため、語り手の私秘的領域を検討しないとテクスト宇宙の把握が不完全になってしまう。また存在論的観点から言えば、非本質的に不完全なものとして記述されており、あらゆる性質ｐについて、「語り手はｐを持つか持たないかである」という公式が TRW において暗黙に成立する一方、どちらが真かをテクストが特定しているかどうかは無関係であるとする。この語り手は、他の登場人物と同様に、「AW においては不完全だが TRW において完全であり、客観的に不完全だがごっこ遊びの中では完全な存在」[57]であるという。

一方無人格の語り手は、純理論的根拠によって存在が措定されるという。この語り手は「発話の誠実性条件を充たす責任を作者が負わなくても良いようにするためだけに措定される」[58]という。無人格の語り手は存在論的に根本的な不完全性を持ち、AW においても TRW においても完全性を得ることは無いとされる。

多くの虚構物語作品では、代理話者は「内包された話者」と同一であり、またこれが発話における誠実性条件を満たす主体となる。ただし詐術的な語り[59]の場合には、代理話者と内包された話者が乖離するという。内包された話者は己をそう見せたい、そうあってほしいように語るが、代理話者はその全人格、すなわち虚偽の語りを行うことを決めた人格となる。しかし代理話者はいずれにせよ、テクスト発話の誠実性条件を満たす個人的責任を負わなければならないという。

代理の聞き手について、代理話者が 2 層に区分されたのに対して、聞き手側は①内包された聞き手、②代理の聞き手あるいは《聞き手本人》、③擬装行為によって実際の聞き手が引き受ける身分の 3 層に区別される。

①の内包された聞き手は、語り手の言説に内包され、表現された命題を無批判に受け入れる立場とされる。②の代理の聞き手とは、代理話者によって話しかけられる聴衆とされ、非虚構伝達における受信者の諸類型を複製したものがこれになりうるという。③の実際の聞き手が引き受ける身分について、これは読者が TRW の一員として自己投影をしなければならないが故の役割である。何故そのような自己投影が必要かと言えば、指標的定義によれば我々は自分が位置している世界だけを《実際の世界》であるとみなすことになる一方、虚構ゲームを行うという事は「TRW が AW ではないと承知の上で、テクストをひとつの《実際の世界》TRW の表象と見なす」[60]ことであるとするためである。

無人格の語りにおいては、語り手は信頼でき、その発話は実際の聞き手が立脚点とする素性を持った虚構世界の構成員も含めた公衆一般に向けてなされる。その為 3 つの聞き手側の構築物は一致することとなるという。また、公衆一般に向けた人格を持つ信頼のおける語りの場合も、これと同様に 3 種の聞き手が一致する。この場合、実際の聞き手は正当な聴取

者のひとりとして、公衆の中の匿名の一員に自己投影を行う。

公衆一般に向けた、人格を持つ、信頼できない語りの場合は、①と②の間に乖離が起き、②と③は一致するという。①の聞き手は語られたことをそのまま受け入れるが、②と③の聞き手は語り手の嘘や誤りを見抜く。

劇や書簡体小説など代理話者の発言が一個人に向けられる場合は②と③が乖離する。代理の聞き手は TRW の一個人であるが、実際の聞き手が引き受ける役割はあくまで TRW の匿名の一員にとどまるという。これは、実際の聞き手は受動的観客の役を演じなければならないのに対し、発言の受け取り手である特定の個人の身分を引き受けてしまっては、実際の聞き手が登場人物、すなわち筋の中の動作主になってしまうからである。これについてライアンは「固有名により特定できる一個人に発話が向けられるとき、TRW における読者の役割は、やり取りを外から見る目撃者の役になる」[61]と述べている。

さらに、代理話者が特定の個人としての聞き手を騙そうとするとき、①、②、③の全ての聞き手が乖離することになる。虚構において話者である登場人物 a が登場人物 b を騙そうとしている場合、①は内包された話者 a に対しその言うことをそのまま信じる（ことが想定されている）b、②は b を騙そうと目論む代理話者 a に対してそれを信じるかどうかは別にしてその正当な聞き手である b、③は二人のやりとりを傍受する、読者が同一化している TRW の匿名の一員、となる。

以上がライアンによる虚構的作品とその受容についての解釈モデルである。

次項からは、可能世界宇宙の中心移動の際に重要になる到達関係と最小離脱法則について詳しく見ていく。

3.3. 到達関係

到達関係はそもそも様相論理の分野で可能世界論が扱われていた頃からの用語である。その説明は三浦[62]による「『世界 w1 から w2 に到達関係がある』とは、世界 w2 で真であることは何でも w1 において可能である」[63]、「世界間の類似度の概念で言い直せば、（中略）w1 への w2 の類似度が 0 ではない、ということ」というものが理解しやすい。到達関係における「到達」とは基準となるある世界から他の世界へ向けての概念的な到達であり、そのための条件が論理的可能性、及びそれを見出せるだけの類似度であると言える。

ライアンはこの到達関係を細分化し、虚構の分類体系として応用する。ライアンは AW と TAW の間の到達関係に着目し、単なる論理的両立関係にとどまらない、より多様な類型を検討している。中でもまず問題とすべきものとして、以下の 9 つを挙げる[64]。

（A） 性質の同一（A／性質）――TAW と AW とに共通の《もの》が同じ性質を持つとき、TAW は AW から到達可能。

（B） 《もの》の目録の同一（B／同目録）――TAW と AW とが同じだけの《もの》を持つとき、TAW は AW から到達可能。

(C)　《もの》の目録の両立（C／拡大目録）――TAW の《もの》の目録が AW の全要素を含み、加えて独自の要素も含むとき、TAW は AW から到達可能。

(D)　年代的両立（D／年代）――AW の構成員が TAW の全史を観察するために時間の移動を必要としないとき、TAW は AW から到達可能（この条件は、TAW が AW よりも時間がたっていないこと、つまり TAW の現在が AW の現在の絶対時間よりもあとではないということ。現在の視点から過去の事実を観察することはできるが、未来には事実はなく、予測があるだけなので、未来に位置する事象を事実として眺めるためには、それが起る時点以後の時間へと移動しなければならない）。

(E)　物理的両立（E／自然法則）――TAW と AW とが同じ自然法則を共有するとき、TAW は AW から到達可能。

(F)　分類学的両立（F／分類学）――TAW と AW が同じだけの種を持ち、種が同じだけの性質で特徴付けられているとき、TAW は AW から到達可能。F の内部で、TAW が自然種についての同じ《もの》の目録だけでなく、人工物についても AW において現在までに見受けられた同じ型のものを含んでいなければならないことを規定する、より厳密なヴァージョン F'というのを別に設けると便利だろう。

(G)　論理的両立（G／論理）――TAW と AW がいずれも矛盾律・排中律を守るとき、TAW は AW から到達可能。

(H)　分析的両立（H／分析）――TAW と AW がたとえば、同じ語で示される対象は同じ基本性質を持つ、というような同じ分析的真理を共有するとき、TAW は AW から到達可能。

(I)　言語的両立（I／言語）――TAW を記述する言語が AW において理解できるとき、TAW は AW から到達可能。

これらの到達関係は、テクストのジャンル分化に深く関わっているという。到達関係とジャンルについて、ライアンは以下のように例示する[65]。

到達関係 AB が揃うと、テクスト宇宙は全てにおいて我々の現実体系と相似することになり、TAW の指示対象は AW ということになる。これには情報伝達を目的とした非虚構的テクストが該当する。また、A の厳密な適用を排除したものが史伝小説やノンフィクションノベルであり、B を犠牲にしたものが架空の話者によるジャーナリスティックな報告や、プラトンの対話篇など（言語行為が架空）となる。

リアリズム小説・歴史小説などでは A を保持しつつも、ものの目録は《C／拡大目録》に置き換えられる。TAW は AW に対応物（分身）を持たない個体を含むが、それ以外は同じ時点で AW にあるものを持ち、共通の構成要素の性質は等しい。この A と C を守る場合には、AW の全構成要素とその TAW における対応物とは TAW 固有の構成要素とどう作用し

合うかという点でのみ異なる。この場合、論理的にはAWはTAWの部分集合になるのであり、AWにおいて真である命題は全てTAWにおいても真だが、TAW固有の個体に関する命題はAWにおいて決定不能となる。

関係《D／年代》を断つ場合、他にどんな関係を保持するかに応じ「未来小説」か「SF」かが決まる。「未来小説」は過去の歴史及び現場から未来の世界がこうなるかもしれないということを見せるものであり、例えばオーウェルの『1984年』などがそれに当たる。未来の世界についての論証が説得力を持つためにはBとD以外の全関係が（場合によってはBも含め他D以外の全関係が）有効でなければならない。SF（ライアン曰く「ほんらいのSF」[66]）の場合は、科学技術が進歩するとどう変わるかに焦点が当てられる。即ち数学的法則や自然法則を守る必要があるため、E、F、G、Hは保持される。そして、未来小説の場合とは異なり、それ以外の全ての関係は絶たれてしまっても構わないという。また、緩い《F／分類学》は守りつつも、F‘という厳密な方に背反するのがSFジャンルのトレードマークであるとライアンは述べる。例えばTAWがAWと同じだけの自然種を含みつつ異なる人工物や個体をも含んでいる場合や、地球における分類学的レパートリーはAWと一致しているが他の惑星が地球外生命体を含んでいる場合などである。我々の物理法則がもはや適用できないような惑星に、宇宙飛行などによって行き着くような場合には、TAWが我々の物理法則を保持する領域とそうでない領域とに分裂してしまっている「分裂存在論」が適用されることになる。分裂存在論については次章で詳しく説明する。

またSFとは逆に、Fが守られ《E／自然法則》が一部破られている場合はリアリズム的ファンタジーとなる。作品例としてはエーメの『壁抜け男』やカフカの『変身』が挙げられている。これらのTAWに住む彼らは我々にも馴染み深い日常生活を送っているが、壁を通り抜けたり、ある朝突然自分が虫に変身してしまったことを悟ったりしうる。

ライアンは「TAWが《G／論理》、《H／分析》、《I／言語》（およびばあいにより《D／年代》）だけでAWとつながるばあい、テクスト内の題材の面できわめて生産的な状況が訪れる。」[67]と述べる。即ちFの撤廃により妖精や霊やユニコーンなどの存在をテクスト世界に導入でき、Eの撤廃により動物が喋ったり人が空を飛んだりすることが可能になるのである。Dが有効である場合、TAWはなんらかの神話的過去に位置することになり、AWとの分類学上の類似は当該の時代に即したものに限定される。またEやFの破棄と同時にcまでも撤廃されてしまう場合がある。その場合、超自然的存在がTAWを徘徊し、奇跡のような出来事も日常茶飯事だが、主要な人物や場所の対応物はAWにも存在する。

G以降の撤廃によって、ナンセンス文学の領域が開けてくる。Gを棄却した場合のナンセンスの事例は2通り挙げられている。一つはpと〜pがひとつのTAW内で両立する場合、もう一つはある2つの選択肢のうちどちらを信ずるべきか決められないようになっている場合である。後者の場合、テクスト宇宙の中心には空白の世界が残る。

Hに違反する場合、「若い年寄り」といった登場人物や「木でできた石」といった存在が登場することになる。しかしこの場合はまだ年寄りを人間として、石を固形物として認識で

きている。H の完全な違反は I の抹消に行き着くとライアンは言う。H の完全な違反とは、例えば馬と名付けられたものが AW におけるコンピューターの全性質を持っているというような場合だが、この場合は AW と TAW は同じ言語慣習に従っていないと見ることができる。

他に I に違反するのが、AW と TAW との分類学的レパートリーが全く重なっていないような場合である。TAW における諸種が AW のそれと根本的に異なっている場合、テクストが自らその語彙の定義を提示しない限りは、TAW における諸種の名称は意味を欠いたままになってしまう。ただし、テクストによる語彙の定義がある場合には、TAW は言語的には到達可能となり、我々の AW と分類学的・言語的重複部を持っていると言うことが出来る。

AW との一切の言語的関連が失われた場合、TAW について何か知ったり語ったりする可能性も消える。これは例えば音響詩のような場合で、この場合はテクスト宇宙という概念そのものがなくなってしまうという。

以上、ライアンの述べる到達関係とジャンルとの関係性をみてきたが、さらに詳細な分析や新ジャンルへの対応のためにはこの 9 つだけでは不完全であるとし、付け加えるべき到達関係の候補として、

> 『歴史的一貫性』――TAW が AW の構成要素を含むだけでなく、AW について一切の年代錯誤を含んでいないとき、TAW は AW から到達可能。
> 『心理的信憑性』――登場人物の精神的性質が AW の構成員の精神的性質であると信じられるとき、TAW は AW から心理的に到達可能。
> 『社会経済的両立』――TAW と AW とが経済法則や社会構造を共有するとき、TAW は AW から到達可能。
> 『範疇的両立』――この名称で、論理学の基本的範疇間の区別の尊重を意味したい。この関係によって《死》や《美》などの寓意的人物を含む TAW と、そのような実体を排除する TAW との意味論的違いを説明できる。[68]

なども挙げている。

ライアンによれば虚構性と AW・TAW 間の関係とは緊密な関係を持つという。非虚構テクストでは両者の関係は、嘘の場合は内密に、間違いの場合は誤って断絶される。この際、皆が真と見做しているものについては嘘をついたり間違いを犯したりは出来ない。そのため、非虚構テクストにおいて TAW が AW から逸脱する場合、両者の関係はテクストの指示対象がその関係を破っているかどうかについて人々の意見が一致しないような領域になければならないとライアンは述べる。

一方虚構の中心移動は公的な身振りであるため、テクストが AW との関係を断っていると読者が思えば、その違反は意図的かつこれ見よがしにされており、故に中心移動によってのみその TAW に行き着くことが出来るということを読者は推定するという。

このように、到達関係による AW・TAW 間の距離測定は虚構性についての信頼できる公平な尺度にはなるが、例外も容易に見つかるため、絶対的な基準にはならないとライアンは述べている。例えば「言語や論理の法則については殆どの人の間で一致を見ているが、基本的な到達関係において最初に挙げられたものほど一致具合に個人差を抱えている」[69]。法則を破った（ように見える）ものがテクスト中に登場したからと言って、必ずしもそれが虚構であるとは限らないのである。

3.4. 最小離脱法則

最小離脱法則とは、「可能世界宇宙の中心移動がなされる際は、現実世界からもっとも近くなるような可能世界へと移動が行われる」という、中心移動の際の根本原則である。

本稿 6 ページでも触れたルイスによる反事実条件文の分析を拡張した虚構の分析[70]について、ライアンは反事実文との分析の類似を強調しつつ、「虚構 f」の概念曖昧性やテクストと TAW・TRW との諸事実との関係に触れないなどの問題点を解消するため、以下のように再定式化している。

> 虚構テクスト f にもとづいて構築された諸様相宇宙の集合 A があり、テクストにない陳述 p がその実際の世界において真であるとする。
> 虚構テクスト f にもとづいて構築された諸様相宇宙の集合 B があり、テクストにない陳述 p がその実際の世界において偽であるとする。
> これら諸宇宙のすべてのうち、すべてを考慮したうえでわれわれの現実体系と最小限異なる現実体系をとる。
> これが集合 A に属するなら p は TRW において真であり、「TRW において p」は AW において真。そうでなければ p は TRW において偽であり、「TRW において p」は AW において偽。[71]

この分析が正しくあるためには、最小離脱法則、すなわち「一番近い宇宙を選ぶ」という手続きが不可欠であるとライアンは述べている。すなわち、我々がテクスト宇宙の中心世界を再構築するとき、反事実的条件文のような非事実陳述の代替可能世界を再構築するときと同じように、自分たちの住む現実世界の表象と出来るだけ近くなるように再構築しているというのである。

ライアンは、現実体系同士の距離は各々の体系の中心となる世界同士の距離に比例するとし、故に個々の世界同士の距離も宇宙全体同士の距離も同じ演算で測ることができなければならないとしている。この「距離」についてはしかし、現実と食い違う命題の数によって単純に測定することはできない。例えばライアンは、「ナポレオンがエルバ島から脱出していなかったなら、セントヘレナ島で死ぬことはなかっただろう」という反事実文に対し、「ナポレオンはエルバ島から脱出しない」「ナポレオンはセントヘレナ島で死なない」とい

う現実とは異なる命題が二つ含まれている世界の方が、「ナポレオンはエルバ島から脱出しない」「ナポレオンはセントヘレナ島で死ぬ」という現実と異なる命題が一つしかない世界より現実との差が小さいと判断するとしている[72]。そして、我々がこのように考える以上、世界や宇宙同士の距離を測るためにはテクスト上の命題だけでなく、論理的に完全で首尾一貫したひとつの環境という文脈を考慮に入れる必要がある、と述べる。個体の性質やそれまでの歴史の流れといった環境を踏まえた上で、与えられたある命題の真理値を変え、その状況から一番予想しやすい道を辿ることで、可能な世界の集合のうち一番近いものに到達できることとなる。

この法則は、AW での知識を利用した虚構に関する事実陳述の真偽の判定にも使用されるという。我々が現実世界を《通常のもの》[73]の領域とみなす以上、テクストに明言されている以上にこの基準から離脱すると、AW と TAW の距離を無根拠に遠ざけることになる。これは最小離脱法則を逸脱することになるため、このようなことを引き起こす陳述はテクストにおいて偽であると見なせるのである。

最小離脱法則の下で指示された現実世界の事物や人物については、ルイスの言うところの貫世界同一性の線で結びつけられた対応物（分身）となるという。このおかげで、われわれは小説に出てくるナポレオンを、ただの同姓同名の何者かではなく、AW のあのナポレオンであると識別できる[74]とライアンは述べている。

以上のような最小離脱法則によって、読者は「世界についての不完全な言語表象から、それなりに包括的な世界を形作ることができる」とライアンはいう。他世界についての言語表象は常に不完全であるため、この法則なしにはテクストからは意味論上の含意のみしか抽出できず、言語使用論上の推論は引き出せないのである。

ただし、この法則の無際限な適用はおおよその虚構ジャンルにとって強力すぎるともライアンは述べている。普遍型の陳述（『x〔複数〕が存在する』）も個別型の陳述（『x〔単数〕が存在する』）もこの法則の作用域に入るとするなら、AW におけるあらゆる種や個体は必然的に TAW の《もの》の目録に含まれてしまう。故にライアンは存在命題については例外として、以下のような規則を設けている。

(1)　TAW を提示している段階に相当する AW 史において、x が AW に存在し、かつ
(2)　種 x に適した環境が TAW に整っている

　とき、「x〔複数〕が存在する」という、x が種を指示する型の命題が、AW から TRW に振替可能となるだろう。さらに、上記 1 および

(3)　AW に属する個体もしくは地理上の位置を最低ひとつ、テクストが TAW の構成要素として名指す

　の両方を充たすとき、「x〔単数〕が存在する」という、x が個体や地理上の位置を指示する型の命題が TRW に振替可能となるだろう。[75]

ライアンはこの最小離脱法則の適用について、「現実世界に出来るだけ近づくように虚構世界を再構築しているのだったら、現実世界の中で情報が欠けている部分を、なにかの虚構の世界にできるだけ近くなるように再構築したとしても不思議ではないだろう」、「虚構として公認されたテクストからも、最小離脱法則を逆用することによって、現実世界についての知識が引き出されることがある」[76]と述べ 、虚構の世界が虚構的テクストにおいて言及された現実世界との差異以外の点においては現実世界と同じように構成されていることを指摘すると同時に、虚構から現実世界に関する知識を獲得できる可能性を示唆している。

4. ライアンの虚構論に対する補足

4.1. 最小離脱法則の逆用

ライアンは、最小離脱法則の逆用によって虚構から現実世界に関する知識を取り出せるとしている。ここではこの「最小離脱法則の逆用」とは何であるかについて鈴木[77]の検討をもとに再考していく。しかしその前に、最小離脱法則と到達関係について見直しておきたい。

4.1.1. 最小離脱法則と到達関係の再解釈

ライアンの理論によれば、我々は通常、最小離脱法則に基づいて、虚構の中心移動先である「テクストに書かれたことが事実である世界のうち、我々の現実世界に最も近い世界」を選択するのであった。しかしライアンによれば、最小離脱法則の準拠枠にはテクスト宇宙も選択できるという。ここから、最小離脱法則の本質とは、「ある世界を選択する際に、何か元となる世界に最も近くなるような選択の仕方をすること」であると言えよう。言い換えれば、我々は最小離脱法則に基づき世界を選択する際には必ず、準拠枠となる世界を一つ（あるいは複数）選択しているということになる。

さて、最小離脱法則に基づき世界を選択すると、準拠枠となる世界に対し両立しうる項目と両立しえない項目とが生まれる。これらの項目による関係性こそが到達関係であり、それらは虚構作品内の表現から読み取られる。虚構作品の鑑賞者は、最小離脱法則と到達関係から推測できる法則に従って虚構世界全体のありようを定めていく。つまり TAW は、テクストから読み取れる事物とそこから類推できる法則に関しては到達関係によって定められ、空白となる部分における普遍的事物は最小離脱法則に基づき準拠枠となる世界に近くなるような形で埋められることで、その包括的な有り様が創られていくことになる。

この作業は虚構の作者にも、虚構ゲームの参加者である読者にも求められる。作者にとっては、準拠枠となる元の世界も到達関係も、一連の虚構テクストの創造に伴って、特に意識せずとも自動的に定まっていくものである。故にルイスの挙げたガンスの例のように、 ラッセルクサリヘビは動物を締め殺せないし紐も伝えないという点について、うっかり違反を行ってしまうという事もあるかもしれない。もっと判定の難しい問題としては、「中世ヨーロッパ風の時代設定をしたファンタジー世界に、当時ヨーロッパにはなかったジャガイモ登場させてよいか否か」などの議論も聞く。これも到達関係のごく厳密な設定に際しての

問題であろう。しかし最終的にはこれらの決定権は作者にある。その決定を読者に「間違い」とみなされる恐れはあるものの、作品が到達関係のどこまでを遵守し、どこまでを破るかを決めるのは作者の特権と言えよう。

だが読者の方はそうではない。作者の想定通り正しく虚構ゲームに参加し、正しい中心移動先の世界での身分を手に入れるためには、作者の設定したものと同じ準拠枠と到達関係を読者自身が設定する必要がある。読者がそれを行うためには、作者がテクストに織り込んだものを読み取る以外の方法は無いだろう。逆に言えば、作者（虚構の送り手）は読者に虚構ゲームに正しく参加してもらうために、ゲームのルールとしての到達関係と準拠枠についての設定を不足なく、また読み手に正確に理解されるような形で作中に織り込まなければならない。ライアンが、「あまりよく知られていない題材をリアリズム歴史小説の作者が取り上げるばあい、確証済みの事実を尊重するのが徳義上望ましい」[78]と述べているのは、この問題への配慮の一例といえる。このような作者の努力により、大抵の場合において読者は殆ど正確に準拠枠となる世界を選択し、到達関係を設定し、最小離脱法則に基づき世界を描き出すことが出来る。

4.1.2. 最小離脱法則の逆用

ライアンが知識を獲得しうるとした「最小離脱法則の逆用」だが、この言葉でライアンが言いたかったのは、TAW が中心となっている宇宙から再び AW を中心に据えなおすという中心移動が想定できる、ということではないだろうか。我々が AW を準拠枠として TAW を設定したように、TAW を準拠枠として AW に重ねるのである。勿論我々の住む AW は（我々が住むという意味において）唯一の現実世界であるため、この最小離脱法則の逆用によって違う世界が AW として選ばれる、などという事は無い。その代わりに、この重ね合わせは TAW と AW との差異を描き出す。到達関係の成立する部分とそうでない部分、両世界において共通のルールによって動く部分とそうでない部分を明らかにするのである。

TAW を準拠枠とするのは、単にここで問題としたい知識が TAW の原産物であるからというだけではない。詳しくは後述するが、ルイスは世界間の類似度の対称性は必ずしも成り立たないとして、「類似性測定の対称性」[79]を否定している。そのため、TAW と AW 双方の関係を定めるためには、虚構を受容する際に定めた AW から TAW への到達関係だけでは足りず、改めて TAW を準拠枠として到達関係を確認する必要があるのである。

TAW から AW に向けた関係性をも考慮することで、両世界の比較検討が可能となる。両世界において同じ原理の働く部分においては、片方の世界で得た導出とその結果は、もう一方の世界でも同様に成立しうる。こうして、世界を越えての知識の輸入が可能になるのだ。

さて、この枠組みの下で考えうる虚構からの知識獲得について、いくつかのパターンを考えてみる。

一つ目は、TRW に残留し再抽出される AW の知識である。ライアンの論に則れば、虚構的作品を受容するのが我々である以上、準拠枠となる世界はたいていの場合において

我々の現実世界である AW（ないしはルイスの言うところの「共有信念世界」）だと言える。そうでなかった場合、すなわち何らかの虚構作品におけるテクスト宇宙を準拠枠としている場合でも、準拠枠となるテクスト宇宙は AW を元々の準拠枠としているのであり、到達関係による変更点以外の余白部分には AW の要素が残留していることになる。この残留部分としてある AW について何かの理由によりテクスト内で言及した文については、本来的には TRW に関して述べた文でありながら AW を示す文としても意味が通るものとなっており、AW における知識としてそのまま利用が可能である。これは作者によるテクストの創造および TAW の設定の際に現実世界から抽出され、テクストの読解によって再び現実世界に還元された知識である。

二つ目のパターンは、もう少し推論的である。我々は虚構から現実世界の知識を得る際、まずは中心移動先の世界で何らかの知識を得る。そして、その知識の根拠となる論理が到達関係による比較を経ても無傷である場合、それは現実世界でも有用であると判断するのである。例えば AW との間に物理的同一性の到達関係が存在する虚構的作品において、探検家が洞窟内で松明に火をつけようとマッチを擦ったら、充満していた火山ガスに引火して爆発、一命は取り留めたが大火傷を負った、という物語、ないしその一場面があったとする。このとき、物語に出て来た探検家や洞窟は架空の登場人物や場所であり、現実世界には対応者となるものが存在しないかもしれない。また、現実世界で洞窟に探検というのも、日常生活では殆どない場面であろう。これらは到達関係に基づけば、現実世界には持って来られない要素である。しかし、ここで得られる知識においては、探検家は「火を起こす人」であれば探検家である必要はなく、洞窟も「風通しの悪い、可燃性ガスの充満した場所」であればよく、洞窟に限る必要はない。こうして AW に輸入できない要素を削ぎ落すことで、虚構である物語から現実世界についての知識「空気の通りの悪い場所に可燃性のガスが充満していた場合、火を起こすと爆発する」が得られる。現実世界で利用する際には探検家は主婦、洞窟はガス漏れを起こしている窓のしまった台所で、マッチの代わりにガスコンロで火を起こすかもしれないのである。AW でそのような状況に遭遇した場合に、虚構世界から抽出した知識に基づいて推論し、台所が爆発するかもしれないと結論付けられるような知識が、虚構から得うる知識の二つ目の類型である。

さらに推論を行うパターンが考えられる。AW での法則や自分のこれまでの体験に基づいて補完された TAW を描き出した上で、TAW での一連の展開を AW に再輸入する、というものだ。例えば、「試合で負けた主人公は泣かなかったし、チームメイトと違って一言も悔しいと言わなかったが、猛練習を行い次の試合では勝った」という物語があったとする。この時、心理的信憑性、最小離脱法則に基づいて AW での自分の体験を引用し、「試合に負けた時自分は悔しかった。この主人公の置かれた環境はその時の自分と同じである。だから主人公は本当は悔しいに違いない」と考えることで TAW を補完する。その上で TAW を再確認し、主人公が練習の成果を発揮して勝った事実を踏まえ、これも心理的信憑性、最小離脱法則によって AW で保持されるとした上で、「悔しい思いをしても、次に勝つためには諦め

ずに練習することが大事である」という結論を導き出す。このような場合も、虚構から現実世界においても通用する知識を得たと言える。

4.2. 様相的知識の知られ方

ルイスの様相実在論によれば、我々の現実世界と他の世界とは時間・空間的に断絶したものであるという。ライアンの言う TAW や TRW も我々の現実世界とは違う世界であり、我々の世界と断絶しているという点については同じである。では我々は、どのようにして他の世界についての様相的知識――ルイス流に言うならば喋るロバが存在しうること――を知り得るのだろうか。

ルイスは、様相的知識に因果的見知りは必要ないと述べる。ルイスは「もし、理論が統一的であることを重視して、何が存在するかに関する信念を拡張する用意があるならば、そしてそれによって真理を信じるに至るのであれば、われわれは知識を得る」[80]と主張し、数学を例に挙げる[81]。我々は豊富な数学的知識を持っており、その中には無数の数学的対象の存在についての知識も含まれる。そのような数学的対象の中には人間の知覚の範囲外に存在するものもある。これらに対して、何かを知るためには知識の主体と対象との間に因果的な繋がりが必要であるとするような認識論を重視することは、数学を改変することに相当するという。これを判例として、我々は我々から因果的に隔絶し、検査が行えないような対象についても知り得るとルイスは主張するのである。

ルイスは因果的見知りを必要とする知識の範囲は主題の具体性ではなく偶然性による[82]とする。因果的見知りによって知り得るのは、我々の世界がどのような世界であるかについての知識である。眼前の光景が今知覚している通りではないような世界は想定できても、数字の 17 が存在しない世界については語れない[83]として、「いかなるものも偶然的でない事態へは反事実的に依存することは出来ない」[84]と述べる。その上で、我々の世界にロバが存在することは偶然的知識であるが、どこかの世界にロバが存在するということは必然的知識[85]であると述べている。

様相的知識の獲得に因果的見知りが必要ないのならば、我々はそれらを「どのように知っているのか」という問いが挙げられる。ルイスはこの問いを３通りに解釈し、各々に対して回答している。

第一の見方は、「我々の知識の全領域に適用できるような一般的な分析を要求するもの」[86]としての問いである。この問いについてルイスは、一部の懐疑主義者と規約主義者を除くあらゆる人にとっての問題であると述べ、様相的知識について様相実在論的に解釈することによって影響のある問題ではないとする。その上で、以下のような提案を行っている[87]。知識の分析は、間違った理由によって信じられた真理についての問題に対処しなければならない。この時我々は、知識の分析は全般的な問題に対処できなければならないと考えるが、全般的な問題に対処する必要はないのではないか、非偶然的な事柄の内単純なものについては解決すべき問題は生じないのではないか、という事である。例えばそれがエセ導師に教

えられたのだとしても、2+2=4 であることや、真な矛盾は存在しないことを完全に理解して受け入れたとすれば、それを知らずにいることは出来ないのではないか、とルイスは主張している。

第二の見方は「どのようにして我々は様相的意見を獲得するのかという自然主義的な認識論を要求するもの」[88]である。ルイスはここでも数学を例にとり、「たいていは、すでに受け入れられた一般的原理からの推論によって意見を得る」と答える。こうした推論は厳密である場合もインフォーマルである場合も存在するが、様相について我々が持つ日常的な意見の場合、それは何らかの組み替え原理の帰結として獲得するものであるとルイスは主張する。この組み替え原理の詳細については後述したい。

第三の見方は「ある意見を知識とみなしているとき、その意見を堅固な基礎の上に置き、誤り得ない方法で導出されたと示せるかどうか」[89]という、懐疑主義からの挑戦としての見方である。この問いに対してはルイスは、非偶然的な事柄についての知識に対して誤り得ない獲得の方法を要求することは、トリビアルであるため意味を成さないと主張する。必然的真理に対しては、それを信じるだけで、誤り得ない方法となるのである。あるいは求められているのが誤り得ない「一般的な」方法だとするにしても、ルイスは偶然的でない特定の前提から推論するという方法を述べ、これを退ける。即ち、様相的知識は必然的真理であるのだから、演繹システムが真理性を必然的に保存するものであれば、様相的知識に基づく推論は誤り得ない方法となり得るというのである。様相の場合にはこのような推論はもっぱら組み替え原理を暗黙の前提とした極めてインフォーマルな想像実験であるかも知れないが、その場合でもその方法は不可謬かつ一般的であるとルイスは述べる。

では、組み替え原理とはどのようなものであるのか。我々の様相的知識は大抵の場合この組み替え原理の帰結であるとルイスは述べる。この原理によれば、異なる可能世界の部分を繋ぎ合わせることで別の可能世界が生まれる、即ち「いかなるものどうしであっても、少なくともそれらが互いに異なる時空的位置を占めているならば、両者は共に存在しうる」[90]という。更に、いかなるもの同士であっても共には存在しないことも可能だという。

また、組み換え原理の時に使用されるのは対応者ではなく複製関係であるとルイスは述べる。ルイスによる対応者関係はそもそも貫世界同一性の代わりに導入された。ルイスはどんなものについてもそれが属している世界は一つであると考えているため、他の世界に属する存在を我々の世界の存在と同一とみなす貫世界同一性については否定している。[91]

ルイスによれば、対応者は主題となる対象そのものではないという。主題となる対象は本来それの所属する世界にのみ存在し、他の世界での主題は不在によって表現される。他の世界はその主題の対応者を部分として持ちえ、この部分により「それが存在してしかじかの事を行う」ということを事象表象するとルイスは述べる。当の主題の存在しない他の世界において、手を振ること、大統領選に勝利することといった何らかの行動によって、他の世界から見ればそのようなものとしてわれわれの世界の主体を表象する。こうしてわれわれの世界の主題は他の世界から見るとしかじかのことをすることになる[92]。

この上でルイスは、対応者は類似性によってまとめられるが、この時問題になる類似性は概ね外在的であると述べている。対応者関係が外在的な類似性をも引き入れてしまう以上、組み替え原理で対応者は使えない。例えばあるものがドラゴンとユニコーンのそれぞれ対応者である場合には、その生まれた背景や環境などそれを取り巻く環境も一致していなければならないが、一つの世界がドラゴンとユニコーン両方の世界に十分類似しているということがありえないために両対応者が同時に存在する世界はない、ということになりうるためである。

そこでルイスが持ち出すのが複製関係である。ルイスによれば、

> 二つのものが複製（duplicate）であるのは、(1)両者がもっている完全に自然的な性質がまったくおなじであり、(2)両者の部分のあいだで、対応する部分のもつ完全に自然的な性質と完全に自然的な性質がまったく同じであるような対応関係が成り立つときそしてそのときに限る。[93]

という。

この複製関係を使い、ルイスの例に従えば例えばドラゴンの複製とユニコーンの複製が同時に存在する世界が存在しうる、とするのがルイスによる組み換え理論である。

正確に定式化された組み替え原理から厳密に推論する場合もありうるが、実際には我々の推論は想像による実験の形式をとるとルイスは述べる。我々は、その各々が現実的であるという理由などから複数のものをあらかじめ可能だとして受け入れ、それらの複製が当の可能性の記述と合致するように配置されうるかを考える。勿論、世界を一つ一つ精査するようなことは行わない。我々はいくつかの際立った点についてのみ想像を行い、この一度限りの想像行為によって無数の世界をカバーするとルイスは言う。

組み替え原理が使えないような場合において、ルイスは代用となる理論もあるとして、例えば世界の充満性に対する恣意的な制限を拒否することを挙げる。しかしながら、ある種の問いについては様相に関する我々の意見を画定する方法は存在しないとして、限界を認めている。

4.3. 世界間の距離と到達関係

ライアン（及びルイス）の理論において、最小離脱法則はテクスト宇宙の再構築や虚構内の真偽の判定において重要な概念である。しかしながら、ライアンの理論においては世界間の距離の設定について詳しい言及はなされていない。どのような世界をより我々の世界に「近い」とするのか、「最も」近い世界を選ぶことは本当に可能であるのか。このような疑問を、本項ではルイスの可能世界論に立ち戻って見ていきたい。

ルイスによれば、一つだけの世界を考えるのは理想化であるという。ルイスは「カンガルーにしっぽがないとしたら」という反実仮想文の前件を例に取り上げる。ルイスはその時に

選択される「カンガルーのしっぽが無い世界」において、カンガルーのしっぽは切り取られたのか元々無いのかについては触れられていない事を指摘し、きちんと定義されていない世界のクラスを考えるのが本来であるという。しかし同時にルイスは「この理想化のもとではじめて、次のことが言える」[94]として反事実条件文に対する基本的なアプローチを述べており、この理想化はその上に理論を展開できる程度のものであると考えられる。

ルイスは可能世界の量化における到達可能性関係の制限、可能個体の量化における対応者関係の制限といった制限された様相には、法則論的な様相、歴史的な様相、認識的な様相、義務論的な様相などの種類があり、それら制限的な関係には類似性の概念も含まれる[95]と述べ、世界間の関係と類似性との関連は認めている。しかし類似性を数値的に測定し、それをそのまま世界間の距離とみなすことには否定的である。我々は、類似性と世界間の距離とを類比させる時、ある世界から他の世界への類似性の度合いは、当の他の世界からある世界へ向けての度合いと等しいという、「類似性測定の対称性」[96]を仮定しがちであるとルイスは言う。しかし、例えば色の観点からの類似性と相違性が我々の世界よりも重要である世界と、我々の世界よりも軽視される世界があった時、三者の間の類似度に対称性が成り立つかといえば、その限りでは無い。その類比性が失われるならば、類似性の数値的測定における利点も失われるという。

ルイスによれば、「反事実的条件文が関わるのは、その前件や事実的な背景、文脈の影響が一緒になって与えられる可能世界において何が起こるか」[97]であり、「ある世界は別の世界と比べて他の世界により類似しているが、どのくらいより類似しているのかを言う必要は決してないし、どのくらいより類似しているのかという問いが意味を成す必要もない」[98]と述べている。その上で、実際には量的な概念ではなく、比較可能な概念を使っているという。

更にルイスはもっと根源的な問いについて議論している。可能世界同士の距離の定義における「近さ」は、問題となる（多くの場合われわれの）世界がどのような特徴を持つかによって決まる[99]。結局は現実世界の特徴をもとに反事実的条件文の正誤が決まるのであれば、可能世界を持ち出す意味はあったのか、という問いである。これに対してルイスは他の世界はわれわれの世界の特徴づけを可能にする枠組みを与えてくれる[100]と述べている。即ち、A かつ C であるような世界が。A だが C でない世界より近くにあるような世界がわれわれの世界[101]だという知見である。

4.4. 文学理論から―間テクスト性と分裂存在論

4.4.1. 間テクスト性

ルイスとライアンは、我々の世界における事実（と、ルイスの論で言えば共同体の共通信念）だけでなく、フィクション間の真理も考慮に入れる必要があるとし、文学理論における間テクスト性を認めている。

間テクスト性とは、文学の領域においてクリステヴァによって提示された概念である。厳

密で画一的な定義は定まっていないが、「一つのテクストが誕生するとき、そのテクストは既に存在している、あるいはそのテクストと共時的に存在している、そしてさらに言うなら、その後書かれることになる不特定のテクスト群によって不可避的に横断されているとみなされねばならない」[102]という土田の説明が理解しやすい。テクストは常に他のテクストの影響を受けるものであり、それは必ずしも時間的な先行関係を限定しないものであるというテクスト同士の相互作用について指摘したのが間テクスト性の概念である。

ルイスはフィクションにおける真理を、フィクション作品内に明示された内容と、現実世界の事実またはフィクションが語られた当時の共同体における公然の諸信念のいずれかより成る背景という、二つの要素が合成されたものとする。そしてさらに考慮すべき第三の要素として、「他のフィクションの真理の影響」[103]を挙げる。そして、それをフィクション内部の真理の影響と、フィクション間の真理の影響の二つの場合に分けている。ルイスの例[104]によれば、ドラゴンと姫と騎士の出て来る典型的なおとぎ話のスタイルを取った物語があった時、このドラゴンが火を吹くとは一切書かれていなくとも、火を吹くと考えることができる。これは他の物語におけるドラゴンについての真理がフィクション間で影響しあっているものだとルイスは述べる。これがルイスの言うフィクション間の真理の影響であり、現代の文学理論で言う所の間テクスト性に相当すると言えよう。

ライアンは「相互テクスト性（intertextuality）」について、「最小離脱法則の機能のしかたは相互テクスト的関係に依存しているし、またそれと同じくらい、相互テクスト性の機能いかんも最小離脱にかかわっているのだ」[105]と述べている。ライアンは、最小離脱法則の準拠枠として他の作品のテクスト宇宙を選ぶことを良しとし、同じジャンルの別作品の在り様　に基づいて寄せられる作品への期待の存在を「ジャンル風景」として直接指摘している。

以上のように、ルイスとライアンは両者とも、他の虚構的作品（ライアンは特に同ジャンルの他の作品）からの影響に基づいて虚構的作品の世界を構築することを許容している。この事は、我々が虚構的作品を受容する仕組みを考える上で重要な点であろう。我々は虚構的作品世界の情報不足を、他の虚構的作品やジャンルの様子によって補う場合がある。更に、テクスト上の表現からのみでは断定の出来ない到達関係について、他の作品世界を準拠枠とした最小離脱法則によって定める場合があるのである。

4.4.2. 分裂存在論

ライアンによれば、テクストはトマス・パヴェルにより「二重」存在論や「層状」存在論と呼ばれるものを提示する場合もあるという。パヴェルはカフカの『城』を例に挙げ、「矛盾する手がかりは、我々が参加する（虚構の）世界が私たちのものと似ていることもあれば、なじみのない論理に従うこともあることを示唆している。虚構の環境の性質は、単なる夢とするには構造的すぎ、神話的な枠組みを受け入れるには現実的すぎ、とらえどころのないままである。小説のあらゆる状況で一貫して機能する最適な基準を考えることはほぼ不可能だ」[106]と述べる。このような、それぞれ別の法則に従うような異なった複数の領域にテクス

トの実際の世界の領域が分裂する場合を、ライアンの理論は許容している。ライアンによれば、カフカの小説は性質・同目録・拡大目録以外の全関係に従うリアリズムの領野と、AWとどんな関係にあるのか決められない領野に分離しているという。この分離後の領野は登場人物の私秘的世界とは違うため、テクストの代替可能世界ではなく、中心世界内部にある補足的領域であるとライアンは主張する。

ここで着目するべきは、ライアンはその例示において、「リアリズムの領野」「AWとの関係が不定の領野」と分裂した世界のそれぞれに対し到達関係を設定している事である。AWとそれぞれ異なる関係にある部分同士が一つの世界に住まうという点に関しては、先述したルイスの組み換え原理とも関係が深そうであるが、本稿ではその詳細な検討は行わない。本稿においては、我々のAWは、仮にTAWやTRWがその領域を複数に分けたとしても、それぞれの領域にそれぞれの到達関係を設定して分析を行うことが可能であることに言及するに留める。

4.5. ライアン虚構論への批判とその反論

4.5.1. 河田“語る行為の存在論”におけるライアン批判

河田の“語る行為の存在論”は、『フィクション論への誘い――文学・歴史・遊び・人間』の第4部12章[107]に相当する。河田はここで文学研究分野の物語論における「語り」の概念を切り口に、主にサールの虚構論とライアンの虚構論を比較している。

サールの虚構論は言語行為論に基づくものであり、虚構の言説を「真面目な」言説ではなく、発語内行為の一つである「断定」を行う「ふりをする」ものであると捉える。河田はこのサールの論の短所として、一人称の語りの場合は作者が語り部であるふりをしているとするが、三人称の語りの場合はそのような成り代わりは起こらないという不整合を指摘する。更にサールはアンナ・カレーニナの冒頭「幸せな家庭はみな同じように幸せだが、不幸せな家庭はそれぞれ別の、違った形で不幸せである」という一節を引用し、「フィクション上のものではなく、真剣な発話である」[108]と主張するが、河田はサールの主張を可能世界虚構論風に捉えるならばこの一節は（虚構世界ではなく）我々の現実世界についての言及であるとし、「この一節がアンナ・カレーニナの生涯を語るうえで必要であるという判断から作品中に挿入されたのであろうと考えるわれわれの直観は否定されることになる」[109]と批判している。

河田によれば、このサールの論の問題点を解決するのがライアンの虚構論であるという。２章でも見た通り、ライアンはTAWに内包された代理話者（IS）を措定し、語りの一人称、三人称に関わらず、AWにおける作者はTAWにおける代理話者のふりをしていると主張する。これによりサールの論にあった不整合は回避され、またアンナ・カレーニナの一節についても「虚構世界に住む代理話者が自分の世界について発した言明であると考えれば解決される」[110]と述べる。

以上だけ見ればライアンの虚構論は有用であるように思われるが、河田の指摘するラ

イアンの問題点は、まさにこの代理話者の措定にある。河田はライアンの言う代理話者が「誰であるのか」についてはライアンの理論においても未だ解決されていない問題であると述べ、「語り手を虚構的であるばかりかきわめて抽象的な概念上の存在、モデル上の比喩としてしか認めることが出来ないのであれば、その語り手であるふりをするという言い回しも字義どおりの意味を失ってしまう」[111]と指摘している。

更にこの点に関しては、河田は「語り手不在論」の方が有力であるとしている。「語り手不在論」はクロダやバンフィールドによって指示されるもので、ライアンはその主張について「無人格／全知の語りでは『誰も語っていない』、ただ事象が『みずからを語っている』だけだと論じる」[112]と述べている。この点に関してはライアン自身も著書において有力な反論として取り上げており、人格を持つ語りと無人格の語りが言語使用論上著しく異なること、虚構言説の言語使用論上の可能性が非虚構より幅広いことの二点について説明を加えられるという点において、この論の有用性を認めている。

河田はサールとルイスの両論の利点と欠点を鑑み、論争の軍配をどちらかに挙げるのは合理的ではないとした上で、この論争から得られるフィクションにおける「語り」ないし「語り手」の基本性質として「言語によるフィクションとは、実際の発話者が知られているにもかかわらず、その発話者以外の発話主体による発話であるかのように受容されるものである」[113]と結論付ける。

4.5.2. 岩松の“物語論の新展開と可能世界意味論”におけるライアン批判

岩松の“物語論の新展開と可能世界意味論　マリーーロール・ライアンの類型論を中心に”では、文学分野における物語論の立場からライアンの理論を検討している。

岩松は、ライアンの理論に対する対立項の一つとして、構造主義文学批評における主体解体論を挙げる。岩松はライアンの理論について「単純な構造主義史学批判ではないが、言語行為論の応用は、《構造主義以後》の文学研究への批判として機能する」[114]と述べている。

そもそも構造主義とはソシュールによる言語学に端を発する「ある現実の総体を関係のシステムとして捉え、一つの構造として記述する活動」[115]である。構造主義による文学批評では、それまでの文学研究のように作品を通して作者や時代、思想などといったテクストの外部へ向かうことをやめ、テクストそのものの性質に目が向けられるようになった。その結果として、テクストから作者の存在が排除される、所謂「作者の死」の傾向があったのである。この点に関して、代理話者のふりをする作者による言語行為として虚構を理解するライアンの理論は文学行為論的であり、一つの批判として機能しうるというのが岩松の主張である。

更に、岩松がより根源的なライアン批判として挙げるのが、ローネンによるライアンのAW 概念への批判である。ローネンは、ライアンの唱える AW 概念があまりに無前提で素朴すぎると危惧している[116]。これについて岩松は「ライアン理論の高度の操作性はすべて、「実際世界」をどう規定するかについて口をつぐんでいる点に発している」[117]としている。

4.3. 両者への反論

河田はサールとライアンを対比したが、両者の優劣については明言せず、この論争から得られる利益を指摘することで決着とした。故に、ここで反論を示すべきはむしろ、河田の論中でライアンの理論に対する有力な候補として挙げられた「語り手不在論」の方であろう。これについてはライアン自身が反論を行っている。ライアンは、この論が人格を持って語る虚構の場合の説明になっていないことから、虚構表現全体の統一モデルを欠く形になることを指摘する。更に無人格の語り手の場合という限られた領域内においても、話者がいない以上はその意図も存在しないという点に基づいて、意図を投影せずにどのように意味を伝えられるのかについてもこの理論で説明できなければ有用性は認められないとしている。

岩松の論文では、構造主義文学批評との対立と、ローネンによるライアンの AW 観の素朴さへの指摘が挙げられていた。しかし岩松は同論文において、この二つの指摘に対するライアンの擁護も試みている。

構造主義文学批評との対立については岩松は、むしろライアンの肩を持っている。「死亡・焼失したのはどういう文脈での作家主体かを確認すべきではないか。《構造主義以後》の文学研究が、死んでいないものの死亡届まで勢い余って発効したことはなかったか。そのせいで、いくつかの問題圏が等閑視されてきたのではないか」[118]と述べ、構造主義文学批評への問いを投げかけている。

ローネンの AW 概念への危惧に対しては、岩松は AW 概念に対する理解についての「「可能な選択肢」の一つを試案として素描」[119]している。

河村は、ライアンの理論において TAW の志向対象は TRW だが、AW にはそのような対象がない点に着目し、ライアンにとっての AW がルイス同様志向対象が発話者によって変化するものであることを指摘している。文学コミュニケーションの背景は発話者によって準拠枠の細部や前提が異なるとした上で、読者は虚構のゲームに参加するとき、グッドマンの言う所の「科学的・芸術的伝統の断片と自らの生存競争の所産から(略)間に合わせで作った、馴染みの、便利な世界」[120]を慣習として AW に指定すると主張している。

以上を鑑みるに、岩松による指摘は岩松自身により補強され、よりクリティカルな反論である語り手不在論ですら利点のトレードオフの状態にある。どの切り口においても、ライアンの理論を完全に否定しうるほどの致命的なものではないと言えよう。

5. 読書感想文の分析

5.1. 分析対象の選定

分析の対象として、テクストによる虚構的作品から得たものを客観的な形で表現するものとして最も一般的な形態の一つであり、かつ抽象度の少ないものである読書感想文を選んだ。中でも、毎年課題図書が発表されており知名度が高く、近年は例年 400 万以上の作品が応募されているという、全国学校図書館協議会と毎日新聞主催の青少年読書感想文全

国コンクールの入賞作品を分析対象とすることとした。そこで直近の第 61 回から第 63 回までの青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集『考える読書』[121]を確認した。回についてはどの回であってもそこで見られる知識獲得に影響はないと判断したため、直近の 3 年分を選定した。

作業の効率化とサンプル数確保のため、今回は課題図書について書かれた感想文を分析対象とした。課題図書は「この本を読むことで考えて欲しい、学んで欲しい」という前提で大人によって選定されているため、今回の分析材料としてはより適していると言える。

また、今回の分析では「虚構的作品」ではないものは分析の対象外とすることとした。「フィクション作品とは何か」「ノンフィクションは虚構的作品か」という問いについては、虚構に関する議論において未だはっきりした解答の存在しない問題である。特にライアンの分類においては、現実世界を指示する非虚構的テクストもテクストの一ジャンルとして同軸に解釈することも可能ではあろう。しかし、本稿での根本的な目的は、「虚構的作品の内容は現実世界での事実ではないのに、何故現実世界についての知識を獲得できるのか」という問いに答えられる哲学的虚構論を提示することにある。従って、今回の分析においてはフィクション作品であるか否かの区分を「テクストが現実世界での事実を述べることを主目的としているか」という点に置き、対象年度の課題図書のうち、我々の住む現実世界の事物・人物について言及することを目的とした作品は分析対象外とすることに決めた。

中学校、高等学校の部では、小学校の部よりも課題図書の数そのものが一冊少なく、加えてノンフィクションや伝記物が多くなるため、非虚構的作品を除くと対象図書が一冊となってしまう場合が非常に多いため、今回は分析の対象から除外した。また、ある程度文章に熟達してくると、感想文全体を通して一つの主題を主張するようになり、知識を得たと主張する部分を単純かつ客観的なルールでは抽出し辛くなるため、小学校高学年の部も分析の対象外とした。本来はそのような複雑な知識も分析が出来なければならないが、本分析の目的はあくまで虚構論モデルの試行、即ち、実際に虚構からの知識獲得のなされている場面に対し、本虚構論モデルでどの程度説明が可能かを示すことにある。そのためのサンプルは一律の基準で抽出でき、かつ知識の獲得を主張していることが誰の目にも分かりやすいことが望ましい。よって、部分抽出の難しい小学校高学年の読書感想文は分析対象外とした。

対象となりうる第 61 回から第 63 回の小学校低学年の部、小学校中学年の部において指定された課題図書は以下の 24 作品である。

回	タイトル	著者（文）	著者(絵)	出版社
第 63 回	ばあばは、だいじょうぶ	楠祥子	いしいつとむ	童心社
	なにがあってもずっといっしょ	くさのたき	つじむらあゆこ	金の星社
	アランの歯はでっかいぞこわーいぞ	ジャーヴィス		BL 出版
	すばこ	キム・ファン	イ・スンウォン	ほるぷ出版
	くろねこのどん	岡野かおる子	上路ナオ子	理論社
	空にむかってともだち宣言	茂木ちあき	ゆーちみえこ	国土社
	耳の聞こえないメジャーリーガー　ウィリアム・ホイ	ナンシー・チャーニン	ジェズ・ツヤ	光村教育図書
	干したから…	森枝卓士		フレーベル館
第 62 回	ボタンちゃん	小川洋子	岡田千晶	PHP 研究所
	ひみつのきもちぎんこう	ふじもとみさと	田中六大	金の星社
	みずたまのたび	アンヌ・クロザ		西村書店
	アリとくらすむし	島田たく		ポプラ社
	二日月	いとうみく	丸山ゆき	そうえん社
	さかさ町	F・エマーソン・アンドリュース	ルイス・スロボドキン	岩波書店
	木の好きなケイトさん：砂漠を緑の町にかえたある女のひとのおはなし	H・ジョゼフ・ホプキンズ	ジル・マケルマリー	BL 出版
	コロッケ先生の情熱！　古紙リサイクル授業	中村文人		佼成出版社
第 61 回	あしたあさってしあさって	もりやまみやこ	はたこうしろう	小峰書店
	かあさんのしっぽっぽ	村中李衣	藤原ヒロコ	BL 出版

	クレヨンからのおねがい！	ドリュー・デイウォルト	オリヴァー・ジェファーズ	ほるぷ出版
	はこぶ	鎌田歩		教育画劇
	かぐやのかご	塩野米松	はまのゆか	佼成出版社
	パオズになったおひなさま	佐和みずえ	宮尾和孝	くもん出版
	お話きかせてクリストフ	ニキ・コーンウェル	中山成子	文研出版
	ぼくはうちゅうじん　ちきゅうのふしぎ絵本	中川ひろたか	はたこうしろう	アリス館

表 1　第 63 回～第 61 回の課題図書一覧

ここから更に各作品を見て、非虚構的作品を除外していった。

まずは AW に実在する人物を描いたものは分析の対象外とした。これにより 63 回からは『すばこ』、『耳の聞こえないメジャーリーガー』、62 回からは『木のすきなケイトさん』、『コロッケ先生の情熱！』を対象から外した。

また、単純に AW の事実に言及したものも対象外とした。これにより、63 回の『干したから…』、62 回の『アリと暮らす虫』が対象から外れた。

課題図書の中には、AW に言及することを意図しているが、AW に存在しないものが出てくる作品もあった。61 回の『ぼくは宇宙人』では主人公とその両親が、62 回の『みずたまのたび』では主人公である喋る水玉が、それぞれ AW には存在しないキャラクターとして登場する。これらは TRW＝AW とならない時点でライアンの分類では非虚構言説とは言えない。しかし作品の意図は確かに AW の事実を示すことにある。よって今回は分析の対象外とした。

また、61 回の課題図書である『はこぶ』については、AW と食い違うもの、AW に存在できないものは一切登場しないが、物流・インフラの発達の流れがあるだけで物語と呼ぶべき筋はない。このことから虚構的作品であるともそうではないとも分類することが可能な作品と言える。今回は試験的に分析対象として残すこととした。

以上より、本研究での分析対象として選定された課題図書と、それをもとに書かれた読書感想文は以下の表の通りである。

回	課題図書	作文タイトル	ページ
第 63 回	ばあばは、だいじょうぶ	だいじょうぶ、だいじょうぶ	18-19
		わたしがおぼえているからね	22-23
		「大ばあば、だいじょうぶだよ」	40-41
	なにがあってもずっといっしょ	しんじることの大切さ	32-33
		心がつうじあっているよ	46-47
		サスケがかわったこと	48-49
	アランの歯はでっかいぞこわーいぞ	友だちっていいな	14-15
		ほんとうのつよさをくれたアラン	28-29
		「アランの歯はでっかいぞこわーいぞ」をよんで	42-43
		じまんのしごと	44-45
	くろねこのどん	「わたしにもどんがいたらいいのにな」	96-97
	空にむかってともだち宣言	同じじゃなくても	68-69
第 62 回	ボタンちゃん	ボタンちゃんと思い出のはこ	34-35
		わたしはがんばってるよ	46-47
	ひみつのきもちぎんこう	本もののぎん色コインをふやしたいな	18-19
		ゆうきをだして	30-31
		チャリーンチャリーンでいっぱいに	50-51
	二日月	「二日月」を読んで	68-69
		変わるということ	70-71
		母の言葉の本当の意味	72-73
		「二日月」を読んで思ったこと	92-93
		心のみちかけ	94-95
	さかさ町	「さかさ町」を読んで	64-65
		さかさまもいいなあ	82-83
		物がさかさになったら	98-99
第 61 回	あしたあさってしあさって	あした、あさって、しあさってのひみつ	32-33
		「あしたあさってしあさって」をよんで	40-41
	かあさんのしっぽっぽ	「おかあさんのつの」	28-29
		「かあさんのしっぽっぽ」をよんで	48-49

	クレヨンからのおねがい	おねがいのこえが聞こえたら	18-19
		クレヨンくん、これからもよろしく	20-21
		あいてのきもちをかんがえる	30-31
		「ぼくの、クレヨン。」	42-43
		「クレヨンからのおねがい！」をよんで	44-45
	かぐやのかご	勇気をくれる宝物	70-71
		おばあちゃんが教えてくれたこと	78-79
	パオズになったおひなさま	「広がれ‼パオズの心、おひなさまの心」	76-77
		パオズの温もりにふれて	96-97
	お話きかせてクリストフ	三つ目の道	62-63
		クリストフが教えてくれたこと	66-67
		戦争を伝える	88-89

表 2　分析対象の課題図書と読書感想文一覧

これらの作文の文中から、知識を得たことを主張する文章を抜き出した。具体的には以下の表現である。

思う系：

思う、思います、思った、思って、思いました、思うようになった、思えてきた

わかった系：

わかった、わかりました、わかったことがある、わかる、わかって

その他知識獲得系：

知った、知りました、気が付いた、気付いた、教えてくれた、教わった、伝わった、伝わってきた、初めて～した（聞いた、知った、わかった）

希望系：

～したい（と思った、です）、～したくなった、～してみたくなった、～していきたい

ただし以下の場合は対象外とした。

思っている、思っていた：

書かれた時点での状態を表す、即ち知識獲得の表現ではない可能性が高いため

一部の「思う」：

「相手を思う」という用法のもの

一部の「～したいｘ」、「～してくれたｘ」：

ｘが自分や自分の気持ち、心といった名詞、ときやことといった形式名詞でない場合

これらの表現が一概に虚構からの知識の獲得を示すと断定することは出来ない。場合によっては作品に対する感想や、現実世界での経験からの知識の獲得、現実世界での経験に対する感想などを示す場合も考えられる。しかし虚構からの知識の獲得もこれらの表現を用いて表されるであろうことは確かである。今回は恣意性を排除した一定の基準での抽出を優先し、これらの表現を一つの指標として一律に抜き出した。逆に、これらの表現を基準としただけでは取りこぼしてしまうような知識獲得の表現も十分に考えられる。しかしながら、本分析の目的は読書感想文に現れる全ての知識獲得を処理するという点にはない。よって、この基準によって知識獲得場面の網羅的な抽出が不可能であっても問題ないものと判断した。

更に、抜き出した表現について、項ごとの形を整えた。該当する一文だけでは前後の文脈が判断できないような場合には、必要に応じて該当文の前後の文を追加した。複数の該当文に跨って理論が展開されている場合は一つの項にまとめた。

このように各項の形を整えたところ、分析対象は 195 件あった。

5.2. 分析の方法

分析対象には通し番号を付与した。課題図書には「コンクールの回数－課題図書№」、作文には「コンクールの回数－課題図書№－作品№」、各項目には「コンクールの回数－課題図書№－作品№－項目№」という形で番号を振り分けた。

分析にあたってはまず、各課題図書に対してあらすじをまとめ、その補足を行い、作品全体に対する分析を行った。あらすじは基本的には児童図書出版協会のウェブページ「こどもの本 on the Web」にて提供されている「Web 版児童図書総目録」[122]から引用し、そこに記載が無いものについては国立国会図書館サーチ[123]に記載されていたものを引用した。『くろねこのどん』に限っては両データベースともに記載が無かったため、Google Books[124]に記載されていたものを使用した。また、補足として、作品及び分析対象を理解する上で必要な部分について、筆者が当該の図書を読んだ上で補完した。分析作品全体に対する分析においては、全課題図書共通の作業として、TAW との到達関係について設定している。ここでは先述したライアンの挙げた類型化と、そこでの省略記号を使用する[125]。今回の課題図書には G/論理、H/分析、I/言語の到達関係を損なうものは無かったため、それ以外の A～F までの到達関係について各々検討を行った。更にライアンが補足的に挙げていた想定しうる到達関係 4 つ、及びルイスの理論などを踏まえての「既存の価値観の両立」の到達関係のうち、確実に適用されていることが分かるものを挙げた。その他、各項の分析に先立って検討しておきたい作品の全体に関わる点についても、必要があればここで触れている。

各項の分析については、矢印を使って簡易化した分析と、文章での詳細な分析とを併記した。特に簡易な分析については、以下のように語と記号の用法を定める。

AW・TAW：

ライアンの理論における用法と同一。

APW・TAPW：

ライアンの理論における用法と同一。APW は Alternative Possible World、TAPW は Textual Alternative Possible World、それぞれ AW、TAW に対する可能世界を表す。

事実命題：

広義の事実。AW で実際に起きた出来事や書き手の経験、TAW で実際に起きたとされる出来事など。個別の命題の他、一般化された命題も含める。また、具体的事実だけでなく、抽象的な事柄も含める。

価値命題：

価値についての命題。

方向付け：

こうしたいという希望、こうしていきたいという方針などの行動の方向性を示しているもの。TAW に対する希望や、こうした方がよいという AW に対する価値的な指針も含む。

○○に輸入された××命題：

ある命題を、到達関係と最小離脱法則に基づいて輸入先の世界でも成立する形に変形したもの。後述する記号「⇒」の右辺に表れ、左辺の命題が他の世界に輸入されたことを示す。

検討：

何かを契機として、他の事例を調査しているもの。

AW の暗黙の法則：

AW において作文の書き手の持つ価値規範。倫理的なもの、感情的なものを含む。

→：

何らかの根拠に基づく導出を示す。導出には演繹、帰納など種類があるが、ここでは全てまとめて取り扱う。

⇒：

世界間の移動を示す記号。一つには、到達関係と最小離脱法則に基づき、左辺の命題を別の世界に輸入することを示す。別の世界に輸入された命題は右辺に表される。その際、輸入先の世界でも命題が成立するよう変形を加える場合もある。新たな可能世界の創出を行う場合にも使用される。

A＋B→C：

要素 A と要素 B を合わせての導出。

（）：

当該の項で扱う作文の引用箇所には明示されていないが、推論に使う他の項で導かれた知見を示す。

〔〕：

この括弧内の要素をひとかたまりのものとして表す。例えば「A＋〔B→C〕→D」とあった場合、A と、B から導出された C とを合わせての D を導出を表している。

これらの用法については簡易な分析に限るものである。文章による詳細な分析においては一般的な語用に基づいて表記しているため、この限りではない。

以上のようにして、全 195 件の対象に対し、本稿での虚構からの知識獲得理論を適用し、分析と類型化を試みる。本分析はこれらの観点によって感想文側の特徴を測るものではなく、本論文で取り扱う虚構論がこれらのサンプルに対してどのような分析処理を行うモデルであるかという、モデルの特徴を見るものである。

5.3. 分析結果

5.3.1. 第 63 回青少年読書感想文全国コンクールの作品の分析

5.3.1.1. 63―1『ばあばは、だいじょうぶ』

あらすじ：

大好きなばあばが「わすれてしまう病気」になって変わってしまった。そして冬の寒い日、ばあばがいなくなり…感動の一作です。[126]

補足：

ばあばは病気になってしまう前、「だいじょうぶ、だいじょうぶ」と言ってつばさを励ましてくれていた。ばあばが病気になった後は、つばさは段々とばあばと関わらなくなって行く。冬の寒い日、ばあばが裸足でいなくなる。家でばあばの帰りを待つ間につばさは、ばあばが忘れないようにと様々な事を書いたメモを見つける。翌日、隣の家のおじさんと帰ってきたばあばの足に、つばさは靴下を履かせて謝る。ばあばはつばさに「だいじょうぶだよ」と声を掛け、頭を撫でてくれる。

作品の分析：

ばあばやつばさの一家は AW には存在しないため、B/同目録は適用されず、C/拡大目録が適用される。人間やその心情、「忘れてしまう病気」などの特徴については AW と共通がみられるため、A/性質、F/分類学は成立する。D/年代、E/自然法則については大きな違反は見られないため、最小離脱法則によって暫定的に成立すると言える。

その他の要素としては、心理的信憑性、既存の価値観との両立が挙げられる。

5.3.1.1.1　63―1―1　だいじょうぶ、だいじょうぶ　（p. 18―19）

63-1-1-1

「つばさくん、だいじょうぶだよ。わたしもつばさくんといっしょだよ。」と、つばさくんに**こえをかけたい**です。わたしには、つばさくんのばあばとおなじ「わすれてしまう」びょう気のひいおじいちゃんがいます。

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実命題→AW の事実命題→AW の事実命題→TAW への方向付け
TAW でのつばさとばあばの関係、ばあばの症状、つばさの態度などの事実を、性質の同一、分類学的両立、心理的信憑性から AW でも起こりうる事として AW に輸入した。AW での自分の曽祖父とのことと比較し、両者が似ていると結論付けた。更に、自分と状況が似ているのであればつばさのことを励ませるだろうと推測し、つばさに声を掛けたいという TAW への希望を抱いている。

63-1-1-2

つばさくんは、いつものばあばでなくなるのを見るのがふあんで、かなしかったんだと**思います**。だから、ばあばのへやに行かなくなったり、ばあばとあまり話さなくなったりしたんだと**思います**。

分析：
TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実命題→AW の事実命題→AW の事実命題⇒TAW に輸入された事実命題→TAW の事実命題
TAW における、つばさがばあばの部屋に行かなくなった、ばあばとあまり話さなくなったという事実から「忘れてしまう病気になった人を避けてしまうことがある」として、これを心理的信憑性に基づき AW に輸入している。書き手は「つばさくんは、パニックになってしまうよね。わたしもそうでした。」[127]と述べている事から、自身の曽祖父との経験が輸入した事例に当てはまると考えていると思われる。これらの事実から書き手は、つばさと自身の経験は同じものだと結論付けた。さらにその結果を、自身の経験の背景が「(病気になる前の) いつものその人 (この場合は曽祖父) でなくなるのを見るのが不安だから、悲しいから」であることを含めて TAW に再度輸入し、自分の経験に似たつばさの行動も同じ理由に由来すると推測している。

63-1-1-3

つばさくんもおなじだったんだと**思います**。見て見ないふりをしてしまうのです。

分析：
TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実命題→AW の事実命題
TAW でつばさがばあばを避けていた事実から「忘れてしまう病気になった人を避けてしまうことがある」として、これを心理的信憑性に基づき AW に輸入している。これに対し、書き手は作文中で、自分の曽祖父の世話をすると褒めて貰えるが、何度も同じことを言う曽祖父を無視することもあるため、褒め言葉は胸が痛むと述べている[128]。ここから書き手の体験は輸入した事例に当てはまるという推論を行い、TAW のつばさの状況と書き手の置かれていた状況とを同じだと結論付けている。

63-1-1-4

ばあばやひいおじいちゃんは、自分たちはどうなっているんだろう、なんでこんなにわすれるんだろう。と、わたしたちよりももっとふあんとたたかっているんだと**思います。**

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW での事実命題→AW の事実命題⇒TAW の事実命題

TAW においてつばさが、ばあばが忘れてはいけないことを記したたくさんのメモを見つけたこと、中にはごめんなさいと書かれたものもあったことから「忘れてしまう病気の人は忘れてしまうことに対して不安や罪悪感を抱えている」として、分類学的両立と心理的信憑性から AW に輸入する。そこから書き手は曽祖父が「何でこんなに忘れるのか」と自分の頭を叩いていたこと[129]を挙げる。TAW から輸入した命題に自身の AW での経験も当てはまることから、「自分（書き手）達より、病気の当事者の方が不安で、それと戦っている」と結論付けている。「ばあばやひいおじいちゃんは」という主語から、心理的信憑性に基づき TAW に結論を再輸入していると考えられる。

5.3.1.1.2.　63―1―2　わたしがおぼえているからね　（p．22―23）

63-1-2-1

「おじいちゃんに会いたいな。」「ばあばは、だいじょうぶ」という本を読んで、さいしょにそう**思いました。**わたしのひいおじいちゃんも、つばさのばあばのような「わすれてしまう」びょう気だったからです。

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW での事実命題→AW の方向付け

TAW のばあばの「わすれてしまう」病気の症状を、性質の同一、分類学的両立から AW に輸入し、AW での自分の曽祖父の病気の症状と比較し似ていると判断している。ここから書き手は何らかの導出を行い AW で曾祖父に会いたいという希望を抱いているが、作文からだけではこの導出過程が追えず、曖昧である。

63-1-2-2

いつも、「つばさはだいじょうぶ」と言ってくれたばあばがかわっていくようすを見るのがつらくて、うけ入れられないでいたからだろうなとかんじました。ばあばにではなくて、きっと「わすれてしまう」びょう気にはらを立てていたのだと**思います。**

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題

TAW の事実としてのばあばと翼の関係を見て、つばさの心情を推測している。

63-1-2-3

それは、ばあばのびょう気とむき合おうとけっ心した気もちでやったことなのだと**思いました。**

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題

TAW において、いなくなってしまったばあばが帰って来た時、つばさは「ごめんね」とばあばに靴下をはかせる。ここから、その時のつばさの心情を推測している。

63-1-2-4

わたしは、「わすれてしまう」びょう気になっても、大じなことは心がおぼえているんだなと**思いました。**ほかのことはわすれていても、おじいちゃんもわたしのかおを見ると、「きてくれたのか！」と、うれしそうにかおをなでてくれました。

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実命題→AW の事実命題

TAW で、つばさに靴下を履かせて貰ったばあばは、病気になる以前のようにつばさの頭を撫でた。ここから「忘れてしまう病気の人でも大事なことは心が覚えている」として、分類学的両立、心理的信憑性から AW に輸入した。下線部以降の書き手の曽祖父との経験もこれに当てはまることから推論し、AW でも成り立つ結論とした。

63-1-2-5

今はもういないけれど、おじいちゃんの分もいっぱいいっぱい**おぼえておこうと思いました。**

分析：

決定不能

この一文は、前項（63-1-2-4）の直後に続く文である。そのため、「今はもういないけれど、（顔を撫でてもらったことで）～」なのか、「今はもういないけれど、（この本を読んで）～」なのかが判別できない。前者であれば AW の経験に基づく AW の行動方針、後者であれば前項で得た知見に基づく AW の行動方針と言える。

5.3.1.1.3.　63―1―3　「大ばあば、だいじょうぶだよ」（p. 40―41）

63-1-3-1

この本を読んで、おばあさんになったらどうなるか**知りたくなって**しらべてみたよ。つばさくんのばあばみたいにわすれてしまうびょう気があることとか、耳が聞こえづらくなったりすることが**わかったよ。**

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題→AW の追加調査→AW の事実命題

TAW でのばあばの様子を見て、物理的両立、分類学的両立関係に基づいて老化現象とその

症状を AW に輸入、AW でも老化によってこのような現象が起こると結論付けた。更に AW での老化現象について調べている。

63-1-3-2

つばさくんのばあばは「ごめんなさい」ってたくさん書いていたけど、めいわくをかけたくないのにかけてしまうから「ごめんなさい」って**思った**のかな。**そっか**、わすれてしまうびょう気になっても、やさしい気もちはわすれないんだね。うちの大ばあばも『ごめんなさい』っていっぱい思ってるのかな。

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題→AW の事実命題→AW の事実命題

TAW においてばあばがメモに沢山ごめんなさいと書いていたことについて、その理由を「めいわくをかけたくないのにかけてしまうから」と推測している。そして、それを根拠にさらに推論を行い、「忘れてしまう病気の人でも優しい気持ちは忘れない」と結論付ける。分類学的両立、心理的信憑性、価値基準の同一に基づいてこれを AW へ輸入し、AW でも成立するものとして結論付けた。更にそれを根拠とし、自分の大ばあばも同様のびょきであることを踏まえ、その心境についても推測している。

5.3.1.2. 63―2『なにがあってもずっといっしょ』

あらすじ：

オレはイヌだ。オレはサチコさんと一緒にいると幸せだ。だが、ある日、サチコさんが帰ってこない。どこに行ってしまったんだ!? [130]

補足：

主人公である犬はサスケという名前で、サチコさんが居ればいいと庭を横切る猫や庭の前を通る小学生、公園で会う他の犬や人間などに冷たくあたっていた。ある日、いつもの時間に帰って来ないサチコさんに対し、サスケは「自分を置いて公園で会った犬と話していた『いいところ』に行ったのでは」と、サチコさんを探して家を飛び出す。迷子になってしまったサスケだが、猫や小学生の力を借り、なんとか家に帰る。その際猫には「そのサチコさんとやらを信じているなら待てばいい」と諭される。翌日の朝、公園で会う犬とその飼い主が、サスケにサチコさんの急な入院を伝え、ご飯をくれる。サチコさんが病院から帰ってきた後、サスケはサチコさん以外に対する態度を改め、サチコさんとずっと一緒にいるという決意も改める。

作品の分析：

サスケやサチコさんといった登場人物は AW には存在しないため、B/同目録は適用されず、C/拡大目録が適用される。サスケや猫など登場する動物たちは人間と同じように思考するので、A/性質、F/分類学の到達関係はない。D/年代、E/自然法則については大きな違反は見

られないため、最小離脱法則によって暫定的に成立すると言える。
その他の要素としては、心理的信憑性、既存の価値観との両立が挙げられる。

5.3.1.2.1.　63―2―1　しんじることの大切さ　(p. 32―33)

63-2-1-1

カオルもサスケのようにいろいろなことをおもっていたのかな。わたしも、もっとカオルの気もちを**わかってあげたいなと思いました。**

分析：
分析不能
TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実命題→AW の事実命題＋〔TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題〕→AW の事実命題→AW の方向付け
書き手は、カオルという書き手の飼っている犬とサスケが似ている[131]としている。その上で、TAW でのサスケのモノローグを見、サスケによく似たカオルも同じように考えていたかもしれないと推論し、自分も飼い犬の気持ちをもっと分かってあげたいという希望を述べている。ただし、サスケとカオルが似ていると述べるためには、サスケの要素を AW へ輸入しなければならない。この際取れる方法は、到達関係は TAW においてサスケの考えていたことを心理的信憑性に基づき輸入するか、「人見知りな行動をする犬である」という事実を
分類学的両立にもとづいた輸入を行うかである。しかし前者は AW のカオルが人間同様に思考することになり、後者は作品全体として分類学的両立が断たれているためそもそも設定できない。従って、ライアンの理論に従えば本項目は分析不可能という事になる。

63-2-1-2

そして、犬と人はことばは通じなくても、心は通じるのだと**思いました。**

分析：
TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題
前項（63-2-1-1）の直後の文。TAW において、サスケとその気持ちを理解しているサチコさんとの様子から、TAW では上記のことが成り立つと結論付けた。そこから心理的信憑性に基づきこの結論を AW へ輸入、AW の犬と人の関係でも同じことが成り立つと結論付けている。全て TAW 内で完結している可能性もあるが、前項から直結する一文であることから、ここでの「犬と人」とはサスケとサチコさんだけでなく、最低でも書き手とその飼い犬であるカオル、広くは犬一般と人一般にあてはまるものとして述べられていると解釈した。

63-2-1-3

人見知りだったサスケが、人をしんじることで、さいごはいろんなひととなかよくなることができてよかったなと**思いました。**

分析：
TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の価値命題⇒TAW に輸入された価値命題
TAW での一連の事実から、サスケは他人を信じることで皆と仲良くなれたと結論付ける。ここから「他人を信じることでみんなと仲良くなれる」として心理的信憑性と既存の価値観との両立から AW に輸入し、書き手の持つ価値規範に基づき良かったと評価している。さらにそれを心理的信憑性と既存の価値観との両立に基づき TRW に再度輸入し、サスケにの行動への評価として述べている。

63-2-1-4

お友だちとケンカをしても、私からあやまる前に、友だちから「ごめんね。」とあやまってくるときもあります。そして、すぐなかなおりをします。友だちもわたしと同じで、「けんかしなければよかった。」と思っていたのかなと**思いました。**

分析：
AW の事実命題→AW の事実命題
人と人もお互い大切に思うと心が通じ合うことがある[132]として挙げている例。AW での経験から、友人の心情を推測している。

63-2-1-5

人を大切に思う心や、しんじ合う心はすごいなあと**思います。**

分析：
AW の事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の価値命題
前項（63-2-1-4）直後の文。前項の事実やそれ以前に挙げた例に対し、書き手の持つ価値規範に基づき凄いという評価を下している。

63-2-1-6

この本を読んで、人をしんじることは大切だと**思いました。**だれかにしんじてもらえると自分もあい手をしんらいできる心がもてるからです。そして、しんじ合えると、ことばにしなくても気もちが**分かる**からです。

分析：
TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の価値命題
TAW のサスケの一連の行動を、サチコさんはサスケを信じており、だからサスケはサチコさんを信じる心を持て、二人は気持ちが通じているのだと結論づける。これを、上記の作文中の表現のように見なして心理的信憑性をもとに AW へと輸入した。更に書き手の持つ価値規範と照らして「人を信じることは大切」と評価した。

63-2-1-7

サスケが人をしんじることでなかまをふやしていったように、わたしもしんじ合う心で友だちを**ふやしていきたいです。**

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題→AW の方向付け

TAW における事実から、サスケは他人を信じることで頼れる相手や仲良くできる相手（書き手の言う仲間）を増やしたと結論付けた。それを心理的信憑性から AW に輸入し、AW でも信じることで仲間、友達を増やせると判断し、そのように行動していくことを AW での行動方針としている。

5.3.1.2.2.　63―2―2　心がつうじあっているよ　（p．46―47）

63-2-2-1

「弟はサスケみたいだな。」本をよみおわって、わたしはそう**思った。**

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実命題→AW の事実命題

TAW において、サスケはサチコさんが他の犬に優しくすることを面白くないと思っている。ここから「大事な人が他の対象に良くすることを面白くないと思うことがある」事を結論付け、これを心理的信憑性に基づき AW に輸入する。AW で自分以外に書き手が優しくするとやきもちを焼く書き手の弟もこの事例に当てはまることから、弟の行動はサスケに似ていると評価している。

63-2-2-2

わたしがスイミングスクールに行っている時、おばあちゃんとるすばんをしていた弟は、わたしに**あいたくなって**一人でわたしをさがしに家をとびだした。

分析：

AW の事実命題

AW での書き手の弟の行動について説明している。

63-2-2-3

そのときの弟の気もちは、サチコさんがかえってこなかったときのサスケの気もちときっとにている**と思う。**弟もわたしをさがしているとき、わたしのことをたくさん思ってくれていたのだろうな。

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実命題→AW の事実命題

TAW において、サチコさんを探しに出たサスケはサチコさんについて様々なことを考えていた。ここから「大事な人を探している時はその人のことをたくさん考えるものだ」として、これを心理的信憑性によって AW に輸入する。この結論と、AW において前項（63-2-2-2）で述べた弟の行動とから推論を行い、その時の弟もサスケのように自分のことをたくさん考えていたのではないかと推測している。

63-2-2-4

サチコさんがいなくなったとき、サスケは元気がなくなっちゃったけれど、みんなにやさしくしてもらって、どんどん元気になっていった。やさしくすることは元気をあげることなんだと**思ったら**わたしもみんなにやさしくして**あげたくなった。**

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の事実命題→AW での方向付け

下線部以前の TAW での事実から、「優しくすることは元気をあげること」と結論付け、心理的信憑性に基づきその結論を AW へ輸入している。さらに、元気をあげる事は良いことだという AW での価値規範の下で、AW での行動方針としてみんなに優しくすること、即ち元気をあげることを掲げている。

5.3.1.2.3.　63―2―3　サスケがかわったこと　（p. 48―49）

63-2-3-1

この本を読みはじめたとき、サチコさんはサスケのことばがわかっていたので、すごいなと思っていました。でも、読んでいくうちに、サチコさんはサスケのことばが**わかる**んじゃなくて、気もちが**わかる**んだということに**気がつきました**。サスケはサチコさんが大すきで、サチコさんもサスケが大すきだから、ことばなんかなくても、気もちが伝わっているのだと**思いました。**

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題→TAW の事実命題

TAW のサスケとサチコさんの関係から、「サチコさんはサスケの言葉ではなく気持ちが分かる」という結論を導いている。また、その理由を「互いに大好きだから言葉が無くても気持ちが伝わる」と推測している。

63-2-3-2

サスケが、サチコさんのことが心ぱいだったり、しんじきれなくてふあんになったりした気もちは、とてもよく**わかります。**わたしも小さいとき、大きなテーマパークでまいごになったことがあるからです。

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実命題→AW の事実命題→AW の事実命題

TAW において、サチコさんを探して迷子になった時の下線部のような心境を、心理的信憑性に基づき AW に輸入する。AW で自分が迷子になった経験と照らし合わせ、両者を似ていると判断している。そこから、サスケの気持ちが分かると結論付けている。

63-2-3-3

今のわたしなら、しんじてまっておけばよかったと**思う**けれど、サスケの場合は、まいごになったことで、かわったことがたくさんあったと**思います。**

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実命題→AW の事実命題

TAW でサチコさんを探しに行ったサスケが迷子になったことに対して、心理的信憑性、及び「誰かを待っているべきだったのに探しに行って迷子になる」という構造の同一から AW に輸入し、書き手が昔テーマパークで迷子になったことを述べる[133]。両事実を比較し、自身の経験については「信じて待っておけば良かった」と評価したうえで、サスケは迷子になったことで変わったことが沢山あると判断している。

63-2-3-4

イヌでもニンゲンでも、やっぱり一人ぼっちで生きていくことはできないと**思います。**じぶんい外のだれかと話したり、気もちが通じ合ったりするから、生きていくことが楽しいのだと**思います。**

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題

引用箇所の直前で、サスケが皆の助けを借りてサチコさんと再会した後は皆に心を開いた様子を指摘し[134]、そこから上記のことを結論付けている。また、直後に次項（63-2-3-5）の一文が続くことから、これらのことが心理的信憑性によって AW でも保持されると判断して、AW に輸入していると考えられる。

63-2-3-5

わたしも、友だちや家ぞくと何があっても**なかよくしていきたい**ので、気もちをこめてつたえて**いこうと思います。**

分析：

AW の方向付け＋（63-2-3-4 での知見）→AW の事実命題→AW の方向付け

友だちや家族と仲良くしたいという AW での希望に対し、前項（63-2-3-4）による議論と結論を受けて、気持ちを込めて伝えれば仲良くしたいという希望が叶うと判断し、そのように行動の方針を定めた。

5.3.1.3.　63―3『アランの歯はでっかいぞこわーいぞ』

あらすじ：

アランはこわーいワニの一族。みんなはアランをこわがるけど、アランは歯を 1 本最低 10 分かけて磨くなど努力しているんです。[135]

補足：

鋭い歯で皆を怖がらせてご機嫌のアランだが、実はみんなが怖がる歯は入れ歯だという秘密がある。毎日夜になると入れ歯を外して秘密の場所にしまっていたアランだが、ある日、ビーバーのバリーが入れ歯を見つけて持っていってしまった。入れ歯がないことに気付いたアランは不安がりながらもいつものようにジャングルに行くが、歯の無い様子をみんなに笑われ、恥ずかしさで酷く落ち込んでしまう。大声で泣いていたアランの下に、入れ歯を持ったジャングルのみんながやって来る。彼等は「二度と僕らを怖がらせない」ことを条件に入れ歯を返すとアランに告げる。他に何もできない自分はどうすればいいかと問うアランに、カエルが「いい考え」を提案する。以来アランは入れ歯を使って皆の役に立つ仕事をし始め、怖がらせは怖い話でするようになり、バリーに時々入れ歯を貸してあげるようになった。

作品の分析：

アラン達登場人物は AW には存在しないため、B/同目録は適用されず、C/拡大目録が適用される。アランをはじめジャングルの動物たちは人間と同じように喋り思考するので、A/性質、F/分類学の到達関係はない。D/年代、E/自然法則の到達関係については大きな違反は見られないため、最小離脱法則によって暫定的に成立すると言える。

その他の要素としては、心理的信憑性、既存の価値観との両立が挙げられる。

5.3.1.3.1.　63―3―1　友だちっていいな　（p. 14―15）

63-3-1-1

その歯の本当のやく立て方を**教えてくれた**のが友だちってこともすてきだよね。

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の価値命題

TAW でアランの歯の役立て方を友達が教えてくれた事実から、「自分の長所の役立たせ方を友達に教えてもらえる」という状況を心理的信憑性と既存の価値観との両立から AW に輸入した。これを書き手の持つ価値規範に基づき、素敵であると評価している。

63-3-1-2

アランが「ぼくはどうしたらいいの。ほかになにもできないんだから。」って言った時、ぼくはとてもかなしかったんだ。かわいそうっても**思った**。アランはあんなにみんなを

おどろかせてたのしんでいたのに、本当はじぶんにじしんがないんだって。

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題→AW の事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の価値命題⇒TAW に輸入された価値命題

TAW で、アランはみんなを怖がらせて楽しんでいたが、入れ歯であることがばれた時、下線部以前の台詞を言った。この状況を心理的信憑性によって AW に輸入し、「このような事を言う人は本当は自分に自信がないのだろう」と推測し、書き手の持つ価値規範からこのような人に対し悲しい、可哀想だという感想を抱いた。更に心理的信憑性に基づきこの結論を TAW へ再度輸入し、アランへと適用している。

63-3-1-3

だから、アランがかみを切ってあげたり、歯のみがき方を教えてあげたりしているのを見て、よかったなあって**思ったよ。**じぶんのとくいなことで友だちのやくに立てるってうれしいもんね。

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実命題→AW の事実命題⇒TAW に輸入された事実命題→TAW の事実命題→TAW の事実命題

アランは入れ歯を使った仕事でみんなを喜ばせるようになったという TAW の事実から、「自分の得意なことで他人を怖がらせていた人が、得意なことで皆の役に立つことをするようになった」と結論付け、心理的信憑性、既存の価値観との両立によって AW に輸入する。これに対し書き手は、泣いてばかりで得意なことがなかった自分が友だちに「〇〇くん（書き手）は聞き方名人だよね。」と言われ、自分にもできることがあると嬉しくなった[136]という自分の経験を挙げる。輸入した結論と書き手の経験から推論を行い、「得意なことで役に立てるのは嬉しい」と結論付けた。それを心理的信憑性、既存の価値観との両立によって TAW に再度輸入し、アランも自分の得意なことで人の役に立っているから嬉しいだろうと類比的に推測し、それに対し「よかった」という評価を下している。

63-3-1-4

でも、ばれてよかったと**思うんだ。**だってね、みんなとなかよくなれたし、「あらんはごきげんです。」じゃなくて「アランもごきげんです。」にかわったんだもん。あらんもってことは、みんなもってことでしょ。ぼくも、さん数の問だいがじぶんだけ分かってもちょっとしかうれしくないよ。二年生六人ぜんいんが**わかった**時が一ばんうれしい。みんなでしあわせな気もちになれるっていいことだよね。

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実→AW の事実＋AW の暗黙の法則→AW の価値命題⇒TAW に輸入された価値命題＋TAW の事実命題→

TAW の事実命題
TAW でアランはみんなと仲良くなったという事実、及び「アランはごきげんです」から「アランもごきげんです」へのテクスト上の表現の変化に着目している。後者については文章表現から、アラン「も」ということは皆「も」そうだろうと推測を行った。これらを根拠に「皆が幸せになった」と結論付け、このことを心理的信憑性と既存の価値観との両立によって AW に輸入している。これを自分の算数の問題の経験に照らして、皆が幸せになったのなら 1 人がご機嫌だった時より嬉しいだろうと推論を行った。その上で、書き手の持つ価値規範に基づき「みんなで幸せになれるのは良いこと」と評価している。更にこ結論を心理的信憑性と既存の価値観との両立によって再度 TAW に輸入し、アランもこれに当てはまることから、ならば「アランにとってもばれて良かった」と推論を行っている。

5.3.1.3.2.　63―3―2　ほんとうのつよさをくれたアラン　（p. 28―29）
63-3-2-1
　このほんをよんで、ぼくはいますぐがっこうのおともだちに**あいたくなったよ**。みんなとたくさんおはなししたり、おにごっこをしたりして**あそびたくなったんだ**。
分析：
TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の事実命題→AW の方向付け
TAW におけるアランと森の皆の様子から、仲が良さそうだと結論付け、それを心理的信憑性から AW においても生じうる様子として輸入している。そして、書き手の持つ価値規範から、「周囲の人と仲良く過ごすのは良いもの、楽しい事」と結論づける。更にその結論を踏まえ、自分も友達と会って遊びたいと結論付けている。

63-3-2-2
　ぼくも、がっこうのおともだちにつよいところをみせたいと**おもって**がんばってた。
分析：
AW の事実命題
AW における書き手の心情を説明している。

63-3-2-3
　「どうしてなのかな」って**おもった**よ。
分析：
AW の事実命題→AW の事実命題
強い所を見せたくて頑張っている自分が「だめだよ」「やめてよ」と友達に言われたことに対し、疑問を抱いている。

63-3-2-4

アランのはがいればだということがもりのどうぶつたちにばれたとき、アランはおおきなこえでないたよね。そのときぼくは**きがついたんだ。**いくらつよくても、おともだちがいやがることとかこわがることをしていたんじゃ、なかよしのおともだちはつくれない。それは、ほんとうのつよさにならないんだってね。

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題

森の動物を怖がらせていたアランが入れ歯であることを知られて泣いた、という TAW の事実から、下線部以降のことを導き、心理的信憑性からそれが AW でも保持されると判断して、AW に結論を輸入している。本項の記述だけでは結論が TAW に留まるものか AW でも適用できるとみなされているか判別出来ないが、これが前項（63-3-2-2）の直後につながる文であることから、特に AW での疑問に対する解答として導入していると判断した。

5.3.1.3.3.　63―3―3　「アランの歯はでっかいぞこわーいぞ」をよんで　（p. 42―43）

63-3-3-1

でも、そのあとあらんとみんなはなかよくなりました。ふしぎだな。**きっと**、いればのつかいかたをかえたからだね。

分析：

TAW の事実命題→TAW の命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の事実命題、

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題→AW の事実命題⇒TAW に輸入された事実命題

TAW で動物たちを怖がらせていたアランが、後に動物たちと仲良くなったという事実から、「皆を怖がらせていた人が皆と仲良くなった」と結論付け、これを心理的信憑性によって AW に輸入し、書き手の持つ価値規範と照らし合わせて「不思議だ」と結論付けた。更に、仲良くなるにあたりアランは入れ歯を他の動物たちのために使うようになったという TAW の事実から、「仲良くなる前に怖がらせていた原因を利用して皆のためになることをした」という結論を導いた後、既存の価値観との両立から AW に輸入し、これが仲良くなれた原因であると推測している。更にこの結論を TAW に輸入することで、TAW に対する結論として受け入れている。

63-3-3-2

ぼくも、あらんみたいに**なりたいな。**

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の価値命題→AW の方向付け

TAW において入れ歯で動物たちを怖がらせていたアランが動物たちのために入れ歯を使うようになったことを、「皆を怖がらせていた人が、怖がらせていた原因を利用して皆のためになることをした」と結論付け、心理的信憑性、既存の価値観との両立に基づき AW に輸入している。これを書き手の持つ価値規範に基づき「つよくてこわいあらんが、つよくてやさしいあらん」[137]に変わったと評価し、自分もそのようになりたいと今後の方針を定めている。

63-3-3-3

ぼくがいまできることは、おともだちのきもちになって、おともだちをたいせつにおもうことだけです。でもきっと、これを続けていけばいつかあらんみたいに、つよくてやさしいぼくになれると**おもいます。**

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実命題→AW の事実命題

TAW において、アランは自分が入れ歯だという恥ずかしい秘密がみんなにばれてしまったが、その秘密に関わる良い面をみんなのために使うことによって、みんなに慕われるようになった。ここから「知られたら恥ずかしい秘密でも、それをみんなのために役立てることが出来るし、そうすると強くて優しい人になれる」と結論付け、これを心理的信憑性により AW 輸入している。AW での書き手は本を読んですぐ泣いてしまう泣き虫であるものの、書き手の母に「それは泣き虫ではなく、アランの気持ちになって、アランを大切に思った涙だ」と言われた。この事実を AW に輸入した結論と照らし合わせて推論を行い、自分の秘密も友達のために使えばアランのように強くて優しくなれると結論付けている。

5.3.1.3.4.　63―3―4　じまんのしごと　（p.　44―45）

63-3-4-1

「こわがらせのしごと」、アランはたのしそうにやっているようにみえたけど、ほんとうかなあって**おもったよ。**だって、だれもアランのそばにきてくれないよ。こわいもん。

分析：

TAW の事実⇒AW に輸入された事実＋AW の暗黙の法則→AW の事実命題→TAW に輸入された事実命題⇒TAW の事実命題

TAW において、アランが楽しそうに動物たちを怖がらせているという事実と、アランが怖いから誰もアランに近づかないという事実を「楽しそうに怖がらせている人がいるが、怖がらされている人たちは怖いのでその人に近づかない」と解釈し、これを心理的信憑性に基づき AW に輸入する。書き手の持つ価値規範に基づき、そのような人は本当に楽しいのか、本当はそうではないのではないかという推測を行っている。更にこれを心理的信憑性に基づき TAW へ再度輸入し、これがアランにも当てはまることから、アランの心情を推論してい

る。

63-3-4-2

　　でも、まえのよりずっといい「こわがらせ」だと**おもうよ**。

分析：

TAW の事実⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の価値命題⇒TAW に輸入された価値命題＋TAW の事実命題→TAW の事実命題

アランの歯による怖がらせと、入れ歯がばれてからの怖い話での怖がらせの事実を、心理的信憑性、既存の価値観との両立に基づき AW に輸入する。そして、書き手の持つ価値規範に基づき、後者の方が良いと評価している。更に、心理的信憑性、既存の価値観との両立からこの評価を再度 TAW に輸入し、TAW のアランの行動についても成り立つものであるとして結論付けている。

5.3.1.4.　63―4『くろねこのどん』

あらすじ：

「ようい、どん」えみちゃんが、かけ声をかけるとぱっとあらわれて、にゃーとこたえるねこ。いつのまにか「どん」という名前になりました。きょうは、どん、来るかな?雨の日、風の日、雪の日にきまってあそびにやってくるどん。ねこと女の子のなかよしで自由なかんけい。[138]

（Web 版児童図書総目録、NDL サーチに記載が無かったため Google books より引用）

補足：

どんとえみちゃんを主軸とした短編集。どんはある雨の日にえみちゃんに家に上げてもらい、世話をされた猫で、以来えみちゃんと仲良くなる。どんは雨の日、風の日、雪の日にえみちゃんが一人で家にいるところへ遊びにやって来てえみちゃんと話をする。家の外でも会えるが基本的に外では喋らない、普通の猫として振る舞う。ただし「晴れの日のどん」で雨が降っている時に家に来て、もうすぐ雨が止むからとえみちゃんと外で待ち合わせた際など数回は、外でもえみちゃんと話している。どん以外の猫もどんと同様の条件で喋ったり喋らなかったりする。どんとの遊びの中で、えみちゃんは雲に乗ったり、どんと身体を取り換えてどんになって遊びに行ったりしている。

作品の分析：

えみちゃん、どんといった登場人物は AW には存在しないため、B/同目録ではなく C/拡大目録が適用される。また D/年代については大きな違反は見られず、最小離脱法則によって暫定的に成立すると言える。

えみちゃんは初めてどんが喋った時、驚きながらも自然にそれを受け入れる。しかし態度や発言を見るに、えみちゃん以外の人間、例えば、えみちゃんの友人のともちゃん、どんをくろべえという名前で呼ぶ「きもとさんのおばあちゃん」などにとっては、どんたち猫は喋ら

ない、AW で言う所の普通の猫と認識されている。このことから、この物語はえみちゃんにとっての現実と、それ以外の人物にとっての現実が分裂している分裂存在論の領域にあることが考えられる。えみちゃん以外にとっての TAW は A/性質と C/拡大目録による、我々の世界と殆ど違いのない世界である。一方でえみちゃんにとっての TAW は、猫が人語を喋ることから、E/自然法則、F/分類学は適用されない。更に、えみちゃんがどんと身体を取り換えた時に初めて会った木本さんのおばあちゃんは TAW において客観的に実在し、身体が戻ってから交流を持ったりしているため、えみちゃんにとっての現実である不思議な体験は、空想や妄想ではなく「事実」として扱われている。

5.3.1.4.1.　63―4―1　「わたしにもどんがいたらいいのにな」　（p．96―97）

63-4-1-1

いつも学校の行き帰りに通る小屋の所に、何びきかねこがいて、見るたびにかわいいなあと**思う**から。

分析：

AW の事実＋AW の暗黙の法則→AW の結論

AW において、通学路にいる猫に対し、書き手の持つ価値規範に基づき可愛いと評価している。

63-4-1-2

えみちゃんにだっこされてミルクを飲ませてもらうどんは、赤ちゃんみたい。わたしに弟がいたらこんなかんじかと**思った**。

分析：

分析不能

TAW の事実⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実命題→AW の事実命題（⇒）APW の創出→APW の事実命題

TAW におけるどんの、えみちゃんにだっこされてミルクを飲む様子を AW に輸入し赤ちゃんみたいだと評価した。その後、何らかの導出に基づいて自分に弟がいる APW を創出し、その世界の弟の様子はどんに似ているだろうと推測しているが、ライアンの虚構論は新たな可能世界の創出には対応していないため、今回使用した理論では分析が行えないとみなされる。

63-4-1-3

一つ**わかったことがある**。わたしがいつも声をかけるねこは、近くによって来る時も、全ぜんふりむかない時もある。ずっとそれがふしぎだった。でもどんを見ていると、ころころくるくる気持ちがかわるから、ねこってそうなんだということが**分かって**、ちょっとほっとした。

分析：
分析不能
TAW のどんの気持ちの変わり様から、猫は気まぐれだと結論付け、これを AW に輸入し、AW での猫も気まぐれだと結論付けている。この輸入の際、書き手は TAW において猫の外見的特徴やある種の生態といった一部の分類学的両立については AW との共通性が維持されていると考え、猫の「気まぐれである」もそのような共通性を残した部分であるとして結論を導いていると思われる。しかしライアンの理論に則るのであれば、この作品の TAW と AW との間には分類学的両立は存在しない。よって、厳密にライアンの理論に従うならば、本項目は分析不能となる。

63-4-1-4

どんと一しょににじのはしをたたく。そうしたらきっと、木きんみたいな明るい音がすると思うんだ。

分析：
分析不能
TAW の事実⇒（T）APW の創出→（T）APW の事実命題
TAW のどんとえみちゃんの様子から、「わたしがお話の続きを書くとしたら」[139]として物語の続きとなる TAPW を創出し、その中での想像を膨らませている。ただし、どんと一緒に虹の橋を叩くのが誰かについては明言されておらず、次の項（63-4-1-5）での表現も考慮するとこれは書き手である可能性がある。その場合、新たに作られた可能世界はどんの複製と書き手の複製が共存するような TAPW であり APW でもあることになる。いずれにしろライアンの虚構論は新たな可能世界の創出には対応していないため、今回使用した理論では分析が行えないとみなされる。

63-4-1-5

どんとどんなことしようかと**考える**だけで、わくわくする。

分析：
分析不能
前項（63-4-1-4）に続く一文。前項で述べたような（T）APW について想像することについて、メタ的な視点で感想を述べている。本稿で採用した虚構論は、このような、虚構のゲームを行うことそのものに対して言及・評価するような行為には適用できない。

5.3.1.5.　63―5『空にむかってともだち宣言』

あらすじ：
あいりのクラスにミャンマーからナーミンが転校してきた。しかし、ある事件がおこり、みんなで難民について学ぶことに…。[140]

補足：
夏休みの終わり、母と二人でマンションに暮らすあいりのとなりのへやに、ミャンマーからの一家が引っ越してきた。いっかにはさんにんのこどもがいるが、長女のナーミンはあいりと同い年だ。ナーミン一家の世話役であり、あいりの母の友人でもあるゴンさんから、あいりは学校でのナーミン達の世話を頼まれる。新学期が始まったある日、給食の時間にナーミンが「難民だからナーミン」だと男子にからかわれる事件が起きた。 次の国語の時間を急遽変更して行われた難民について知る授業で、ナーミンは「新聞記者である父が書いた記事を国の政治に反対しているとみなされて、警察に連れていかれた」と話す。別な日、都庁前の広場で行われた「ミャンマー・フェスティバル」で、あいりはミャンマー伝統の踊り「バガンダンス」を見、感動する。更にナーミンが小学校に馴染むのを助けてくれたとして「なかよし大使」として表彰された。翌日、担任の先生に学習発表会の出し物を相談されたあいりとナーミンは、バガンダンスを提案する。あいりとナーミン、そしてダンスの上手いナーミンの母による説明を受け、クラスは全員一致で「バガンダンスとミャンマーの子どもたち」について発表することを決める。クラス全員で練習を重ねること一月、クラスの発表は大成功を収める。あいりはナーミンと一生の友達になると空に向けて宣言するのであった。
作品の分析：
愛梨やナーミンといった登場人物は AW には存在しないため、B/同目録は適用されず、C/拡大目録が適用される。ものの特徴、国の特徴については AW と共通がみられるため、A/性質、F/分類学は成立する。D/年代、E/自然法則については大きな違反は見られないため、最小離脱法則によって暫定的に成立すると言える。
その他の要素としては、心理的信憑性、社会経済的同一、既存の価値観との両立が挙げられる。

5.3.1.5.1.　63―5―1　おなじじゃなくても　（p．68―69）
63-5-1-1

私は、国のリーダーの気もちを**考えてみました。**リーダーとして先頭に立つ人は、一人でもついて来なかったら、むりやり後について来させようとします。私にも同じ経験があります。同じ意見の人を増やせば周りの人からみとめられるからです。でも、自分の意見に反対されると困ります。そこで、その人をいないことにしようとするのではないでしょうか。そう、ナーミンのお父さんのように。リーダーをおそれて、本当のことが言えなくなってしまう国が出来上がります。

分析：
TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実命題→AW の事実命題⇒TAW に輸入された事実命題
TAW においてナーミンの母国が、国に都合の悪い記事を書いたとしてナーミンの父を追放したという事実を、年代的両立、社会経済的同一、心理的信憑性に基づきそのような事実が

AW においても成立しうるとして AW に輸入する。そして、書き手の持つ価値規範に基づきナーミンの国の主導者像と、その結果出来てしまう国のあり方を推測している。その際、特に AW での自分の経験も照らし合わせている。また「そう、ナーミンのお父さんのように」という表現から、AW での結論を同じく年代的両立、社会経済的同一、心理的信憑性に基づき再度 TAW へ輸入して、TAW でも保持される結論とみなしていることが窺える。

63-5-1-2

日本は人とはちがう考えも大切にして、受け入れることができる国なのだと**思います。**

分析：

（63-5-1-1 の知見）＋AW の事実命題→AW の事実命題

前項（63-5-1-1）での AW における知見と、AW での日本の差別の無さとを比較してこのように結論付けている。

63-5-1-3

それがすごくうれしく**思いました。**

分析：

TAW の事実⇒AW に輸入された事実命題→AW の事実命題＋〔AW の事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の価値命題〕→AW の価値命題＋AW の暗黙の法則→AW の価値命題

ここでの「それ」とは TAW において、当初ナーミンを差別していたナーミンのクラスが、よりよく変わってきたと書き手が判断したことである。当初ナーミンをからかっていた TAW のナーミンのクラスは、次第にナーミンを理解していった。これを心理的信憑性、既存の価値観との両立から TAW に輸入し、このナーミンのクラスの変化を、書き手のクラスのようになろうと努力していると結論づけた。ここで書き手は、書き手の所属するクラスを「一人一人を理かいし合い、本当の答えを力ずくでもとめず、より良くなるアイデアを仲良く出し合えて困っている人も、自分だけの考えをもっている人も、みんな同じ輪に入れます。」[141]と述べ、これを書き手の持つ価値規範に基づき素敵であると評価している。両者をもとに、書き手のクラスが素敵であり、ナーミンのクラスが書き手のクラスのようになろうとしているのであれば、そのクラスは素敵であるとの推測を行っている。その変化について嬉しいと感想を述べている。

63-5-1-4

一人一人同じじゃない人たちが理かいし合うためには、話し合ってお互いのことを**知る**ことが大切です。伝えるのが苦手でも、それが本当に伝えたいことなら必ず伝わるはずです。私ももっと、みんなに自分のことを、うれしいことも、悲しいことも、話す努力を**していきたいと思いました。**

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題→AW の方向付け
ナーミンが自分のことを自分の言葉でクラスの皆に伝えたことをきっかけにクラスがナーミンのことを理解し変わっていったという事実から、下線部以前の結論を導き、心理的信憑性をもとにその結論を AW に輸入している。更にそれをもとに、自分の今後の方針を掲げている。

63-5-1-5

「一人一人ちがうからおもしろくて、考えを聞き合うことで、新しいことが**分かって、つながりが広がってもっとすてきな場所になる。**」という考えが、世界中に**広まるといいなと思います。**

分析：
TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の価値命題→AW の方向付け
TAW の一連の事実から、上記のような結論を導いている。更にその結論を心理的同一、既存の価値観との両立から AW へ輸入し、同様の結論が AW でも保持されると判断した上で、書き手の持つ価値規範に基づきこの結論が世界中に広がるのは良いことであると評価している。そこから、その通りになれば良いという希望を抱いている。

5.3.2. 第 62 回青少年読書感想文全国コンクールの作品の分析

5.3.2.1. 62—1『ボタンちゃん』

あらすじ：
ボタンちゃんはアンナちゃんのブラウスの一番上にとまっています。ボタンちゃんのなかよしは、ボタンホールちゃんです。[142]
補足：
ある日ボタンちゃんはブラウスからほつれて落ち、子供部屋の床を転がっていく。そしておもちゃ箱の裏側でガラガラに、洋服ダンスの裏でよだれかけに、ベッドの下でホッキョクグマのぬいぐるみにそれぞれ出会う。彼等はかつてはアンナちゃんと共に過ごしていたが、アンナちゃんの成長に従い忘れられていたのだった。悲しんでいた品々に、ボタンちゃんはアンナちゃんの近況を話して聞かせ、「あなたのおかげ」だと告げる。やがてボタンちゃんはアンナちゃんの母に見つけられ、ブラウスに縫い付け直してもらう。忘れられていた品々も掃除によってアンナちゃんの母に見つけてもらい、「思い出の箱」にしまわれる。やがてブラウスも小さくなり、ボタンちゃんとボタンホールちゃんは思い出の箱にしまわれ、他の品達とアンナちゃんの無事を祈りつつ仲良く過ごすのだった。
作品の分析：
ボタンちゃん達道具も、アンナちゃんやその母といった登場人物も AW には存在しないため、B/同目録は適用されず、C/拡大目録が適用される。ボタンちゃんたち品物は人間と同じ

ように喋り思考するので、A/性質、E/自然法則、F/分類学の到達関係はない。ただし、アンナちゃんやその母は品物たちの思考や会話に気付いている様子はない。D/年代の到達関係については大きな違反は見られないため、最小離脱法則によって暫定的に成立すると言える。
考えられる到達関係としては、心理的信憑性、既存の価値観との両立である。

5.3.2.1.1.　62―1―1　ボタンちゃんと思い出のはこ　（p．34―35）
62-1-1-1

わたしは、「ボタンちゃん」を読んで、自分も思い出のはこを**つくってみたくなりました。**なぜかというと、小さいころの思い出が、よごれたりなくなったりするととてもかなしくなるからです。（略）おかあさんに、「わたしも思い出のはこをつくって大切に**とっておきたい**。」とおねがいしました。

分析：
TAW の事実⇒AW に輸入された事実＋AW の暗黙の法則→AW の事実命題→AW の事実命題→AW の方向付け
TAW において、思い出の品々が忘れられて汚れていたこと、ボタンちゃんの持ち主の母がそれらを見つけ、きれいに直して思い出の箱にしまっていたことに対し、保たれている部分的なものの性質の同一、心理的信憑性に基づき、それらが AW でも起こり得るものとして AW に輸入している。そして書き手の持つ価値規範に基づき、自分の思い出の品が汚れたりしたら悲しいと結論付けた上で、思い出の箱を作ればそうはならないだろうと推論し、自分も思い出の箱を作りたいという方針を立てている。

62-1-1-2

ボタンちゃんみたいにお話しができたら、「いつも見まもってくれてありがとうね。」とおれいが**言いたい**です。

分析：
分析不能
書き手の述べる AW での方向付け「見守ってくれてありがとうと言いたい」は、TAW で思い出の品々がアンナちゃんを見守っていたことから、「思い出の品は持ち主を見守っている」ことに基づいている。しかし、このことは到達関係によっても最小離脱法則によっても AW に輸入できるものではなく、ライアンの理論に従うならば、本項目は分析不能となる。

62-1-1-3

もうすこし大人になったら、たいせつにしているぬいぐるみや、絵本も思い出のはこに入れておばあちゃんになるまで大切に**とっておきたいです。**入りきらないおもちゃは、かえっこひろばにもって行って、ほかの友だちに大切につかってほしいです。それと、

毎日おせわになっているえんぴつ、ふでばこ、けしごむなどにもありがとうという気もちをこめてつかいます。

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の事実命題→AW での方向付け

TAW の思い出の品々の様子を、心理的信憑性、既存の価値観との両立に基づき AW に輸入し、AW で書き手の持つ価値規範に基づき思い出のものを含めものは大事にするべきであると結論付けた。更にこれに基づいて AW での行動方針を定めている。

5.3.2.1.2.　62―1―2　わたしはがんばってるよ　（p. 46―47）

62-1-2-1

しょうがくせいになってできるようになったことや、うれしいこともふえました。おともだちができて、たのしいこともふえました。これから、たのしいことやうれしいことがふえると**おもいます。**

分析：

AW の事実命題→AW の事実命題

AW の自分の経験において、小学生になって出来るようになったこと、楽しいこと、嬉しいことが増えたことを根拠に、これから自分が大きくなって出来ることが増えるにつれ、楽しいことや嬉しいことも増えるだろうと予想している。

5.3.2.2.　62―2『ひみつのきもちぎんこう』

あらすじ：

いじわるや自分勝手をすると黒コインが,勇気を出したり努力すると銀コインがたまる「きもち銀行」。黒コインが満杯になると……。[143]

補足：

黒コインは「うそきもち」、銀コインは「ほんまきもち」、黒コインがいっぱいになると良い心が消えてしまうが、銀コインが増えれば増えただけ良い気持ちが大きくなり黒コインは消えるという。自分の気持ちに反してりくくんと喧嘩をしたり、手の不自由なここみちゃんに意地悪したりしていたゆうたは、銀行から「もうすぐ黒コインがいっぱいです」と呼び出しを受ける。そこで出会った番頭さんから、銀行のシステムと、かつてここみちゃんの通帳にも黒コインがいっぱいだったが色々なことに挑戦して銀コインを増やしたという話を聞く。次の日から素直な気持ちに従って行動しはじめるゆうた。帰り道の土砂降りをここみちゃんと雨宿りしたゆうたは、ここみちゃんに「銀コインがもっと増えれば強い気持ちが大きくなって何でもできるようになる」と言うが、ここみちゃんは「手が不自由じゃなかったら周りの人の優しさや思いやりに気付けなかったからこのままで良い」と返す。

作品の分析：

ゆうたやここみちゃんといった登場人物は AW には存在しないため、B/同目録は適用されず、C/拡大目録が適用される。また、きもちぎんこうや黒コイン、銀コインといったきもちぎんこうにまつわるシステムやものも存在しないため、F/分類学についても同一性は成立しない。A/性質の同一についてはきもちぎんこうの周辺において限定的に破られている状態である。D/年代、E/自然法則については大きな違反は見られないため、最小離脱法則によって暫定的に成立すると言える。
その他の要素としては、心理的信憑性、既存の価値観との両立が挙げられる。
また、本作品は「教訓もの」としての特徴が色濃い。ライアンによれば、教訓ものの虚構的作品において、教訓は TAW における諸事実の解釈であり、その適用範囲は AW・TAW に跨るとされる[144]。しかし AW において TAW にあるようなきもちぎんこうは存在しない。そのため、この作品を理解するためには以下のような読み替えが必要となる。
「きもちぎんこう」そのものは AW には存在しないが「貨幣」を「蓄積」する機能を持つ銀行というシステムは AW にも存在する。黒コインは自分の気持ちに素直にならず悪い行動を取ると増え、銀コインは素直に良い行動をすると増える。黒コインと銀コインそのものは AW に存在しないが、黒コインの貯まる条件である悪行、偽コインの貯まる条件である善行は存在する。ここから、AW にはきもちぎんこうシステムそのものは存在しないが、悪行と善行の蓄積、及び蓄積の結果という善悪のシステムとして部分的な（破れていない部分の）ものの性質の同一と既存の価値観との両立によって輸入することが可能である。これは、黒コイン即ち悪行が貯まると良い心がなくなり、銀コイン即ち善行が貯まると強い気持ちが増え、何でもできるようになるという設定とも矛盾しない。
これに基づき、作文中で AW にありながらきもちぎんこうについて述べる分がある時には、常にこの読み替えの下にあるとみなせる。黒コインは悪行の、銀コインは善行の象徴であり可視化、きもちぎんこうはそれらが蓄積するシステムの象徴として機能する。こういったテクスト上の一種の比喩表現を援用しているとして、作文の解釈を行っていく。

5.3.2.2.1.　62―2―1　本もののぎん色コインをふやしたいな　（p. 18―19）

62-2-1-1

でも、少したってみると、本当にそうかなと**考えました。**

分析：
AW の事実命題
AW において、書き手が自分の行動について考えたという事実。

62-2-1-2

もしかすると、わたしの通ちょうにも、けっこう黒コインがあるかもしれない。わたしは、少し心ぱいになってきました。黒コインは気づかないうちにたまっていくのに、ぎん色コインは、なかなかたまらないのだと**気づきました。**

分析：
TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実→AW の事実命題
TAW のきもち銀行のシステムを、既存の価値観との両立によって善悪のシステムとして読み替え、AW に輸入している。その上で、自分の行動を振り返り、自分の気持ち通帳にも黒コインはあるかも知れない、即ち自分の行動の中にも悪行はあるかもしれないと推測した。そこから、黒コインは貯まるが銀色コインは貯まりづらい、即ち悪行はしやすいが善行はしづらいという結論を導いている。

62-2-1-3

ゆうたは、黒コインをへらすために、ぎん色コインをあつめるど力をしました。それはとてもいいことだと**思う**けど、自分の通ちょうが黒コインでいっぱいにならないために、がんばったり、人にやさしくしたりするのは本もののぎん色コインではないと**思います。**

分析：
TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の価値命題
TAW において、ゆうたは気持ち通帳が黒コインでいっぱいになってしまう危機感から、対策として銀色コインを集めるためにいい事や素直な行動をし始めた。これを「利益のために善行を行う努力をした」と結論付け、心理的信憑性、既存の価値観との両立から AW に輸入する。これの結論に対し、書き手は自身の持つ価値規範に基づき、ゆうたのした努力は評価するものの、それは本物の銀色コインではない、即ち本当の善行ではないと結論付けている。

62-2-1-4

でも、ゆうたは、だんだんゆう気を出していろいろな人にやさしくできるようになってきました。ここみちゃんにもゆう気を出して「だいじょうぶ。ありがとう。」と言うことができてすごいと**思いました。**

分析：
TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の価値命題⇒TAW に輸入された価値命題
TAW においてゆうたが下線部のような行動をしたという事実に対し、心理的信憑性から AW でも同様のことを行いうるとして AW に輸入している。これに対し書き手の持つ価値規範に基づいて、そのような状況で大丈夫、ありがとうと言えることは凄いことであると評価している。更にこの結論を心理的信憑性に基づき TAW に再度輸入し、ゆうたの行動についてもこの結論に当てはまるため凄いと評価している。

62-2-1-5

わたしも、ぎん色コインが欲しいからがんばったり、いいことをしたりするのではなくまわりの人のことを思いやり、やさしさに気づける人に**なりたいです。**

分析：

（62-2-1-3 における AW の知見）＋AW の暗黙の法則→AW の価値命題→AW の価値命題→AW の方向付け

62-2-1-3 での本物ではない銀色コインの問題をうけて、書き手の持つ価値規範に基づき、本物の銀色コインを得るためには銀色コインがほしいから行動するのでは駄目だ、即ち善行による利益を目的に善行をするのでは駄目だと結論付けた。そこから、真の善行のためには善行に伴う利益を目的にせず人を思いやり、優しさに気付けなければならないだろうと推測した。更にこの結論を今後の行動方針としている。

62-2-1-6

そして、知らない間にわたしの通ちょうが、本もののぎん色コインでいっぱいになったらいいなと**思います。**

分析：

（62-2-1-5 での AW の方向付け→）AW の方向付け

前項（62-2-1-5）での行動方針を受け、その結果本物の銀色コインが溜まる、即ち真の善行をたくさん行えると良いという AW への希望を述べている。

5.3.2.2.2.　62―2―2　ゆうきをだして　（p．30―31）

62-2-2-1

どうしたらいいかは、ばんとうさんはおしえてはくれなかった。「あほっ。自分で考えてみ」って言ってた。どうしたらいいかは、ゆうたがおしえてくれていると**おもう。**女の子やおばあちゃんにやさしくしただけじゃなくて、りくくんのからかいにものらず、ゆうたのしたいとおもう、本とうのきもちのとおりにけんかをしなかった。

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題

ここでの「どうしたらいいか」は、「黒コインが一杯にならないためにはどうしたらいいか」という AW の疑問である。きもち銀行のシステム、及び TAW でのゆうたの行動の結果黒コインが消えて行ったという事実を見て、これが TAW における「どうしたらいいか」という問いへの答えであると結論付けている。それらを心理的信憑性、既存の価値観との両立から AW へ輸入し、AW におけるきもちぎんこうに基づいた善悪のシステムに対しても結論が保持されると判断している。

62-2-2-2

きっとゆうたは、チャリーンをいっぱい聞いたと**おもう**。

分析：

（62-2-2-1 での TAW の知見）→TAW の事実命題

前項（62-2-2-1）から続く一文。前項での TAW に対する結論を受け、ゆうたの対応が黒コインが一杯にならない方法として正しいのであれば、TAW における銀コインの貯まる音である「チャリーン」をたくさん聞いたであろうと推論を行っている。

62-2-2-3

「自分ではできないこともあるけれど、まずは、自分でできることからしよう」って、自分できめることができるここみちゃんはすごいと**おもう**。

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の事実命題⇒TAW に輸入された事実命題

TAW においてここみちゃんが下線部のような決意をしたという事実に対し、心理的信憑性から AW でも同様のことを行いうるとして AW に輸入している。これに対し書き手の持つ価値規範に基づいて、そのように自分で判断できることは凄いことであると評価している。更にこの結論を心理的信憑性に基づき TAW に再度輸入し、ここみちゃんの行動についてもこの結論に当てはまるため凄いと評価している。

5.3.2.2.3.　62―2―3　チャリーンチャリーンでいっぱいに（p. 50―51）

62-2-3-1

二年生になって、ぼくのクラスにスリランカからてん校生が来た。みじかいあいだでまたスリランカに帰ってしまったけれど、そのお友だちが来たとき、ぼくは一生けんめいゆう気を出した。日本語分かるかな、困ったことないかな、いっしょに**あそびたいな**と、いっぱいこえをかけた。

分析：

AW の方向付け→AW の事実命題

AW において書き手がスリランカからの転校生と一緒に遊びたいという希望を持ち、そのために声を掛けたことを述べている。

62-2-3-2

今**思う**とそのときは、きれいなチャリーンのコインの音が聞こえていたかもしれない。

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実命題→AW の事実命題

TAW でのきもちぎんこうのシステムを心理的信憑性、既存の価値観との両立から AW での善悪のシステムとして読み替え、AW で書き手がスリランカからの転校生に親切にした事実

を根拠に、善行をたくさんした、即ち銀コインがたくさん貯まっていたと推測した。このことを、作品内の表現を用い比喩的に表現している。

62-2-3-3

お友だちがスリランカに帰ってしまったときはとてもさびしかったけれど、コインといっしょに思い出ものこっていると**思う**とうれしい気持ちになる。

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW における事実命題→AW における事実命題→AW における事実命題

TAW のきもち銀行のシステムを、善悪のシステムとして結論付け、既存の価値観との両立から AW へ輸入する。この際の銀コイン＝善行の構図と、自分がスリランカからの友人に親切にしたという事実から、何らかの導出を行い、コインと一緒に思い出も残っていると判断をしているが、記述からだけではこの導出過程が分からないため曖昧である。更にこの結論に対して、書き手は嬉しいという感想を抱いている。

62-2-3-4

気もちぎんこうは、ぼくとスリランカのお友だちのように、すんでいる国はちがってもせかい中のみんながもっていると**思う**。黒コインをいっぱいためてせんそうするのではなく、チャリーンの音がひびくようにみんながどりょくすれば、もっと心のやさしい楽しいせかいになるのにな。

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実→AW の事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の事実命題

TAW のきもち銀行のシステムを、善悪のシステムとして結論付け、既存の価値観との両立から AW へ輸入する。さらにこの善悪のシステムに自分が当てはまることから、自分を凡例として、世界中の皆が持つ一般的な物であると推測した。更に、書き手の持つ価値規範に基づき、黒コインを貯める、即ち悪行を貯めるのではなく、チャリーンの音が響く[145]ように努力する、即ち善行を行うように努力すれば心の優しい楽しい世界になると推論を行っている。

5.3.2.3.　62―3『二日月』

あらすじ：

生まれたばかりの妹の芽生。「障がいを持つかもしれない」といわれ…。共に生きる主人公の心のゆれ、家族のつながりを描く。[146]

補足：

障害を持つ妹芽生が生まれてからというもの、杏は芽生を大事に思う気持ちと、家族の中心

でみんなを振り回す芽生への嫉妬とで心が揺れ続けている。ある日公園に芽生を連れて散歩に行った母の後を、杏はこっそりつけてみる。公園で遊んでいた男の子たちが芽生を「キモいの」と呼ぶのを聞き、杏は物陰から憤慨するが、杏の母は笑いながら男の子たちに芽生の病気について説明し、「また遊んでね」と公園を後にする。その様子を見た杏は、自分だったらあんな風に逃げずに向き合えるだろうかと自問する。物語の最後、久しぶりに母が来てくれるという学芸会で劇の主役をもらった杏は、母が芽生を学校に連れてくると知って反射的に「芽生を学校に連れてきて欲しくない」と思ってしまう。次の日から学校を休んでしまう杏。三日目の夕方に親友の真由がやって来て、杏の話を聞いてくれる。「自分が嫌いだ」と言う杏に、真由は「お姉さんしてる杏も、自分のこと嫌いっていう杏も、どっちも好き」と励ます。杏は翌日から学校へ行くようになり、学芸会当日、劇は無事に成功した。障害者に対して差別気味だったクラスメイト・春菜も芽生を見て笑顔になってくれた。放課後、一緒に劇の主役を演じた藤枝が、空に出ていた二日月を見上げて「満ちて、欠けて、それを繰り返して。太陽みたいにいつも同じじゃないところが好きなんだ」と言う。杏はそれを聞いて、今までの自分の心の揺らぎを思い返し、人と似ていると答えるのだった。

分析：

杏や芽生といった登場人物は AW には存在しないため、B/同目録は適用されず、C/拡大目録が適用される。ものごとの特徴については AW と共通がみられるため、A/性質、F/分類学は成立する。D/年代、E/自然法則については大きな違反は見られないため、最小離脱法則によって暫定的に成立すると言える。

その他の要素としては、心理的信憑性、既存の価値観との両立が挙げられる。

5.3.2.3.1.　62―3―1　「二日月」を読んで　（p. 68―69）

62-3-1-1

お母さんがすすめてくれた本だったので、私が声に出して言えない気持ちを知っていて、読むようにすすめたのかなあ、と**思った**ほどです。

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実→AW の事実命題＋AW の事実→AW の事実命題

TAW の一連の事実、特に杏の置かれた環境から、「障害を持つ（下の）兄弟に対して複雑な思いを抱くことがある」と結論付け、心理的信憑性から AW に輸入した。その結論にダウン症の弟を持つ書き手自身の体験も当てはまることから、両者が似ていると結論付けた。それを踏まえ、書き手に本を薦めてくれたのが書き手の母であることから、母はこの相似を知っていた、即ち書き手の気持ちも知っていたのではないかと推測している。

62-3-1-2

わたしはお母さんに、「りひとを学校につれてこないで」と言ってしまいました。その

時のお母さんの悲しそうな顔を、今でもわすれることができません。わたしが、弟をいやがっている、と**思った**のかもしれません。

分析：

AW の事実命題→AW の事実命題

書き手が弟を学校に連れて来ないで欲しいと言ったら母が悲しそうな顔をしたという事実から、母の思惑を推論している。

62-3-1-3

たしかに、そう**思った**こともありました。

分析：

AW の事実命題

前項（62-3-1-2）に続く一文。自分が弟を疎ましく思ったことがあるという事実を述べている。

62-3-1-4

だから杏ちゃんが「芽生なんて、生まれてこなきゃよかったんだ。」と言った言葉の意味が、わたしには、いたいほどよく**伝わりました。**

分析：

TAW の事実命題→TAW の命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実→AW の事実命題→AW の事実命題

前項（62-3-1-3）に続く一文。TAW の杏の様子から「障害のある年下の兄弟を疎ましく思うことがある」と結論付け、これを心理的信憑性に基づき AW に輸入している。そして自分もダウン症の弟を疎ましく思ったことがある経験もこの事例に当てはまることから、両者を似ていると判断し、自分は TAW の杏の気持ちがより理解できると結論付けている。

62-3-1-5

弟がお父さんとお母さんの真ん中で、だっこしてもらったり、仲よくかまってもらったりしていた時、自分が仲間はずれになったみたいで、弟をにくらしいと**思った**からです。

分析：

AW の事実命題→AW の事実命題

前項（62-3-1-4）に続く一文で、前項での主張の根拠ともなる文。AW での経験と、それに対する感想を述べる。

62-3-1-6

この本の「二日月」は、わたしのことを書いているみたいだな、と**思いました。**月がかくれて見えなくなる「つごもり」は、こころがもやもやしてつらかった時、でもかなら

ず「新月」「二日月」に変わります。

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実→AW の事実命題

TAW における「二日月」の表現や、それを人間みたいだと言った杏から、下線部以降の結論を導いている。それを心理的信憑性から AW に輸入し、AW での自分の弟への感情と比較して、両者は似ている、まるで自分のことのようだという感想を述べている。

62-3-1-7

満ちて、欠けての、くり返しをして、わたしは弟をもっとかわいいと**思えるようになりました。**

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実→AW の事実命題→AW の事実命題

TAW の事実に基づき示された月の「満ちて、欠けて」と人間の心の揺らぎとの相似を、分類学的両立、心理的信憑性に基づき AW でも成立するものとして輸入している。AW での自分の経験がその事例にに当てはまると結論付け、更にそのような経験を通して自分は弟を可愛いと思えるようになったという事実を述べる。

62-3-1-8

おばあちゃん、お父さん、お母さん、そしてわたし、家族のみんなでおとうとをまもる事の大切さを**知りました。**

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題

TAW の一連の事実から、家族みんなで障害を持つ家族を守ることが大事だということを導いている。それを心理的信憑性、既存の価値観との両立により AW へと輸入し、AW でも保持されるものとして結論付けている。

62-3-1-9

でも本当は、弟を助けることで、わたし自身が成長しているということも**知りました。**

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実命題→AW の事実命題

前項（62-3-1-8）から続く一文。TAW の一連の事実から、障害を持つ子を守ることを通して自身が成長できることを導いている。それを心理的信憑性により AW へと輸入し、自分の経験がその事例に当てはまることから、自分も弟を助けることで成長していると推論を

行っている。

5.3.2.3.2.　62―3―2　変わるということ（p. 70―71）

62-3-2-1

わたしは、かわいそうということばについて、少し**考えてみた**。かわいそうという言葉は、相手を見下している言葉ではないだろうか。

分析：

TAW の事実⇒AW に輸入された事実→AW の検討

TAW で杏がかわいそうだという言葉に対し示した反応を、心理的信憑性に基づき AW に輸入し、AW でも起こり得る反応だと結論付けている。その上で、AW でのかわいそうという言葉の使われ方について検討している。

62-3-2-2

でも、二日月を読んで、杏の気持ちを**知った**後は、「かわいそう」のような相手が心のすみできずつく言葉は、うっかり口にしないように気をつけなければいけないと**思うようになった**。

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW での価値命題→AW での方向付け

TAW での杏の反応を見て、「かわいそう」という表現で傷つく人がいると結論付けた。それを心理的信憑性に基づき AW へ輸入し、AW でも同様に傷つく人がいると判断している。さらに、他人を傷つけるのは良くないという書き手の持つ価値規範に基づき、人を傷付ける可能性のあるかわいそうという言葉は安易に口にしてはいけないと行動方針を定めている。

62-3-2-3

杏は「人をきずつけてもゆるされる年れいなんてない」と**思った**。私も杏と同じ**考え**だった。

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入＋AW における暗黙の法則→AW の事実命題

TAW で杏が上記のように思ったという事実に対し、杏の意見を心理的信憑性と既存の価値観との両立に基づき AW でも成立するものとして輸入した。更にこの意見に対し、書き手の持つ価値規範に基づき同意を示している。

62-3-2-4

わたしは、杏のお母さんの強さとやさしさで変える、という方法が、怒りを相手にぶつけるよりも、相手の心に呼びかけることができると**思った**。

分析：
TAW の事実命題→TAW の事実命題（⇒AW に輸入された事実命題）
TAW での杏の母の行動を見て、相手に呼びかけるには怒りをぶつけるより強さと優しさで向かっていった方が効果的であると結論付けた。本項のみでは AW との関係性が曖昧だが、次項（62-3-2-5）があるため、最終的には AW への輸入及び適用となる。適用される場合の根拠は心理的信憑性である。

62-3-2-5

わたしも友達とけんかをした時、最後まで分かりあえず、こうかいしたことがある。強さとやさしさをもっていれば、きっと友達の心をひらくことができたと**思う**。

分析：
分析不能
（62-3-2-4 での知見）＋AW の事実命題→APW の創出→APW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題
前項（62-3-2-4）の知見を心理的信憑性に基づき AW に輸入し、それと AW での自分の経験とに基づき、友達に強さと優しさをもって接したような、心理的信憑性の到達関係を持つ可能世界を創出している。そして、そのように振る舞った世界では友達の心を開けただろうと推論を行い、その結論を心理的信憑性に基づき AW へ輸入している。ただし、ライアンの虚構論は新たな可能世界の創出には対応していないため、今回使用した理論では分析が行えないとみなされる

62-3-2-6

けれど、いくつも経験していくうちに、どんなに辛いことがあっても、明るい明日が自分の上にもやってくると**知った**。

分析：
TAW の事実命題
「杏は妹が出来てとまどっていた、辛さや悩みもあった」[147]という流れでの一文。よってこの「知った」の主語は杏となる。物語中の杏の様子を説明している。

5.3.2.3.3.　62―3―3　母の言葉の本当の意味　（p．72―73）
62-3-3-1

「私もみんなと同じ物が食べたい。」心の中ではずっとそう思ってはいたけれど、私はだれにもその気持ちを話したことはなかった。きっと杏と同じ気持ちだったのだと**思う**。杏は妹の病気のことでいそがしい両親に気をつかって自分の気持ちをだれにも話さずガマンした。きっと私も、母や周りのみんなに気をつかってガマンしていたのだ。

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実命題→AW の事実命題→AW の事実命題

TAW において杏が下線部以下の行動を取ったことに対し、「周りの人に気を遣ったために自分の不満な気持ちを話さず我慢することがある」と結論付けた。更に心理的信憑性に基づきこれを AW に輸入し、AW で自分が気持ちを話さなかったという経験がこの事例に当てはまると推論し、であるならばその理由も同じだろうと結論付けている。

62-3-3-2

しかし、今年の夏、この本に出会い、悩みながらも少しずつ受け入れ、前に進んでいく杏のすがたを見て、私にもやっとあの時の母の言葉の本当の意味が**わかった**気がする。これからも私の病気が全て治ることはない。それなら、それをそのまま、ありのまま受け入れよう。それこそが「私」なのだから。

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実命題→AW の事実命題

TAW での、特に芽生の周辺の状況を見て、病気を持っていて周りと違うとしてもそれがその人なのだから受け入れてあげるべき、という結論に達した。それを心理的信憑性によって AW に輸入することで、当時は理解できなかった母の言葉について、TAW から得たことと同じことだと推測している。

5.3.2.3.4.　62―3―4 「二日月」を読んで思ったこと （p. 92―93）

62-3-4-1

でも自分の妹の芽生は、その当たり前の事ができない「障害」のある子かもしれないと**知って**、杏はとまどいます。

分析：

TAW の事実命題

「知って」の主語は杏。TAW の杏の様子を説明している。

62-3-4-2

私は、障害があってもなくても、同じ学校で、共に遊んだり勉強をしたりする事は大切だと**思います。**

分析：

AW の事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の価値命題

下線部は AW での書き手の意見である。根拠は明記されていないが、直後に書き手は「車いすにのって、ふ通の学校に通っています。」[148]と述べているため、自身の経験から、自身の持つ価値基準に則り導いた結論であると推測される。

62-3-4-3

運動会の八十メートル走では、走るきょりをみじかくしてもらっても絶対最下位だし、みんなが階段でサッとおりるところを長いろう下を車いすをこいでエレベーターまで行って、五分くらいかけておりなければならないし、いやだなあと**思う**時もあります。

分析：

AW の事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の事実命題

AW での自分の車椅子生活に対する感想。

62-3-4-4

杏も、芽生が他の赤ちゃんとちがうから、心の中が、変な感じがするのだと**思います**。

分析：

AW の事実命題→AW の事実命題⇒TAW に輸入された事実命題＋TAW の事実命題→TAW の事実命題

「一人だけ車いすで、みんなとちがってイライラします。でも、私は友達と一しょに勉強したり、遊んだりしたいです。」[149]という文に続く一文。自分の経験から「人と違うとそのことに不快感を覚えることがある」という結論を導いており、それを心理的信憑性に基づき TAW に輸入する。TAW で芽生に対して「変な感じ」を抱いている杏もこの事例に当てはまると推論を行い、それは障害を持つ芽生が他の赤ちゃんと違うからだと結論付ける。

62-3-4-5

つごもりのように、心が真っ暗な時があっても、芽生の事を思って前に進もうという勇気があれば、月が満ちていくように、静かにだけど強くなれると**思います**。

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の事実命題⇒TAW に輸入された事実命題→TAW の事実命題

「強くなれる」に対する主語は杏。TAW での杏の様子から、「心が真っ暗でも前に進もうとしている」と結論付けている。それを心理的信憑性に基づき AW に輸入し、AW での書き手の持つ価値規範に照らして、そのような行為は強くなれる行為だと結論付けている。さらにこの結論を心理的信憑性により TAW に再度輸入し、そのような行為をしている杏は今後強くなれるだろうと推測している。

62-3-4-6

私も、みんなとちがう事で落ちこむ時があっても、自分は自分だから、私の命を大切にして**生きていきたいです**。

分析：

（62-3-4-4 での知見→）AW での方向付け
前項（62-3-4-4）から続く一文。前項の「心が真っ暗でも前に進もうとしているなら強くなれる」という AW の知見から、自分も皆と違って落ち込む、即ち心が真っ暗になることがあっても前向きに進もうという AW での行動方針としている。

5.3.2.3.5.　62―3―5　心のみちかけ　（p．94―95）
62-3-5-1
わたしには、「二日月」の主人公である杏の気もちが、手に取るように**分かります。**
分析：
TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW での事実命題→AW の事実命題⇒TAW に輸入された事実命題→TAW の事実命題
TAW での杏の気持ちの揺らぎに対して「自分の心がコントロールできないことがある」と結論付け、心理的信憑性から AW でもそのようなことがあり得るとして AW に輸入している。杏の説明が終わった数段落後には「杏のように、心がコントロールできない自分に出会うことが、わたしにもあります。」[150]と AW の自分の経験を述べており、これが輸入した事例に当てはまることから、両者が似ていると結論付けた。更にこれを心理的信憑性に基づき TAW に再輸入し、自分と杏の状況が似ているならば杏の気持ちは自分と同じであろうと推論し、杏の気持ちが分かるという結論を述べている。

62-3-5-2
そんな時、「こんなはずじゃなかった。」と**思います**。お母さんが仕事に行くのをいやだなと**思います。**
分析：
AW の事実命題→AW の事実命題
「自分がコントロールできず、姉やいとこと喧嘩をして寂しくなる」[151]という文脈での一文。AW での事実に対する書き手の思考を表している。

62-3-5-3
でもこの本を読んでなやんだり心がゆれることはだれにでもあってわるいことではないということが**分かりました。**わたしたちの心がせい長するためにはこころがゆれることは大切な事なのです。
分析：
TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題
TAW での杏の心の揺らぎとそれによる成長を見て、心が揺れることは悪いことでない、成長には大切な事だと結論付けた。これを心理的信憑性に基づき AW に輸入し、AW でも成立する結論として扱っている。

62-3-5-4

わたしも今はつごもりです。でも、杏のなやみに比べたら、わたしのなやみは小さいけれど、心をゆらしながらでも、心をしっかりと**せい長させていきたいな**と、この本に出会って**思うようになりました**。心の二日月を楽しみにしたいと**思います**。

分析：

（62-3-5-3 での知見）＋AW の事実→AW の事実命題→AW の方向付け

前項（62-3-5-3）の知見を踏まえた上で、書き手にも悩みがあって心が揺れることがあるという事実から、自分も成長できるはずだと推論を行い、AW の方針として、「心を揺らしながらでもしっかり成長させていきたい」「心の二日月を楽しみにしたい」と述べている。

5.3.2.4.　62―4『さかさ町』

あらすじ：

さかさ町では文字はさかさまに書いてあり、家もさかさまに建っている。子どもが働きお年よりは遊んでいる。そんな町へ偶然来た兄妹のお話。[152]

補足：

リッキーとアンの兄妹は、ランカスターの祖父の家に行くため汽車に乗っていた。しかし線路の事故があって汽車は止まってしまい、二人は他の乗客と共に最寄りの「さかさ町」で降ろされることになった。さかさ町は二人の常識とは逆のルールやシステムで動いており、二人はそれを驚きつつも楽しむ。二人はさかさ町に一泊し、翌日は町を見て回り、懐中消灯をお土産に買って町を出て行く。

作品の分析：

リッキーやアンといった登場人物は AW には存在しないため、B/同目録は適用されず、C/拡大目録が適用される。更に TAW は、リッキーやアンの住んでいた世界と、独自のルールや価値観を持つさかさ町とに分裂している。リッキー達の住んでいた世界は、テクスト中には表れないものの、リッキー達のさかさ町への反応から、B/同目録以外の全てが成立するものであると予想される。一方さかさ町では、物の性質は一部が継承され、一部が真逆になっているため、A/性質、F/分類学については部分的に破れがある状態である。そのような物の中には物を剥がす「ドンボ」など、現在の科学理論では説明のつかないものもあるため、E/自然法則も一部破られていると言える。D/年代については大きな違反は見られないため、最小離脱法則によって暫定的に成立するとみなせる。

また、さかさ町の「アンストアー」では物を買う際、お金が要らないどころか値札に書かれた金額を貰うことができ、代わりに品物の作り手が店に品物を置く時にお金を払うという。このシステムからは特に社会経済的両立が一部損なわれていると言える。更にさかさ町では、ホテルの客室は地下にあるのが良いとされたり、コース料理が通常とは逆順で出されたり、忘れる事を良いこととして学ぶ「わすれよ科」があったりと、一見我々の価値観に反す

るような事例が数多く存在する。しかし、なぜそのような方法をとるかについての説明はある程度筋が通ったものであり、AW に限りなく近い世界で暮らしているリッキー達も納得している。以上を踏まえ、「さかさ町」世界ではより一般的な価値観についての順序が異なっているだけであり、既存の価値観との両立は成り立つと見なすことができる。

5.3.2.4.1.　62―4―1　「さかさ町」を読んで　（p．64―65）

62-4-1-1

そして、わたしも、友だちの家ではお母さんが朝ごはんを作っていることを**知って**、「えっ、何で？ふつうぎゃくちゃうん？」と**思った**のです。

分析：

AW の事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の事実命題

AW において友だちの家の習慣を知って、書き手の持つ価値規範に基づき、逆ではないのかという感想を抱いている。

62-4-1-2

でも、町のルールには一つ一つちゃんとした理由があることに**気づきました**。

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題

TAW においてさかさ町のルールとその根拠が明かされているという事実から、町の「さかさ」のルールには全て理由があるのだと推論を行っている。

62-4-1-3

さいしょはへんだな、と**思って**も、その理由が分かったら、ぎゃくに『さかさ町』のほうがいいな、と**思う**こともたくさんありました。

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の事実命題、

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の価値命題

書き手の持つ価値規範に基づく TAW の事実の評価が二回繰り返されている。TAW のさかさ町の「さかさ」のルールを既存の価値観との両立に基づき AW に輸入し、書き手の持つ価値規範に基づき変だと評価している。その上で、更にそのルールが定められた理由に対しても　に基づき AW に輸入し、書き手の持つ価値規範に基づき、今度はさかさ町の方が良いものもあると評価している。

62-4-1-4

どこもとても楽しくて、わたしも本の中に**入っていきたい**くらいでした。

分析：

TAW の事実命題→TAW の結論→TAW への方向付け
TAW のさかさ町での出来事に対し、「何処も楽しい」と感想を述べ、本の中に入っていきたいという希望を述べている。

62-4-1-5

そこで、わたしも家の中で**「さかさ」体けんをしてみたくなって**、お風ろ場の世かい地図をさかさまにしてみました。

分析：
TAW の事実命題→AW の方向付け→TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題→AW の事実命題→AW の方向付け
TAW のさかさ町の様子から、自分も「さかさ」の体験をしてみたいという希望を抱いた（自分は AW の住人にしかなれないため、これは AW での希望となる）。そこで TAW の街の様子から地図も逆さだろうと推測し、それを AW で行えば TAW のさかさ町と部分的に同じ体験が出来ると結論付け、実際に行った。

62-4-1-6

お母さんが、「地きゅうの南半きゅうにすむ人たちは、いつもこっちの地図を見ているのよ。」と**教えてくれました。**

分析：
AW の事実命題
AW においてお母さんに南半球の地図のことを教わったという事実を述べている。

62-4-1-7

と、「さかさ」の地図を見るのが何だか楽しくなってきました。なぜなら、わたしにとっての「ふつう」は、だれかにとっての「さかさ」だし、わたしにとっての「さかさ」は、だれかにとっての「ふつう」なのだと**気がついた**からです。

分析：
（62-4-1-5 の方向付け→）AW の事実命題→AW の事実命題→AW の事実命題
前々項（62-4-1-5）での行動の結果得た AW での体験から、下線部のような結論を導いている。

62-4-1-8

自分が「ふつう」と思っていることの「さかさ」を**知る**と、自分とはまったくちがうものの見方に出会うことができます。それはとてもすてきなことだと**思いました。**

分析：
（62-4-1-7 の知見→）AW の事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の価値命題

前項（62-4-1-7）を受け、「普通の逆さを知ると、自分とは違うものの見方が出来る」と結論付ける。これを書き手の持つ価値規範に基づき、素敵な事だと評価している。

62-4-1-9

わたしは、『さかさ町』にすむ人たちにも、ぜひリッキーとアンの町に遊びに行ってみてほしいです。そうすれば、その人たちも、きっとリッキーたちの町を楽しめるだろうと**思います。**

分析：

AW での事実命題→AW の事実命題⇒TAW に輸入された事実命題→TAW の事実命題

逆さま体験からの知見（62-4-1-7）を、心理的信憑性、既存の価値観との両立に基づき TAW へ輸入している。TAW のさかさ町の人たちがリッキーとアンの住む「ふつう」の町に来たら、TAW の人にとっての逆さを知ることになるため、楽しめるだろうと推測している。

62-4-1-10

友だちの家のように、これとはぎゃくの家もたくさんあるけれど、この本を読んで、どちらも正しいと**思えるようになりました。**

分析：

（61-4-1-7、61-4-1-8 での AW の知見→）AW の事実命題→AW の事実命題→AW の事実命題

TAW のさかさ町の一連の出来事から、61-4-1-7、61-4-1-8 での AW の結論を導き、それらからを踏まえて更に逆さでも正しいことがあるという結論を導いた。この結論を踏まえて冒頭で述べていた友達の家と自分の家との習慣の違いについて、どちらも正しいと結論付けている。

62-4-1-11

これからは、自分が「さかさ」だなと思っても、自分の考えだけが正しいと思わずに、あい手の立場に立って、「さかさ」を**楽しみたいです。**

分析：

（62-4-1-7、62-4-1-8、62-4-1-10 での AW の知見→）AW での方向付け

62-4-1-7、62-4-1-8、62-4-1-10 の知見を踏まえ、逆さだからと否定せずに楽しんでいきたいという AW での今後の方針を導いている。

5.3.2.4.2.　62―4―2　さかさまもいいなあ　（p．82―83）

62-4-2-1

さかさ町ってなんだろう。ぼくは、ふしぎに**思いながら**、この本を読んでいきました。

分析：

AW の事実命題
AW において、書き手が「さかさ町」という本のタイトルに疑問を持ったという事実。

62-4-2-2
ぼくは、そんなの変だな。何かおかしいと**思いました。**
分析：
TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の事実命題
TAW のさかさ町の様子に対し、既存の価値観との両立に基づき AW に輸入した上で、書き手の持つ価値規範に基づき変だ、おかしいという感想を抱いている。

62-4-2-3
でも、ぼくたちのくらしとこの町はさかさまで、変だなと**思いながら**読んでいたのに、読むうちになぜか、さかさもいいなあと**思うようになりました。**
分析：
TAW の事実⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の事実命題、
TAW の事実⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の価値命題
価値規範に基づく評価を二度行っている。TAW のさかさ町の「さかさ」のルールを既存の価値観との両立に基づき AW に輸入し、書き手の持つ価値規範に基づき変だと評価している。その上で、更に述べられた町の詳細に対しても既存の価値観との両立に基づき AW に輸入し、書き手の持つ価値規範に基づき、今度はさかさ町も良いものであると評価している。

62-4-2-4
この町では病気の人がお金をはらうのではなく、健康な人がお金をはらうのです。ぼくは、なるほどと**思いました。**
分析：
TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の事実命題
TAW のさかさ町の様子を既存の価値観との両立に基づき AW に輸入し、書き手の持つ価値規範に基づき理解を示している。

62-4-2-5
ぼくは、最初は、なんて変な町なのだと思っていたけど、よくよく**考えた**ら、この町の考え方がすごく**理かいできました。**どんな町も、どんな人も、その町なりの、その人なりのいいところがある。ぼくは、よく、「それはちがうことない。ふつうはこうやろ。」と友達に言うけど、「ふつう」と考えていたことも、人によっては「ふつう」じゃない。
分析：
TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の事実命題、

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の事実命題→AW の事実命題

TAW のさかさ町の「さかさ」のルールを既存の価値観との両立に基づき AW に輸入し、書き手の持つ価値規範に基づき変だと評価している。その上で、更に述べられた町の詳細に対しても既存の価値観との両立に基づき AW に輸入し、書き手の持つ価値規範に基づき再検討し、今度はさかさ町の考え方も理解できるとしている。更にこの結論を踏まえ、一見変に見えるものでも良い所があり、「普通」が場合によっては「普通」でないこともあると推論を行っている。

62-4-2-6

一人一人ちがう考え方や、できることがあって、それがいいのだな。そのちがいを、受け入れ合うってことが、大切なのだな。ぼくは、「ふつう」と自分のものさしで**考える**のではなく、いろいろな方向から、時にはさかさからも**考えてみようと思うようになりました。**

分析：

（62-4-2-5 の知見）→AW の事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の価値命題→AW の方向付け

前項（62-4-2-5）を踏まえ、違う考えを否定することはないのだと結論付けた。更にそれを書き手の持つ価値規範に基づき、受け入れ合うことが大切だと結論付けた。それらを踏まえて今後は逆さからも考えてみると行動方針を定めている。

5.3.2.4.3.　62―4―3　物がさかさになったら　（p．98―99）

62-4-3-1

ぼくはそこでかい中消とうを**買ってみたい**です。（略）かくれんぼのときも使えそうです。真っ暗で何も見えないからつかまらないと**思います。**

分析：

分析不能

TAW の事実命題→TAW への方向付け、

TAW の事実命題→（T）APW の創出、

AW の事実命題⇒（T）APW に輸入された事実命題→（T）APW の事実命題

TAW での懐中消灯の様子から、買ってみたいという希望を抱いた。さらに TAW でのその使い方に基づき、懐中消灯の複製と書き手の複製が同時に存在するような APW かつ TAPW であるような世界を創出している。AW でのかくれんぼの様子をものの性質の同一、分類学的両立、物理的両立から（T）APW に輸入し、懐中消灯をかくれんぼの時に使ったら捕まらないだろうと推論している。ただし、ライアンの虚構論は新たな可能世界の創出には対応していないため、今回使用した理論では分析が行えないとみなされる。

62-4-3-2

でも、ぼくにはわすれたいようないやなことはありません。と**思った**けど、よく考えたら、友だちとけんかしたことやおこられたことがありました。そのことは今までわすれていました。ということは、ぼくは、わすれよ科の勉強はけっこうできるかもしれません。通知表にあったら、二重丸になると**思います。**

分析：

分析不能

TAW の事実命題→（T）APW の創出、

AW の事実命題⇒（T）APW に輸入された事実命題→（T）APW の事実命題

TAW での忘れよ科の勉強の様子を見て、その内容をもとに書き手の複製がいて、忘れよ科で習う項目が重要視されており実際の科目として通知表にも載るような（T）APW を創出している。その上で、書き手の AW での記憶の様子を性質の同一、分析的両立からこの TAPW に輸入し、自分が忘れよ科のを受けたらいい成績を取れるだろうと推測している。ただし、ライアンの虚構論は新たな可能世界の創出には対応していないため、今回使用した理論では分析が行えないとみなされる。

62-4-3-3

ぼくも、さかさになったらおもしろい物を**考えてみました。**それはえん筆です。使うたびにどんどん長くなったらおもしろいです。みんながどのくらい勉強しているかがよく**わかります。**（略）電子レンジもさかさになるとおもしろいです。（略）ぼくの好きなバナナを入れてこおらせて**食べたい**です。

分析：

分析不能

TAW の事実命題→AW の検討⇒APW の創出→APW の事実命題→APW の方向付け

TAW で描かれた様々な「さかさ」の品を踏まえ、AW のものでさかさになったら面白そうなものを検討している。そして、それらの品が逆さになるような可能世界を創出し、その様子を想像している。ただし、ライアンの虚構論は新たな可能世界の創出には対応していないため、今回使用した理論では分析が行えないとみなされる。

62-4-3-4

ぼくも、さかさ町の人たちのように、あたり前のことばかりしないで自由な考えが**もてるようにしたいです。**

分析：

TAW の事実→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の価値命題→AW の方向付け

TAW のさかさ町の人たちの行動やシステムを見て、当たり前ではないが自由だとした。その結論を既存の価値観との両立から AW へ輸入し、書き手の持つ価値規範に基づき良いものだと判断している。それを踏まえて自分もさかさ町の人たちのように自由な考えを持ちたいと AW での方針を定めている。

5.3.3. 第 61 回青少年読書感想文全国コンクールの作品の分析

5.3.3.1. 61—1『あしたあさってしあさって』

あらすじ：

とおくの町で仕事をしているお父さんが、ひさしぶりに、帰ってくる! うれしくてたまらない、くまのこは…。心あたたまるお話。[153]

補足：

くまのこの父は仕事で遠くの街にいる。ある日くまのこのお母さんがもうすぐお父さんが帰ってくるとくまのこに言う。いつ帰ってくるのかと尋ねるくまのこに、くまのこの母はしあさってだと言い、くまのこにその説明をする。その日、うさぎのこと遊んでいたくまの子は、お父さんがしあさってに帰ってくるんだと説明する。翌日、うさぎのこと遊んでいたくまのこは、きつねのことその父が恐竜の絵本を買いに行くところに行き合う。反対方向に遠ざかる狐の親子に向け、くまのこは自分の父も「しあさって」に帰って来ると叫ぶが、うさぎのこにもう「あさって」だと訂正される。その翌日、くまのことうさぎのこは、きつねのこの家に買ってもらった恐竜の絵本を見せてもらいに行く。自分と父に似せた恐竜の絵を描きながら、くまのこは遊んでいたみんなに向け、明日自分の父が帰って来ると言う。さらに翌日。待ちに待ったしあさってが来たと跳ね起きたくまのこは、テーブルに飾るための花を摘みに行く。花を摘んでいる途中で「きれいだねえ」と声をかけられたくまのこが振り向くと、そこにはくまのこの父が立っていた。

作品の分析：

くまの一家やうさぎのこ達は AW には存在しないため、B/同目録は適用されず、C/拡大目録が適用される。くまのこをはじめ動物たちは人間と同じように喋り思考するので、A/性質、F/分類学の到達関係はない。D/年代、E/自然法則の到達関係については大きな違反は見られないため、最小離脱法則によって暫定的に成立すると言える。

他に考えられる到達関係としては、心理的信憑性、社会経済的同一、既存の価値観との両立である。

5.3.3.1.1. 61—1—1 あした、あさって、しあさってのひみつ (p. 32—33)

61-1-1-1

くまのお父さんは、くまのこをだっこしたあと、お母さんと三人で、きっとおいしいごはんをたべたと**思います。**もしかしたら、ぼくのうちのように、いっしょにテレビでやきゅうを見たかもしれません。

分析：
TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実→AW の事実命題⇒TAW に輸入された事実命題
TAW でのくまのこの「帰りを楽しみに待っていた父が帰ってきた」という状況を、心理的信憑性に基づき AW に輸入し、帰りが遅い父を待つ自分の経験に照らしてその場合どんなことをするかを推測した。その推測が心理的信憑性に基づき TAW でも保持されると考え、TAW へ再輸入している。

61-1-1-2

ぼくのお父さんも、おしごとで家にかえってこないことが多いので、くまのことにているなと**思いました。**

分析：
TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実→AW の事実命題
TAW において、くまのこの「父が仕事で帰って来ない」ことを社会経済的同一、心理的信憑性から AW に輸入し、自分の父も仕事で帰って来ないという事実と照らし、両者が似ていると結論付けている。

61-1-1-3

でも、カレンダーには、ちゃんとすう字が書いてあって見ればすぐわかるのに、なぜ、わざわざ、あした、あさって、しあさって、というよびかたがあるのかふしぎに**思いました。**

分析：
決定不能
AW での「ぼくも、カレンダーを見て、お父さんがいつかえってくるのか、お母さんによく聞きます。」[154]という話の流れから、AW についての疑問であると考えられる。カレンダーには日付での記載があるという事実に対し、書き手の持つ価値規範から、あした、あさって、しあさってという表現があるのは不思議だという結論を抱いている。ただし、TAW においてもカレンダーを使っての説明があるため、それを分析的両立によって AW に輸入しての疑問である可能性もある。

61-1-1-4

おともだちと、あそぶやくそくをするとき、ぼくも「あしたあそべる」といいます。「いいよ」といわれると、とてもあしたが楽しみになります。そんなとき、「あした」ということばは、いいことばだなと**思います。**

分析：
AW の事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の価値命題

AW での下線部前の事実に対し、書き手の持つ価値規範に基づき良い言葉だと評価している。

61-1-1-5

いつもおみやげをかってきてくれるし、「はやくかえってこないかな」とわくわくします。くまのこやきつねのこも、とてもわくわくしていたのだと**思います。**

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実→AW の事実命題⇒TAW に輸入された事実命題

TAW での父の帰りを待っていたくまのこ達の様子を、心理的信憑性に基づき AW に輸入し、AW での自分の父の帰りを待つ体験と照らし合わせて、くまのこ達の心境を推測している。

61-1-1-6

楽しみでわくわくする気もちが、「あさって」や「しあさって」ということばになったのだと**思います。**

分析：

（61-1-1-5 の知見⇒）AW に輸入された事実命題＋AW での事実→AW の事実命題（⇒TAW に輸入された事実命題）

前項（61-1-1-5）に続く一文。前項での TAW での知見を心理的信憑性、分析的両立に基づき AW に輸入し、自分の父の帰りを待つ経験とも合わせ、AW、ひいては心理的信憑性、分析的両立の成立する TAW における「あさって」「しあさって」の語の使われ方について推測している。

61-1-1-7

学校で先生が「しあさってのつぎの日は『やのあさって』というんですよ」と、**教えてくれました。**

分析：

AW の事実命題

AW での事実を述べている。

61-1-1-8

楽しみなことをまっているときは、みんな「早く早く」って思うんだなと**わかりました。**

分析：

（61-1-1-6-での AW の知見＋61-1-1-7 での知見→）AW の事実命題

前々項（61-1-1-6）での両世界共通の知見に、前項（61-1-1-7）で先生に教わった事実を加え、新たな知見を得ている。ここでいう「みんな」一般化の表現であると推測される。

5.3.3.1.2.　61―1―2　「あしたあさってしあさって」をよんで　（p．40―41）

61-1-2-1

わたしは、あしたとあさってということばをしっていたし、つかったこともあるけれどしあさってっていうことばは**はじめてきいたよ。**あさってのつぎのひのことなんだね。

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題

TAW でのしあさっての用法を分析的両立により AW へ輸入し、AW でも保持されると判断して AW の知見として得ている。

61-1-2-2

でもたのしみなことをまつときって、おんなじじかんなのに、すごくながいんだよね。わたしも**わかるよ。**

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実→AW の事実命題→AW の事実命題⇒TAW に輸入された事実命題

TAW でくまのこが父を待つ様子から、父の帰りを楽しみにしていると推測した。それを心理的信憑性から AW へ輸入し、AW での帰りの遅い母を待つ自分の体験[155]と照らして、両者が似ていると推論を行った。更に自分の経験から、そうであるならば「楽しみに待っている時間の過ぎるのは遅い」ことが成立すると推測し、心理的信憑性に基づきこのことを TAW へ再度輸入している。

61-1-2-3

わたしは、きょうがっこうであったことをはやく**はなしたくて**、まっているんだけど、とけいのはりがゆっくりうごくんだよね。

分析：

AW の事実命題

AW における書き手の経験を述べている。

61-1-2-4

わたしもくまのこみたいに、なにかをしてあげられるこに**なりたいな**って**おもったよ。**

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW での価値命題→AW での方向付け

TAW において、くまのこが「父を迎えるために準備をした」ことを、心理的信憑性、既存の価値観との両立から AW に輸入した。書き手の持つ価値規範に基づき、「おとうさんをよ

ろこばせるために、いっしょうけんめいがんばったくまのこはえらいな。」[156]と評価している。更に自分もそのようになりたいと今後の方針を定めている。

5.3.3.2.　61—2『かあさんのしっぽっぽ』

あらすじ：

和菓子屋を切り盛りして忙しいかあさんと結衣はゆっくり話す時間もありません。母と娘のふれあいを温かくユーモラスに描きます。[157]

補足：

豆大福で有名だった和菓子屋「はごろも堂」は、町に「スイートメルヘン」という洋菓子屋が出来てから客を取られてしまっている。「はごろも堂」の娘・結衣は、忙しくて相手をしてくれない母に不満があった。そんな時、学習発表会のため、地元・八千代町に伝わる昔話「白ぎつねのおんがえし」。山で秋次という男に助けられた狐のおこんは、お礼を言うために村へ降り、秋次の家を訪ねる。しかし秋次とそのそのおかみさん、子どもたちの様子を見て羨ましくなってしまったおこんは、秋次のおかみさんを飲み込んでなりすましてしまうのだ。その話を聞いた後、母の怒り顔が狐のように見えた結衣は、自分の母は狐に食べられてしまったのではと疑い始める。その日から母に冷たく当たり始めた結衣は、狐の正体を暴いてやると意気込む。お風呂でなら尻尾を出すだろうと狐が風呂に入っているところを覗き見る決心をしたある日の夕飯時、母の手を払った拍子に味噌汁をこぼし、母の手に火傷を負わせてしまう。罪悪感を覚えながらも結衣は母がお風呂に入っているところを覗く。それに気付いた結衣の母は、一緒に入るように結衣を誘う。体を洗ったり泡でスタンプを押したりする母のお尻には尻尾などなかった。結衣が泣きながら母に抱きつくと、母は結衣を抱き上げて一緒にお風呂に浸かった。次の日から結衣は、「スイートメルヘン」の娘・甘美に突っかかられても胸を張って言い返せるようになった。

分析：

この話においては、TRW と結衣の主観である、狐が母に成り代わっているという TAW が一時的に分裂する。最終的には TAW の主張は否定され、TRW と TAW は一致するものの、分裂している最中は地の文において母のことを「キツネ」と呼ぶなど、母が狐であることが事実であるかのように表現される。そのため、分裂した状態の TRW と TAW はそれぞれ別に到達関係を検討する必要がある。

TRW も TAW も、結衣やその両親などの登場人物は AW には存在しないため、B/同目録は適用されず、C/拡大目録が適用される。

終始一貫している TRW については、事物の特徴については AW と共通がみられるため、A/性質、F/分類学が成立する。D/年代、E/自然法則については大きな違反は見られないため、最小離脱法則によって暫定的に成立すると言える。

途中で TRW から乖離する TAW については、狐が母を丸呑みし、母に化けてなりすますという事が事実のように語られる。そのため A/性質、E /自然法則、F/分類学については破れ

が見られる。D/年代については大きな違反は見られないため、最小離脱法則によって暫定的に成立すると言える。
その他の要素としては、心理的信憑性、社会経済的同一、既存の価値観との両立が挙げられる。

5.3.3.2.1.　61―2―1　「おかあさんのつの」　（p．28―29）

61-2-1-1

ぼくのお母さんは、ときどきあたまからつのを出す。どうしてなのか、ずっとふしぎだったけれど、この本を読んで**わかった**。お母さんの正体は、おになのかもしれない。

分析：

分析不能

TAW において、結衣は、母親が冷たいのは本物の自分の母ではなく狐であるからだと考えた。書き手はこれになぞらえて、AW の自分の母は自分に怒るので、その正体は鬼かも知れないと述べる。しかし、人外の異形のものが人に化けるという点は本来、到達関係によって却下される要素である。したがって、この場合はライアンの手法では分析が行えない。

61-2-1-2

もし本とうだったらどうしよう、と**思う**と、こわくてふあんな気もちになるから、ぼくにはできないなぁ。

分析：

分析不能

TAW の事実命題⇒（T）APW の創出→（T）APW の検討→（T）APW の事実命題

TAW での結衣が母の正体が狐であると暴いてやろうと意気込んでいる状況に基づいて、書き手は結衣の位置に自分の対応者がいるような可能世界を作り出し、そこでの検討を行っている。そして、書き手が結衣の立場なら、母が本当に母でなかった場合を考えると怖くて不安だから自分には正体を暴こうとすることができないだろうと結論付けている。ただし、ライアンの虚構論は新たな可能世界の創出には対応していないため、今回使用した理論では分析が行えないとみなされる。

61-2-1-3

だから、ゆいがやさしいお母さんを思い出してないたとき、ぼくもむねがくるしくなった。お母さんのそばにずっといたいって気もちがよく**わかった**。

分析：

決定不能

前項（61-2-1-2）に続く一文。論理構造として「結衣がお母さんを思い出して泣いた→お母さんの傍にずっといたいと思っていただろう→僕も結衣の気持ちが分かる→胸が苦しくな

った」、「お母さんを思い出して泣いた→苦しかったろう→僕も胸が苦しくなった→故に気持ちがわかると言える」の二通りが考えられる。作文からだけではこのどちらであるか判別が出来ない。

61-2-1-4

このままずっとおにが出て来ないように、ねていてくれたらいいのに、と**思った**けれど、だんだん心ぱいでたまらなくなった。

分析：

AW の事実命題→AW の方向付け→AW の事実命題

AW において、当時の書き手の心情を述べている。「おに」という表現については、怒っている母を鬼とみなした[158]ことに基づく比喩表現である。

61-2-1-5

やっぱりお母さんはお母さんだった。おにじゃなかった。そう**思った**ら、心がすーっとかるくなった。

分析：

AW の事実命題

AW において、当時の書き手の心情を述べている。

61-2-1-6

きっと、ゆいもおかあさんにだっこしてもらったとき、おなじ気もちだったと**思う**。

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実→AW の事実命題→AW の事実命題⇒TAW に輸入された事実命題→TAW の事実命題

TAW でゆいが「母にだっこされた」ことを心理的信憑性から AW に輸入し、AW での病気の母を看病して抱きしめて貰ったという経験と照らし合わせ、似ていると判断している。更にその時の自分の「心が軽くなった」という気持ちを心理的信憑性から TAW に再度輸入し、結衣の気持ちを推測している。

5.3.3.2.2.　61―2―2　「かあさんのしっぽっぽ」をよんで　（p．48―49）

61-2-2-1

女の子とお母さんがいっしょにおふろに入ってなかなおりができてよかったです。やっぱりおふろはとくべつなばしょだと**思いました**。

分析：

AW の価値命題＋〔TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題〕→AW の価値命題

元々お風呂に対し「おふろそうじをするとお母さんがよろこんでくれるからです。」[159]と好

感を抱いていた書き手が、TAW においておふろで結衣とお母さんが仲直りをしたという事実を踏まえ、分類学的両立、心理的信憑性からそれらが AW でも起こり得ると判断し、それをもとにお風呂への特別感を強めている。

61-2-2-2

お母さんをいじわるなキツネだと思いちがいしていた女の子とぼくはよくにていると**思います。**

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題→AW の事実命題＋AW の事実命題→AW の事実命題

書き手は上記の根拠として「母が忙しいことを本当は自分は知っていた」ことを述べる[160]。故に、TAW において結衣が母を狐だと思っていたという事実を、「母を狐だと思い込む」として AW に輸入し、それに対して「本当は狐ではないことを知っていたけれどそう思いたかった」と解釈していると思われる。その上で、自分も冒頭で母を狐と呼んだこと[161]、母が書き手にかまってくれない事と照らして、両者は似ていると判断している。

61-2-2-3

赤ちゃんがすごくかわいいこと、ぼくは知ってます。お母さんを赤ちゃんにとられたと**思って**ぼくは見ていなかったふりをしてたけど、本とうは知ってました。

分析：

AW の事実命題

AW での書き手の思考を述べている。

61-2-2-4

話のさいごで、女の子がケーキやさんの女の子に言いかえすばめんがありあます。お母さんとなかなおりした女の子は強くなったように見えました。ぼくもおかあさんに少し甘えて、つよいお兄さんキツネになってもいいかなと**思います。**

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題→AW の方向付け

TAW において、ケーキ屋の女の子に言い返したという事実を見て、書き手はそれを母と仲直りしたから強くなったためだと推測した。そしてその流れを心理的信憑性に基づき AW へと輸入し、自分も母に少し甘える代わりに強くなるという今後の行動方針としている。「お兄さんキツネ」という表現については、TAW においても作文中でも多用された「人＝キツネ」の構図に対する言葉遊びの域に留まる。

5.3.3.3.　61―3『クレヨンからのおねがい』

あらすじ：
ケビンが絵を描こうとクレヨンの箱を出すと、12 色のクレヨンからの手紙の束がありました。[162]
補足：
ある日ケビンが絵を描こうとするとクレヨンの箱の上に「ケビンへ」と書かれた手紙がたくさん置いてある。それは 12 色のクレヨン達からの手紙だった。赤いクレヨンはクレヨンの中で自分が一番働いているから少し休ませてほしいと頼む。黄土色のクレヨンはたまにしか使ってもらえない事を嘆き、「きみのともだちが、うきうきわくわくたのしそうにこむぎばたけのえをかいているのをみたことがあるかい？」とケビンに問いかける。白いクレヨンはいつも白い紙に塗られるため「いっつもなかなかきづいてもらえないこのきもちわかりますか」と訴える。緑のクレヨンは日頃の自分の扱いには感謝を述べるものの、「自分こそがお日様の色だ」と喧嘩している黄色と橙色のクレヨンをどうにかして欲しいとケビンに頼む。薄橙のクレヨンはケビンに包み紙を剥がされてすっぽんぽんになってしまったから箱から出られないと文句を言う。ケビンはクレヨン達のお願いに応えた絵を描き、その絵を先生に褒めて貰った。お願いの通りに絵を描かれたことでクレヨンたちが喜んだというテクストによる記述はないが、最後のページに嬉しそうなクレヨンの絵は描かれている。ライアンその虚構論について「漫画や映画など、基本的には視覚媒体だが付帯的に言語を使うものにも、容易に拡大できる」[163]と述べているため、今回はこの挿絵及び「クレヨンたちはお願いを聞いてもらって喜んだ」ということも TAW 内における事実とみなす。
作品の分析：
ケビンやそのクレヨンは AW には存在しないため、B/同目録は適用されず、C/拡大目録が適用される。クレヨン達は人間と同じように思考し勝手に手紙を書くので、A/性質、E/自然法則、F/分類学の到達関係はない。D/年代については大きな違反は見られないため、最小離脱法則によって暫定的に成立すると言える。
その他の要素としては、心理的信憑性、既存の価値観との両立が挙げられる。
また、「おねがいを聞いてもらったクレヨンが喜んだ」というテクストには無いが挿絵から察せられる内容について、今回は媒体が絵本であることも考慮し、例外的に TAW における事実として扱うこととする。

5.3.3.3.1.　61―3―1　おねがいのこえが聞こえたら　（p．18―19）
61-3-1-1

> わたしはこの本を読んですぐ、自分のクレヨンを見てみました。すると、水色が一番みじかくて、はんたいに、おう土色はあまりつかっていませんでした。（略）だから、この二本を安心させるつかい方を考えようと思いました。

分析：
TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実命題→AW の

事実命題→AW の方向付け
TAW でケビンのクレヨン達が扱いに不満を述べているのを見て、「そのような扱い方はクレヨンにはよくない」として、クレヨンの使い方についての最小離脱法則と既存の価値観との両立から AW に輸入している。その上で、自分のクレヨンを見てみた所、ケビンのクレヨンと同じようになっているものがあったことから、自分もクレヨンに対して良くない扱いをしていると推測している。そこから、クレヨンを安心させるようなより良い使い方を考えようという行動方針を定めている。AW におけるクレヨンは知性や思考を持たないため、「安心させる」という表現は TAW をもとにした擬人法である。

61-3-1-2

わたしは水色がすきです。（略）だから絵をかくとすぐに、水色をつかっていると**思います。**

分析：
AW の事実命題→AW の事実命題
AW について、自分が水色をよく使う理由を推測している。

61-3-1-3

でも、少し休ませるために、水色のほかに元気が出る色を**考えました。**そうしたら、青空といっしょに出ているおひさまがうかんできました。だから、ケビンのクレヨンの中でおひさまの色といっている、オレンジや黄色もいいなあと**思うようになりました。**

分析：
TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題→AW の方向付け→AW の検討＋TAW の事実命題→AW の事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の価値命題
TAW でケビンのクレヨンが使われすぎる事に不満を述べているのを見て、「そのような扱い方はクレヨンにはよくない」として、クレヨンの使い方についての最小離脱法則と既存の価値観との両立から AW に輸入している。ここから自分のクレヨンも使いすぎているものは休ませようと考えた。そして他に使う色を選ぶために AW を思い返し、元気が出る色として太陽を思い浮かべた。更に TAW でオレンジや黄色が「おひさまの色」として挙げられていたことを受け、クレヨンの使い方や TAW での太陽の様子についての最小離脱法則によって AW に輸入し、AW においてもオレンジや黄色は太陽の色であると考えた。更に書き手の持つ価値規範に基づきそのような色も良いと評価している。

61-3-1-4

でも、もっとつかうために、何をぬればいいか**考えました。**そして、おう土色をよく見ると、金色に近いと**思いました。**

分析：

AW の検討→AW の事実命題
AW において黄土色の使い方を考え、金に近い色だと思い至った。

61-3-1-5

それに、ケビンのおう土色のおねがいのように、うきうきわくわくたのしそうにつかえると**思います。**

分析：
TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の価値命題
TAW でのケビンの黄土色のクレヨンからの手紙を見て、「黄土色のクレヨンはウキウキわくわく楽しそうに使える」ことをクレヨンの使い方についての最小離脱法則と心理的信憑性から AW に輸入した。これを自分の提案する黄土色の使い方と比較して、自分の提案も「うきうきわくわく楽しそう」な使い方であると推論している。

61-3-1-6

わたしはこの本を読んで、クレヨンのほかからも、おねがいのこえが聞こえそうな気がします。その時は、また、つかい方を考えて、わたしのもちものたちを**安心させたいです。**

分析：
TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実→AW の事実命題→AW の方向付け
TAW でケビンのクレヨン達が扱いに不満を述べているのを見て、「そのような扱い方はクレヨンにはよくない」として、クレヨンの使い方についての最小離脱法則と既存の価値観との両立から AW に輸入している。その上で、自分のクレヨンの使い方を踏まえ、作文内では検討しなかったクレヨンの中にも扱いが悪いものがありそうであると推測し、使い方を考えたいという方針を述べている。「持ち物を安心させたい」という表現は TAW を基にした擬人法である。

5.3.3.3.2.　61―3―2　クレヨンくん、これからもよろしく　（p. 20―21）

61-3-2-1

おねがいをよんでいるうちに、ぼくのクレヨンがしんぱいになりました。（略）はいいろとおうどいろがあたらしいままでした。**はじめてきがつきました。**きれいでないからつかわなかったのです。「ごめんね」と**おもいました。**

分析：
TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実命題→AW の事実命題→AW の事実命題

TAW においてのクレヨンたちの不満を、クレヨンの使い方についての最小離脱法則によって AW にも輸入している。そして AW において自分のクレヨンを確認した所、灰色と黄土色を使っていなかった事に気付き、その理由を推測して申し訳なく思っている。

61-3-2-2

ぼくのクレヨンは、きっとよろこんでいると**おもいます。**

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実命題→AW の事実命題

TAW において、ケビンがお願いを聞いて絵を描いてあげた事、また絵本の挿絵においてクレヨンたちが喜んでいることから、「クレヨンからのお願いにあったような条件を満たしてクレヨンを使うことは、クレヨンにとって良い事である」と結論付けた。これをクレヨンの使い方についての最小離脱法則と心理的信憑性､既存の価値観との両立から AW に輸入し、AW において自分も全ての色を使って虹色のクワガタを描いた[164]ことから、自分のクレヨンにも良いことをしたと考えた。更にこれを擬人法的に考え、自分のクレヨンが喜んでいるだろうと表現している。

61-3-2-3

これからは、大すきなめいろをかくときにも、いろいろなクレヨンで**かきます。**

分析：

（61-3-2-2 での知見）＋AW の暗黙の法則→AW の事実命題→AW の方向付け

前項（61-3-2-2）に続く一文。前項での結論に対し、書き手の持つ価値規範に基づきクレヨンたちを喜ばせるのは良い事だと結論付け、今後はいろいろなクレヨンを使おうと方針を立てている。

5.3.3.3.3.　61―3―3　あいてのきもちをかんがえる　（p. 30―31）

61-3-3-1

ケビンは、クレヨンたちのおねがいをきいてあげて、やさしいなと**おもった。**

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の価値命題⇒TAW に輸入された価値命題

TAW でケビンがクレヨンからのお願いを聞いて絵を描いたことに対して、心理的信憑性と既存の価値観との両立から AW へ輸入し、書き手の持つ価値規範に基づき、そのような行動は優しいと評価している。さらにその結論を心理的信憑性と既存の価値観との両立から TAW に再度輸入し、ケビンに対しての評価としている。

61-3-3-2

この本から、みんなのきもちをかんがえてあげることがたいせつだと**つたわってきた**。

分析：

（61-3-3-1 での AW についての知見）＋AW の暗黙の法則→AW の事実命題

前項（61-3-3-1）に続く一文。前項での「他人の気持ち（おねがい）を考えて行動してあげることは優しい」という AW における知見から、書き手の持つ価値規範に基づきそのように優しくすることは大切なことであると評価している。

61-3-3-3

みどりクレヨンは、どの色のクレヨンだったとしても、ないものねだりをしないで、「ありがとう」といいそうなきがした。なんかいいなと**おもった**。

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の価値命題⇒TAW に輸入された価値命題

TAW の緑のクレヨンからの手紙をみて、下線部直前のように緑のクレヨンの言動を推測し、「ないものねだりをしなさそう」と結論付けた。それを心理的信憑性と既存の価値観との両立から AW に輸入し、書き手の持つ価値規範に基づきそのような性格に対していいなと評価している。更にその結論を心理的信憑性と既存の価値観との両立から TAW に再度輸入し、緑のクレヨンへの評価としている。

61-3-3-4

みんな、みどりクレヨンのように「ありがとう。」って**かんがえる**ことができたらいいのにな。

分析：

（61-3-3-3 の知見→）AW の方向付け

前項（61-3-3-3）に続く一文。前項での知見を受け、AW においてもそのように考える人が多いと良いという希望を抱いている。

61-3-3-5

あいてにじぶんのきもちをつたえることは、たいせつなことだと**おもう**。だけど、あいてのきもちをかんがえてあげることもひつようなことだと**おもう**。

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題

TAW でクレヨンたちがケビンに手紙を書いたこととその内容、ケビンの対応を見て、「しばらくしたら、クレヨンたちは、またつぎのおねがいをいいだしそうだ。」[165]と推測し、相手の気持ちを考えることも必要だと結論付けた。そして心理的信憑性と既存の価値観との両

立をもとにAWに輸入し、AWでも保持される知見としている。

61-3-3-6

ぼくも、あいてのきもちをかんがえられる人に**なりたいとおもった。**

分析：

（61-3-3-5の知見）→AWの方向付け

前項（61-3-3-5）から続く一文。前項での結論を踏まえ、AW での行動方針を立てている。

5.3.3.3.4.　61―3―4　「ぼくの、クレヨン。」　（p. 42―43）

61-3-4-1

「うわぁ、手が青だ。青色のクレヨン、へっちゃったかな。」と**思った**のに、へっていなかったよ。

分析：

AWの事実命題

AWにおける書き手の思考を述べている。

61-3-4-2

そうそう、ぼくは、くもの色は、はだ色だと**思うんだ。**

分析：

AWの事実命題

思うという言葉を使っているが、これは感じるとほぼ同義である。書き手にとっての雲は肌色に感じるという事であり、書き手にとってのAWの主張と見做せる。

51-3-4-3

はじきすぎたら、空を**晴れにしたくなった。**

分析：

AWの方向付け

AWにおける書き手の希望を述べている。

61-3-4-4

ふくをきてなくてもつかえるけれど、ぼくは、新しいふくを**きせてあげたくなったよ**。

分析：

TAWの事実命題→TAWの事実命題⇒AWに輸入された事実命題＋AWの事実命題→AWの方向付け

TAWにおいて、自分が裸であると文句を述べていたクレヨンがいたことから、紙の巻かれていない状態はクレヨンにとって良くないと結論づけ、それを、クレヨンの使い方について

の最小離脱法則によって AW に輸入している。その上で、自分のクレヨンにも裸のものがあった事実から、新しい服を着せたいという行動方針を立てている。

61-3-4-5

そこで、ぼくは、**考えた。**新しい名まえをつけよう。

分析：

決定不能

作文の中において、クレヨンたちに服を着せているとこの考えに思い至ったと述べられている。作文からは前後の論理関係を読み取ることができない。

5.3.3.3.5.　61―3―5　「クレヨンからのおねがい！」をよんで　（p. 44―45）

61-3-5-1

わたしは、赤のクレヨンの手紙を読んで、うんうん、そうかも、と**思いました。**わたしも赤はよくつかいます。絵をかくとき、つかわないことはないです。わたしの赤のクレヨンもちょっとやすませてっていってるかもしれないなと**思いました。**

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実命題→AW の事実命題→AW の事実命題

TAW での赤のクレヨンの手紙から、「使われすぎるのはクレヨンにとって良くない」といしてクレヨンの使い方についての最小離脱法則と既存の価値観との両立によって AW へ輸入している。その上で、自分も良く赤のクレヨンをよく使うことから、自分のクレヨンも同じように良くない使われ方をしていると判断している。更に、TAW においてそのようなクレヨンは文句を言っていたことから、赤のクレヨンに対して「休ませてほしいと言っているかも知れない」と擬人法で表現している。

61-3-5-2

いろんなクレヨンの手紙を読んでいるうちに、なんだかクレヨンが私のクラスの友だちに**思えてきました。**

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実命題→AW の事実命題

TAW でのクレヨンの手紙をみて、その態度を心理的信憑性によって AW へ輸入し、AW での自分のクラスメイト達の態度と照らして、両者が似ていると判断している。

61-3-5-3

わたしは、じぶんは白のクレヨンににているなと**思いました。**（略）わたしも白のクレヨンみたいに、みんなに気づいてって**思う**ことがあります。でもなかなかじぶんからは

言えません。

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW での事実命題→AW での事実命題

TAW での白のクレヨンの手紙を見て、「他人に気付いて欲しい」という思いを心理的信憑性に基づき AW に輸入し、AW で自分が他人に気付いて欲しいと思うことを挙げ、似ていると判断している。

61-3-5-4

クレヨンたちは、本当にしゃべれないから手紙を書くしかなかったけれど、わたしは、しゃべることができるのだから、ちょっとゆう気を出して、みんなに言えるように**したいです。**

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題→AW の方向付け

TAW においてクレヨンたちが手紙を書いて気持ちを伝えて扱いを変えて貰ったという事実に対し、「気持ちを伝えれば態度を変えてもらえる」と結論付け、心理的信憑性に基づき AW に輸入している。さらにそれに対して、自分は喋れるのだから勇気を出して言葉でみんなに気持ちを伝えるという AW での行動方針を立てている。

61-3-5-5

クラスの中には、ケビンのうすだいだいのクレヨンみたいにすっぽんぽんにされて、たすけてって言っている人もいるかもと**思いました**。ケビンのクレヨンたちの手紙のように、わたしの気もちに気づいてって**思っている**かもしれません。

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題→AW での事実命題

TAW でのうすだいだいのクレヨンの手紙を見て、「苦境にあって助けてほしい、気付いてと思っている人がいる」というして心理的信憑性に基づき AW に輸入した。ここから AW の自分のクラスにもそのような人がいるかもしれないと推測しているが、この導出過程は曖昧である。

61-3-5-6

もしもそんな人がいたら**気づいてあげたい**と思います。

分析：

（61-3-5-5 の知見）＋AW の暗黙の法則→AW の方向付け

前項（61-3-5-5）に続く一文。前項での知見を、AW での書き手の持つ価値規範に基づき、そのような人に気づいてあげるべきであると考えた。そしてそれを AW での行動方針としている。

5.3.3.4.　61―4『かぐやのかご』

あらすじ：

傷ついた清香の心は、竹細工職人のおばあちゃんの技術と人柄に触れ、癒されていった。世代を超えて生まれた、温い友情を描く。（日本児童図書出版協会）

補足：

クラスでおならをしたという罪をなすりつけられた清花が学校からの帰り道、途中にある林の中で泣いていると、細い竹の束を抱えたおばあちゃんと出会う。おばあちゃんに竹を持っていてくれるよう頼まれた清香は、そのままおばあちゃんの仕事場までついていく。おばあちゃんは竹ザル職人で、清香の前で竹を編んでいく。そんなおばあちゃんに清香が「光る竹を見たことがあるか」と尋ねると、おばあちゃんは「この仕事を 70 年していて一度だけある」と答える。その中にかぐや姫はいたかと問う清香に、おばあちゃんは「アレがかぐや姫だとしたらさなぎだ、金色に光るさなぎがあった」と答える。そんな話をしている二人のところに、学校で清香をからかった男子たちが通りかかる。彼らが清花に気付いたのを見て表情を固くする清花。その様子を見たおばあちゃんは、男子たちの視線からさりげなく清香をかばう。しかし男子たちが清香を「ヘップリ虫」と馬鹿にしたのをみて、おばあちゃんは男子たちに向けて屁をし、「へは生きてる限りみんなこくもんだ」とやり込める。場所をおばあちゃんの家に移し、学校であったことを打ち明けた清香に、おばあちゃんはお姫様の失敗を肩代わりする「トガ負いさん」の話をして清香を励ます。おばあちゃんにカゴをもらった清香は帰り際、先ほどの「かぐや姫のさなぎ」の話について訊く。おばあちゃんはくしゃみをした拍子に落として、そのまま消えてしまったと答えた。清香はもらったカゴを「かぐやのかご」と名付け、「また来るね」と言って家に帰っていった。

作品の分析：

清香やおばあちゃんなどの登場人物は AW には存在しないため、B/同目録は適用されず、C/拡大目録が適用される。事物の特徴については AW と共通がみられるため、A/性質、は成立する。E/自然法則、F/分類学については、特におばあちゃんの光る竹についての話が、少なくとも作り話ではなさそうだと受け取れる表現で書かれていることから、その点については破れがみられると言える。D/年代については大きな違反は見られないため、最小離脱法則によって暫定的に成立すると言える。

その他の要素としては、心理的信憑性、既存の価値観との両立が挙げられる。

5.3.3.4.1.　61―4―1　勇気をくれる宝物　（p. 70―71）

61-4-1-1

だれだっておならをする。それは、生きていれば当たり前だ。<u>でも、人前でおならをすることがはずかしくない人なんていないと思う。</u>

分析：

AW の事実命題→AW の事実命題
AW について、自分はおならをしたら恥ずかしいと思うことを根拠に、おならをして恥ずかしい人はいないと推測している。

61-4-1-2

学校の帰り道に林の中で、一人、大声で泣きさけぶくらいなら、言い返した方がずっと楽なのに。私は疑問に**思った**。

分析：
TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の事実命題⇒TAW に輸入された事実命題
清香がクラスでおならをしたという罪を擦り付けられ、帰り路の途中にある林で泣いていたという TAW の事実に対し、心理的信憑性において AW でも起こり得るとして AW へ輸入した。そして書き手の持つ価値規範に基づき、その場合言い返した方が楽だと判断し、翻って TAW はおかしいのではないかと結論付け、TAW に疑問を抱いている。

61-4-1-3

へをこいてかっこいいなんて、おかしいけれど、「へは生きている限り、みんなこくもんだ。あんたは、へするか？ならばよし。」と、意地悪な男の子たちの心を、堂々と正そうとする強さとやさしさがすてきだと**思った**。

分析：
TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の価値命題⇒TAW に輸入された価値命題→TAW の事実命題
TAW においておばあちゃんが男の子たちをやり込めた事に対し、「強さと優しさによって堂々と相手の心を正そうとしている」と結論付けた。それを心理的信憑性と既存の価値観との両立から AW に輸入し、そのような行為を書き手の持つ価値規範に基づき素敵だと評価している。更にその結論を TAW に心理的信憑性と既存の価値観との両立によって再度輸入し、おばあちゃんへの評価としている。

61-4-1-4

おばあちゃんがすてきに見えるのは、**きっと**、自分自身がトガ負いの心をもっているからじゃないかな。

分析：
（61-4-1-3 の知見→）TAW の事実命題
前項（61-4-1-3）での事実と素敵だという評価を踏まえ、その理由を上記のように推測している。

61-4-1-5

罪を半分、私がせ負うことで、友達の気持ちが半分、楽になったと**考える**と、トガ負いも悪くないな。

分析：

TAW の事実命題→TAW の価値命題⇒AW に輸入された価値命題＋〔AW の事実命題→AW の事実命題〕→AW の事実命題

TAW におけるトガ負いさんの話から得られる「人のために罪を被れる人は綺麗だ」という教訓を、心理的信憑性、既存の価値観との両立から AW へ輸入する。書き手は、友達の失敗を一緒に背負った経験[166]があり、そのことで友達の気持ちが半分楽になったと推測し、この事はトガ負いさんの事例に当てはまると考えた。書き手の持つ価値規範に基づきその事も悪くないと評価している。

5.3.3.4.2.　61―4―2　おばあちゃんが教えてくれたこと　（p. 78―79）

61-4-2-1

おばあちゃんは、何も言わないけれど、わたしのことをしんじて見守ってくれていると感じました。しんじて見守るためには強い気持ちもひつようだと**思います**。おばあちゃんのやさしさと心の強さを感じて、わたしもがんばろう、という気持ちになりました。

分析：

AW の事実命題→AW の事実命題→AW の事実命題→AW の方向付け

AW の自分のおばあちゃんの話。自分が学校に行くのを負担に思っていた時、おにぎりを作ってくれたおばあちゃんに対して、信じて見守ってくれているのだと推測した。また、そうだとすればそれには強い気持ちも必要だろうと推測し、おばあちゃんは優しさと心の強さを持っていると結論付け、自分も頑張ろうと方針を立てている。

61-4-2-2

かご作り名人のおばあちゃんが「トガ負いさん」の話をしたのも、くやしさやさびしさをかかえて立ち止まっているさやかに、自分をしんじて前に進んでいってほしい、とねがう気持ちがあったからだと**思います**。

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題

TAW においておばあちゃんが清香に「トガ負いさん」の話をしたことについて、その心境を推測している。

61-4-2-3

また、人の気持ちを思いやることができ、何かいけないことをしてしまった時にはきちんとあやまることができる、そういう心を持っている人がきれいな人なんだよ、と伝え

たかったのだと**思います。**

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題

TAW においておばあちゃんが清香に「トガ負いさん」の話をしたことについて、その心境を推測している。

61-4-2-4

これから、もっともっと自分の心をきれいにみがいて、こまっているひとがいたらたすけたり、まわりの人たちを元気にできる人に**なりたいです**。そして、自分をしんじて一歩ずつ前に**進んでいきたいです。**

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の方向付け

TAW における清香とおばあちゃんの交流、おばあちゃんのトガ負いさんの話、そして最後の清香の様子から、下線部で示されているような要素を結論付けた。それを心理的信憑性、既存の価値観との両立から AW に輸入し、書き手の持つ価値規範に基づきそれらを良いものであると評価した上で、そのように行動していきたいと AW についての方針を立てている。

5.3.3.5.　61―5『パオズになったおひなさま』

あらすじ：

日本人のよっちゃんと中国人のリンちゃん。戦争で引き離されることになった二人が、友情の証として交換したものとは…?[167]

補足：

愛花は祖母がひな祭りに肉まんを作るのを不思議に思い、訳を訊ねてみた。すると祖母は自分の子供時代のことを話し始めた。祖母よしえことよっちゃんは、職を求めて中国・大連の日本人町に移り住んだ商人一家の娘として、大連で生まれ育った。よっちゃんの生まれた翌年には盧溝橋事件があり、以来日中は戦争状態にあったが、大連までは戦争の影響もなく、国も正しい情報を伝えないため、大連の人々はのんびり暮らしていた。一番の親友はパオズ（中国の饅頭）屋の娘であるリンちゃん。二人は通う学校こそ違うが仲が良く、中国式の正月や日本式のひな祭りを一緒に楽しく過ごしていた。しかしそんなある日、店で中国人を雇っていることを理由に、よっちゃんの父親がスパイ容疑をかけられ、憲兵に連れていかれてしまう。それをきっかけに周囲の日本人はよっちゃん一家に冷たく当たり、リンちゃんからも「もう遊べない」と言われてしまうよっちゃん。進む戦争の影響もあり、ついによっちゃん一家は日本に帰ることを決める。一家は要らないもの、持っていけないものを近所の人に譲りわたす。よっちゃん一家が日本に帰ることを聞いてお別れを言いに来たリンちゃんの

母に、よっちゃんは取っておいた雛人形を渡した。翌日、出港前の港にリンちゃんとその母がたくさんのパオズを持って現れる。よっちゃんはリンちゃんと仲直りをして別れ、以来連絡もとれずにいるという。今では愛花の祖母であるよっちゃんこと祖母よしえは、「リンちゃんは自分の胸の中に生きていて、今も時々思い出す。それでいい」と笑うのだった。
作品の分析：
よっちゃんやリンちゃんといった登場人物は AW には存在しないため、B/同目録は適用されず、C/拡大目録が適用される。事物や国の特徴については AW と共通が見られるため、A/性質、F/分類学は成立する。盧溝橋事件以来の日中情勢から、D/年代と同時に歴史的一貫性についても成立すると判断できる。E/自然法則については大きな違反は見られないため、最小離脱法則によって暫定的に成立すると言える。
その他の要素としては、心理的信憑性、社会経済的同一、既存の価値観との両立が挙げられる。既存の価値観との両立について、作中では「中国人を雇っているから中国のスパイだろう」、「スパイには何をしても良い」といった戦時中独特の価値観を持つ人も現れるが、よっちゃんやリンちゃんといった主人公格はそのような見解に否定的であることから、作品としての立場は AW の価値観と同じであると判断した。

5.3.3.5.1.　61―5―1　「広がれ!!パオズの心、おひなさまの心」　（p．76―77）
61-5-1-1

私にも幼稚園の時から仲良しの中国人の友達がいる。明るく元気な女の子で、その子のお母さんもいつも親しげに話しかけてくれる。よっちゃんとリンちゃんも同じだ。<u>いつの時代も人と人が仲良くなることに、国や人種、言葉のちがいなどは関係ないのだと**思う**。</u>

分析：
TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実命題→AW の事実命題→AW の事実命題⇒TAW に輸入された事実命題
TAW でのよっちゃんとリンちゃんとその家族との関係性を、心理的信憑性や既存の価値観との両立によって AW に輸入し、AW での自分と友人、その母との関係とが似ていると考えた。二つの事例から推論を行い、下線部のような結論を得ている。また、書き手の事例もよっちゃんとリンちゃんの事例も同じとしている事から、TAW への再輸入が起きていると考えられる。

61-5-1-2

<u>この時、よっちゃんが必死になってまでひな人形をリンちゃんにわたしたかったのは、出会ってからずっと仲良くしてくれた感謝と、人形をきっと大事にしてくれると信じた事、「スイスイピュアー」のおまじないのように、その子を災いから遠ざけてくれるというひな人形がリンちゃんを守ってくれると**思った**からなのかもしれない。</u>

分析：
TAW の事実命題→TAW の事実命題
TAW におけるよっちゃんがどうしてもリンちゃんにひな人形を渡したかったという事実について、よっちゃんとリンちゃんのそれまでの交流に基づいて、その理由を推測している。

61-5-1-3

私は「友情」という言葉を**考えた**。いっしょにいて楽しい。好きな物が同じ。でも二人の友情はもっと大きい。その人に出会えた事、その人がいてくれる事に感謝すること。その人のいのちを大切に思えること。会えなくなっても、言葉を交わさなくてもずっと続く友情。

分析：
AW の検討→TAW の検討
AW と TAW における友情という言葉の使い方を検討している。「いっしょにいて楽しい。好きな物が同じ。」までは AW での検討「でも二人の友情はもっと大きい。」以降は TAW における検討となっている。

5.3.3.5.2.　61―5―2　パオズの温もりにふれて　（p．96―97）

61-5-2-1

だから、よっちゃん一家の苦ろうが、少し**わかる**気がするのです。

分析：
TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実命題→AW の事実命題→AW の事実命題
TAW において中国で暮らしている日本人であるよっちゃんの生活ぶりを、性質の同一、心理的信憑性から AW へ輸入し、AW での自分の上海での生活の苦労と照らして似ているところがあると考えた。その結論を再度 TAW へ輸入し、よっちゃん一家の苦労に共感している。

61-5-2-2

戦争は、人の心を変えてしまうおそろしくおろかなものだと**思います**。

分析：
TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の価値命題
TAW でのよっちゃん一家の迫害を、年代的両立、心理的信憑性、既存の価値観との両立から AW に輸入し、書き手の持つ価値規範に基づき上記のように結論付けている。

61-5-2-3

仲良しで**会いたい**のに会えない辛さは、よっちゃん達にとっては、ものすごく悲しい出

来事にちがいないと**思いました。**

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の事実命題⇒TAW に輸入された事実命題

TAW でのよっちゃんたちの仲の良さと周囲の環境のせいで会えない苦しみを、心理的信憑性と既存の価値観との両立から AW に輸入した。書き手の持つ価値規範に基づき、そのような状況における心情を上記のように結論付けている。さらにその結論を再度 TAW に輸入し、よっちゃんとリンちゃんの事例に当てはめている。

61-5-2-4

戦争は、人にとって何のとくにもならない事です。どうして戦争をするのか？何のために戦争をするのか？ひとりひとりがよく**考えたら**、そんな事をしないはずだと**思います。**

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実命題→AW の事実命題

TAW での一連の戦争にまつわる出来事から、戦争は人にとって得にならないと結論付けた。それを年代的両立、心理的信憑性から AW へ輸入し、同様の結論に達している。さらに、得にならないことを人は普通はしないのだから、良く考えればわざわざ戦争を行う人はいないはずだという AW についての推論を行っている。

5.3.3.6.　61―6『お話きかせてクリストフ』

あらすじ：

ルワンダからイギリスへやってきたクリストフ。学校の生活にもなれたが、本で物語を読むことだけは好きになれなかった……。[168]

補足：

ルワンダでの内戦から逃れイギリスに来たクリストフとその家族。イギリスの学校に通い始めたが、「お話は書いちゃいけない」という祖父バビの教えのため、本や文字を読むことが受け入れられなかった。クラスではジェレミーにアフリカから来たことなどをからかわれたりもしたが、クリストフと同じくサッカー好きのクラスメイト・グレッグと友達になる。ある日ジェレミーにひどいことを言われたクリストフは、ジェレミーを殴ってしまった。家に帰ってそのことを父に話したクリストフに、父はこの国では肌の色の違い、ルワンダではツチ族・フツ族の違いでいがみ合うと嘆き、「とるべき道はふたつしかない。戦うか逃げるかだ。でも、逃げないと、命を落とすことにもなる！」と告げる。ある日友達とサッカーをしていた時、クリストフは腰の傷跡を見られてしまう。それはクリストフがルワンダから逃げる時、 銃で撃たれてついた傷だった。翌日の休み時間、クリストフは行動にいた子供た

ちにせがまれ、ルワンダから逃げてきたときの話をする。その次の日、担任のフィンチ先生に呼ばれたクリストフは、お話を書き起こしたものを見せられる。自分の話を盗むなんて酷いと先生をなじるクリストフだったが、バビのことを話すと先生はクリストフの主張に理解を示し、そんな先生を見てクリストフも謝った。そして、「上手にお話をする」授業として、クリストフはクラスのみんなの前でルワンダでの体験を話すことになる。録音してもいいかと尋ねる先生に、今度はクリストフも頷いた。クラスメイトの前でのお話をやり遂げたクリストフの前に、バビの声と姿が浮かぶ。すぐ消えてしまったそれを思い違いだろうと思うクリストフだったが、その日家に帰ると、父からバビの訃報を聞く。数日後、フィンチ先生から「この間のお話をもっと多くの人に聞いて欲しくないか」と聞かれたクリストフは全校生徒の前で話をしてみないかと問われる。そんなことはできないというクリストフに先生は、この間のお話の録音を書き取ったものを先生が読むという方法を提案する。戸惑うクリストフは家に帰って父に相談するが、お前が決めないといけないと言われる。一晩悩んだクリストフは先生の提案を受け入れる。フィンチ先生によるお話の朗読を聞いたクリストフはもう嫌な気分はしなかった。さらなる先生の提案を受け、クリストフの話は本になることが決まった。

作品の分析：

作品のあとがきには、作者はクリストフのような難民の子供達に会ってこの本を書いたとある。しかし TAW のクリストフそのままの体験をした人物は AW には存在しないため、B/同目録は適用されず、C/拡大目録が適用される。D/年代についてはルワンダでの内戦の記述などから適用されると考えられる。事物の特徴については AW と共通がみられるため、A/性質、F/分類学が成立する。E/自然法則については大きな違反は見られないため、最小離脱法則によって暫定的に成立すると言える。

その他の要素としては、歴史的一貫性、社会経済的同一、心理的信憑性、既存の価値観との両立が挙げられる。

5.3.3.6.1.　61―6―1　三つ目の道　（p. 62―63）

61-6-1-1

> 「とるべき道はふたつしかない。戦うか、逃げるかだ。」ぼくならどうするだろう。逃げればきずつくことにはならない。けれども、戦わなければ、また、同じ目にあうかもしれない。どちらにしても、よい方向に進めるとは思えない。それでも、やっぱり戦うか逃げるしかないんだろうな。ぼくも、そう**思った。**

分析：

分析不能

TAW の事実命題⇒TAPW の創出→TAPW の検討→TAPW の事実命題

書き手は、TAW でのクリストフやその家族の状況に自分の対応者を置いた APW を創出し、書き手ならばどのように振る舞うかの検討を行っている。その結果、クリストフの父の言う

以外の方法は無いと結論付けている。ただし、ライアンの虚構論は新たな可能世界の創出には対応していないため、今回使用した理論では分析が行えないとみなされる。

61-6-1-2

ところが、この本を最後まで読んで、三つ目のとるべき道に**気づいた**。クリストフがぼくに教えてくれた三つ目の道。それは、話すことだ。だれかに伝えることだ。

分析：

TAW の事実命題→TAW の事実命題

前項（61-6-1-1）に続く一文。TAW のクリストフの行動を見て、クリストフの父の言う二択だけではなく、話し伝えるということが第三の選択肢になり得ると結論付けている。

61-6-1-3

ぼくは、バビの考えがよく**わかる**。

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の事実命題→AW の事実命題

TAW でのバビの「お話を本にとじこめたらいかん！」[169]という発言を、心理的信憑性、既存の価値観との両立から AW に輸入し、自分も文字を読むことが得意ではない事を挙げて、バビの言葉に共感を示している。

61-6-1-4

本の中でクリストフがお話をしている場面では、ぼくもそこにいるような気分でそのお話を聴いていた。ぼくよりも小さな子が、戦争でとても悲しい思いをしていることが**よくわかった**。

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題

TAW でのクリストフの話を読み、性質の同一、年代的両立、心理的信憑性から、AW でもクリストフの話のようなことが起こり得ると判断し、AW での知見としている。

61-6-1-5

そして、ぼくは、フィンチ先生のように、このお話をもっとたくさんの人に**知ってほしい**と**思った**。

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の方向付け

TAW クリストフのお話について、性質の同一、年代的両立、心理的信憑性、既存の価値観との両立の到達関係に基づき AW でも起こり得るものとして AW に輸入した。書き手の持つ価値規範に基づき、この話は重要であると結論付け、AW について上記のような希望を持

っている。

61-6-1-6

そうか、本にまとめることは、決してお話を本にとじこめているわけではないのか。それどころか、本にすることでお話は世界中に広がっていくのか。

分析：

（61-6-1-5 での AW の方向付け→）TAW の事実命題→TAW の事実命題⇒AW に輸入された命題

前項（61-6-1-5）での希望を受け、TAW でフィンチ先生がクリストフの話を文章にしたいと言っていたことを思い出し「お話は、本にすることで、遠くの人にも、たくさんの人にも読んでもらうことができる。」[170]と結論付けた。そして、既存の価値観との両立、および特に本における性質の同一からこの知見が AW でも保持されると判断している。

61-6-1-7

ぼくは、本を読むのが得意ではないけれど、これからは、もっともっと本を読んで、たくさんのことを**知りたい**と**思う**。

分析：

（61-6-1-6 での知見）→AW の方向付け

前項（61-6-1-6）での知見を受け、AW での行動方針を定めている。

5.3.3.6.2.　61―6―2　クリストフが教えてくれたこと　（p．66―67）

61-6-2-1

この本を読んで、わたしは「作家になりたい。」という気もちがもっと**強くなりました**。クリストフの話から、本で何かを伝えるすばらしさを**知った**からです。

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の事実命題→AW の方向付け

TAW においてクリストフのお話を伝えるために彼のお話が本になったのを見て、社会経済的同一、既存の価値観との両立から同様のことが AW でも起こりうるとして AW に輸入した。それに対して、書き手の持つ価値規範に基づき、本で何かを伝えることは素晴らしいと評価した。更にそれを踏まえて本を作る職業である作家を目指したいという希望を強めている。

61-6-2-2

この本を読んで、わたしははじめて「内せん」という言葉を**知りました**。

分析：

AW の事実命題
「内戦」という言葉については作中では本文ではなくあとがきにしか現れていない。あとがきには AW でのルワンダの内戦の歴史や本の作者の略歴などが書かれており、これは非虚構的な、AW の事実を伝えるテクストであると言える。従って、本項は AW の事実についてそれを知ったものであると判断した。

61-6-2-3

同じ国の人同しがたたかうことがあると**知り**、おどろきました。

分析：
（61-6-2-2 の知見）＋〔TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題〕→AW の事実命題
前項（61-6-2-2）に続く一文。TAW でのクリストフのルワンダでの環境を見て、性質の同一、年代的両立に基づき、AW でもそれらが起りうるものとみなして AW に輸入している。さらにこれこそが前項で知った「内戦」という言葉の具体的な意味内容であるとして受け入れている。

61-6-2-4

ウィンチ先生が言うように、本にすることでどんな人でも、どこの国の人でも、世界でおこっている出来事を**知る**ことができます。本は、みんなが知っておかなければならない、大切なことをつたえる力があるんだと**気づきました。**

分析：
TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題
TAW でのフィンチ先生が述べた本の力について、既存の価値観との両立、本についての分類学的両立に基づきそれらを AW へ輸入し、AW での知見として受け入れている。なお上記において、誤字と思われる「ウィンチ先生」は原文のまま引用している。

61-6-2-5

この本のおかげで、わたしは今まで気づかなかった本のすばらしさを**知りました。**本にはむかしおこったことや遠い国でおこっていることをつたえるやくわりがあるということです。わすれてはいけない大切な事を本が**教えてくれる**のです。

分析：
（61-6-2-4 での知見）＋〔TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題〕＋AW の暗黙の法則→AW の価値命題
TAW に見られた本の描写から、引用箇所の後半にあるような本の機能を結論付け、既存の価値観との両立、本についての分類学的両立から AW に輸入する。前項（61-6-2-4）で得た知見と、書き手の持つ価値規範とを合わせ、これらが本の素晴らしい点であるとして評価している。

62-6-2-6

これからもっともっとべん強して、読む人に、みんながわすれてはいけない、大切なことを伝えられる作家に**なりたいです**。クリストフがわたしに教えてくれたように、わたしも読む人に、へい和について考えてもらえる作家に**なりたいです**。

分析：

（62-6-2-4、62-6-2-5 での知見）→AW の方向付け

前々項（62-6-2-4）、前項（62-6-2-5）での知見を受け、上記のように今後の AW での行動方針を定めている。

5.3.3.6.3.　61―6―3　戦争を伝える　（p．88―89）

61-6-3-1

クリストフの話を読み、戦争のことが気になったので、思いきってひいばあちゃんにたずねてみた。（略）そして自分の子どもも失ったことなどを悲しそうな顔で**教えてくれた**。

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された命題→AW の追加調査→AW の事実命題

「教えてくれた」の主語は AW の自分の曽祖母。TAW におけるクリストフの話を、歴史的同一によって AW へ輸入して、同様のことが AW でも起こり得ると判断した。それを踏まえて曽祖母に戦争について尋ねた結果について記述している。

61-6-3-2

ひいおばあちゃんの言葉や声の低さから戦争の悲しみが**伝わってきた**。ひいばあちゃんにとっては昔のことではなく、今も心に生き続けていることだと**思った**。

分析：

AW の事実命題→AW の事実命題

AW でのおばあちゃんの語りの様子から、おばあちゃんにとっての戦争を推測している。

61-6-3-3

ぼくはクリストフの本に出会い、戦争の悲しさやこわさをあらためて**知った**。

分析：

TAW の事実命題⇒AW に輸入された事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の事実命題

TAW でのクリストフの一連の体験を、性質の同一、年代的両立、心理的信憑性から AW でも起こり得るものとして輸入し、書き手の持つ価値規範に基づいて、戦争は悲しく怖いものだと評価している。

61-6-3-4

ぼくはクリストフの話とひいばあちゃんの話をたくさんの人に話したり、書きとめたりして戦争の悲しさを**伝えたい**。そして、クリストフもぼくも世界中のみんなが大好きなサッカーを思い切り楽しむことができる平和な世界を**つくっていきたいと思った**。

分析：

（61-6-3-3 の知見）＋AW の事実命題→AW の事実命題＋AW の暗黙の法則→AW の事実命題→AW の事実命題→AW の方向付け

前項（61-6-3-3）における TAW から得た AW の知見と、AW での祖母の話を踏まえ、戦争は悲しいと結論付けた。AW での書き手の持つ価値規範に基づき戦争の悲しさは伝えられるべきだと判断し、更にその伝達の結果平和な世界が出来ると推測し、それらを踏まえて AW での行動方針を定めている。

5.4. 分析結果のまとめ

対象となった 195 項目のうち、分析が出来たものが 178 件、分析が出来なかったものが 17 件あった。分析できなかったもののうち、導出過程が複数想定され、どの過程が書き手の意図したものか作文だけからは読み取れないものが 4 件、導出過程ははっきりしているが今回使用している理論の枠組みでは説明が出来ないものが 13 件あった。

分析可能だったものの中から、虚構的作品のから現実世界についての知識を獲得しているものを抽出する。知識の定義には様々なものがあるが、最も古典的なものは「正当化された真なる信念」[171]であろう。しかしながら、ここで結論として得られている命題について、その真偽を厳密に判定する一貫した手法は存在しない。よってここでは、平常文の内容を本人なりの正当化を経て正しいものとして確信するに至った場合を、知識を得たとみなすことにする。即ち、ここでは「TAW での命題をもとに AW に関する命題を導出していて、かつその内容を本人なりの正当化を経て正しいものとして確信している」ものを虚構からの知識獲得とみなす。また、このような知識に基づいて AW について何らかの方向付けを行っているものについても、その過程で AW での知識を獲得しているものとして計上する。それ以外の項目については、例えば TAW についての命題を TAW についての知識としてみなすことも可能であろうが、本稿における研究目的からは外れるものであるため、検討対象から外した。

今回の項目のうち、虚構からの知識獲得と見なせたものが 63 件、知識を獲得した上で何かしらの方向付けを行うものが 32 件、このどちらにも当てはまらないものが 83 件あった。再掲するが、方向付けとはこうしたいという希望、こうしていきたいという方針などの行動の方向性が表れている要素であった。この要素は基本的には知識を獲得した後、それをもとに AW での何らかの方針を示すという流れで表れており[172]、ただ知識を獲得するだけにとどまらず、それを AW において活用しようとしている様子がうかがえた。

ただし、63-1-2-1、62-2-3-3、61-3-5-5 については途中に導出の過程が追えない箇所があ

った。しかしながら、これらの個所においても何らかの推論が行われている事が想定されるため、他の事例と同様に分析が行えたものとして計上・分類している。対象の中には結論に擬人法を使っているものも見受けられた。ライアンは精神を持たないものに話しかける「嶋呼法」を、「対象の、知性を備えた対応物（分身）」[173]に語りかける自分自身の擬装を行うものとしてみなす。ライアンは、この対応物（分身）こそ APW のものだが、話しかける側は AW の自らの素性に留まり、AW の構成要素について語るとしている。今回見られた擬人法はライアンのこの解釈に基づき、AW についての言及であると判断した。

知識獲得とみなせたものについては、①TAW の事実命題を AW に輸入することで直接知識を得ているもの（13 件）、②TAW の要素に、AW における自分の経験や価値観を加えて新たな知識を生み出し、獲得しているもの（50 件）、③TAW の事実命題を AW に輸入することで直接得た知識に基づき AW での方向付けを行っているもの（12 件）、④TAW の要素に、AW における自分の経験や価値観を加えて生み出した新たな知識に基づき AW での方向付けを行っているもの（20 件）、の四パターンに大別できた。

6. 考察

6.1. 分析結果への考察

本稿ではライアンの虚構論をベースにルイスの理論等で補強をした虚構論を、虚構からの知識獲得に対する分析が可能な理論として提示し、これを用いて読書感想文の分析を行った。一定の基準に基づいて分析を加えることが出来た。

今回の採用した虚構論に基づいた分析では、読書感想文に表れるような形での虚構からの知識獲得について、ある程度の類型化が行えた。①TAW から得たものをそのまま AW に輸入し、知識として活用するもの、②TAW から得たものに、AW ですでに持っている知識や経験、価値観を加え、新たな知識を導くもの、③上記の 2 種類の知識を根拠として、知識の獲得者に AW についての方向付けを促すもの、である。

最小離脱法則の逆用について考察した際に予想された知識獲得のパターンは、❶TRW に残留した AW の知識がそのまま再抽出される場合、❷中心移動先の世界で得た知識の根拠となる論理が到達関係による世界同士の比較を経ても無傷である場合、❸AW での法則や自分のこれまでの体験に基づいて補完された TAW を描き出した上で TAW での一連の展開を AW に再輸入する場合、の 3 通りであった。これらについて、❶と❷は分析による類型化の①に相当する。TAW から得たものに対して虚構の受容者の持つ既存の知識や価値観を加えて新たな知識を生み出すものが②であるが、ここには❸も含まれる。しかし、既存の知識や価値観と TAW との関係は TAW の推論的な補完に限定されるわけではなく、TAW と AW との要素を事例とした帰納的な推論に使われたり、逆に AW の出来事を TAW から得た事例を通して解釈するなど、様々な関わり方が見られた。

一方、知識が獲得できたと判断した事例と似たような形で似たような要素を得ているが、ライアン虚構論をベースとした今回の理論では説明しきれないものもあった。

一つには、例えば 63-4-1-3 のような、作品全体で見れば破られているような到達関係を使用して AW の知識を得ている事例である。この事例の場合、TAW と AW の間には分類学的両立が成立しないにもかかわらず、猫の特徴を分類学的両立によって輸入している。ライアン理論は TAW 全体の到達関係を二値で判定するという仕組みを取っていたが、この事例では部分的に破れていないと考えられる同一・両立の関係を使っている。このような「部分的に破れていない」という関係は、テクスト内に明示的な記述がないためそのように推測できるのであり、故に最小離脱法則の範疇だと考えられる。このような事例からも知識を得ていると言うためには、ライアンの方法論における、到達関係と最小離脱法則の適用方法について、改善が必要である。改善の方向としては、TAW 全体で到達関係の有無を判定するのではなく、各々の命題に関わる範囲に限定して個別に到達関係と最小離脱法則を適用する方法を考案する事などが考えられる。

もう一つには、TAW と AW の要素から、新しい可能世界を作っているものである。ライアンの理論は虚構の受容についての理論であるため、そこで言及のない新しく可能世界を創出する形の項目については一律で分析できないものとした。しかしながら、61-2-1-2 や 61-6-1-1 に見られるような、もし自分が登場人物だったらという想定からは、AW における自分についての何らかの結論を得ていそうにも思える。これらを現実世界の知識とみなすかどうか、みなすのであればどのような原理に基づき分析を行うかについては今後の検討課題である。この点を検討するための理論として、(T) APW の創出を認める方向であればルイスの組み換え理論、あくまで AW での検討とみなすのであればウォルトンのごっこ遊び理論が有力な候補となると思われる。

また、今回は分析対象が読書感想文であったため、得られた知識、及び導出過程で使用した命題の真偽についての正確な検証は行うことが出来ず、「平常文の内容を本人なりの正当化を経て正しいものとして確信するに至った場合」という定義を採用した。しかし、「真である」ことは知識概念において重要な要素である。各命題の真偽の検証をも含め、この理論の厳密な適用を検討することも今後の課題である。そのためには質的調査をはじめ研究手法の変更も考慮に入れる必要があろう。

6.2. 他の理論との親和性

今回の分析で知識と見なせたものには、価値に関わるものや抽象的なもの、登場人物に対して同意や共感を示すものもあった。これらの知識は武者小路が現在の図書館情報学における「知識」の価値基準では検討しきれないとした、「人間の精神性の‘豊かさ’と言われていることや、自己やその周辺の人々を中心とした立場を超えて、他者の立場を想像したり共感したりする力を支える「知」のあり方」[174]に相当しうる。虚構からの知識獲得を理論化し分析することは、武者小路の挙げたような分野を検討し、図書館情報学における知識観を補強するための一助になり得るだろう。

本稿で採用した虚構論による分析では、虚構的作品の世界と我々の住む現実世界との間

にどのような到達関係を設定するかが、虚構からの知識獲得の上で特に重要となっていた。故に同じ作品から知識を得る場合でも、同じ知識を得るとは限らない。例えば、『ひみつのきもちぎんこう』の主人公・ゆうたに対する言及でも、62-2-2-1 においてはゆうたの行動を、黒コインを増やさず銀コインを増やす（＝悪行を減らし善行を増やす）手法として評価していたが、別の作文である 62-2-1-3 においては努力は評価するが、黒コインを減らすために得たものは本物の銀コイン（＝善行）ではないとして、やや批判的に受け止めている。このように、受け手が知識として受け入れるものは、受け手が既に持つ知識や経験、価値観に大きく左右されることが見て取れた。この構造は、緑川の提示する情報の定義に親和性が見られる。緑川の情報の定義はブルックスの基本方程式を改良したものである。ブルックスは、「知識」を相互関係によって結び付けられた概念構造、「情報」をそのような構造の小さな部分であるとして、知識構造は情報によって新しく修正された構造に変えられると主張した[175]。そしてこの知識と情報の関係を「K〔S〕＋ΔI＝K〔S＋ΔS〕」[176]という「基本方程式」で表した。緑川はこの式について、情報を外部から加わる「モノ」のように扱う点を批判し、知識構造と情報との関係を、「K〔S＋ΔS〕－K〔S〕という認識→ΔI という認識」[177]と定式化した。即ち、主体が知識構造の変化分を認識すると、新しく情報を得たという認識になると主張しているのである。この理論においても、情報を得たという認識にはそれまで持っていた知識構造である K〔S〕がどのようなものであったかが大きく影響する。この点において、両者には共通の構造が見られるのである。ただし緑川の理論はあくまで「情報」概念を説明したものであり、両者を完全に同一視するには、虚構から獲得しうるものを知識とみなすか情報とみなすかという点についても深く考察していく必要がある。

また 4.5.2. で取り上げたように、ライアンの理論は虚構を代理話者のふりをする作者による言語行為と捉える点において、文学における構造主義文学批評における「作者の死」に対する批判として機能する、という岩松の指摘があった。しかしながら、ライアンの虚構論にその多くを頼って虚構からの知識獲得を論じた今回の分析では、知識獲得に作者の意図は介在しなかった。先述の通り、同じテクストを読んでもそこから得るものは人によって違う。即ち、虚構を言語行為と捉え、その意味で発信者がテクストによって何かを意図していたとしても、知識獲得におけるプロセスにはその意図は影響しないのである。この意味ではむしろ、構造主義文学批評の掲げる、テクストは読者のものでありその意味は読者の読む行為によって決定される、という立場を支持するものであると言える。ライアンの理論をもとにした虚構からの知識獲得理論が果たしてどちらに与するのかは、注意深く考察していく必要があろう。

7. 結論

本稿では、虚構的作品から得られる現実世界についての知識に対して、それらがどのように得られていて、どのような知識であるのかについて説明が可能と思われる理論を提示し、更に実際に理論を用いた分析を行うことで、理論の有用性と有効範囲について考察を行っ

た。

虚構からの知識獲得が可能な理論として、ライアンの虚構論をその原型であるルイスの可能世界論で補強したものを提示した。更に実際にこれを用いて読書感想文の分析を行った。

読書感想文の分析を通し、この理論によって虚構からの知識獲得に説明が加えられること、その下で得られる知識獲得には大きく３つのパターンがあることが明らかになった。ただし、この理論では説明がつけられないような、それでいて一見知識獲得らしきものもあり、それらの説明のためには到達関係の設定範囲を狭めることや、ルイスの組み換え理論、ウォルトンのごっこ遊び理論による虚構の理論への補足が有効であると予想された。

また、虚構からの知識獲得における既存の知識・経験・価値観の影響の大きさや、得られると言える知識の特性といった視点では、図書館情報学における知識・情報観や、文学においてテクストが持つとされる性質との親和性が見られた。これらの分野との関連性の検討は今後の課題であり、既存の理論を補強する形での貢献が期待される。

参考文献一覧

１．岩松 正洋．“ 物語論の新展開と可能世界意味論 ：マリーロール・ライアンの類型論を中心に”．フランス語フランス文学研究．1996，69，p. 69. Online ISSN 2432-3152, Print ISSN 0425-4929.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/ellf/69/0/69_KJ00002501305/_article/-char/ja,（2019-01-09）.
２．河田学．“語る行為の存在論”．フィクション論への誘い――文学・歴史・遊び・人間．大浦康介編．京都，世界思想社，2013，p.280-296.
３．清塚邦彦．フィクションの哲学．東京，勁草書房，2009，274p.
４．黒古一夫，山本順一編著．読書と豊かな人間性．東京，学文社，2007，185p,（メディア専門職養成シリーズ，4）.
５．国立国会図書館関西館図書館協力課編．図書館調査研究リポート　No.10　子どもの情報行動に関する調査研究．奈良，昭文社，NDL Research Report No.10，　169p. http://current.ndl.go.jp/files/report/no10/lis_rr_10.pdf,（2019-01-09）.
６．鈴木友里亜．虚構からの知識獲得に対する検討　ライアンの虚構論を手掛かりに．筑波大学，2017，学士論文.
７．土田友則，青柳悦子，伊藤直哉．ワードマップ　現代文学理論　テクスト・読み・世界．第 7 版，東京，新曜社，2001，286p.
８．戸田山和久．知識の哲学．第 8 版，東京，産業図書，2014，272p.
９．長崎青海．読書と豊かな人間性　学校図書館と子どもたち．東方出版，1999，246p.
１０．三浦俊彦．虚構世界の存在論．東京，勁草書房，1995，385p.
１１．三浦俊彦．改訂版　可能世界の哲学　「存在」と「自己」を考える．東京，二見書房，2017，309p.
１２．緑川信之．「情報」概念の再考．Library and information science．2006，56，p.23-42.
１３．武者小路澄子．図書館・情報学諸領域における「知識」の位置づけ．Library and information science ．2004，52，p.1-42.
１４．山本隆春編．読書教育を学ぶ人のために．京都，世界思想社，2015，306p.
１５．Brooks, Bertram C．情報学の基礎―その１―哲学的側面．岡沢和世，長田秀一，緑川信之訳．ドクメンテーション研究．1982，32(1)，p.12-23.
１６．Colatrella, Carol．“Information in the Novel and the Novel as Information System: Charles Dickens's Little Dorrit and Margaret Drabble's Radiant Way Trilogy ”．Information & Culture．2015，Vol.50，Iss.3，p.339-371.
１７．Goodman, Nelson．世界制作の方法．菅野盾樹，中村雅之共訳．東京，みすず書房，

1987，274p.
１８．Iser, Wolfgang．行為としての読書―美的作用の理論―．轡田収訳．第３版，東京，岩波書店，1984，415p.（岩波現代選書，68）.
１９．Lewis, David．“フィクションの真理”．樋口えり子訳．現代思想．1995，23（4），P163-179.
２０．Lewis, David．反事実的条件法．吉満明宏訳．東京，勁草書房，2007，327p,（双書現代哲学，6）.
２１．Lewis, David．世界の複数性について．出口康夫監訳．名古屋，名古屋大学出版会，2016，332p.
２２．Pavel, Thomas J. Fictional Worlds. Cambridge, Harvard University Press, 1986, 178p.
２３．Ronen, Voir Ruth. Possible World in Literary Theory. Cambridge, Cambridge University Press, 1994, 244p.
２４．Ross, Catherine Sheldrick，McKechnie, Lynne (E.F.)，Rothbauer, Paulette M．読書と読者．川崎佳代子，川崎良孝訳．京都，京都大学図書館情報研究会，2009，343p.
２５．Ryan, Marie-Laure．可能世界・人工知能・物語理論．岩松正洋訳．東京，水声社，2006，514p,（叢書　記号学的実践，24）.
２６．Searle, John R.“第三章　フィクションの論理的身分”．表現と意味　言語行為論研究．山田友幸訳．東京，誠信書房，2006，p.95-123.
２７．Walton, Kendall．フィクションとは何か　ごっこ遊びと芸術．田村均訳．名古屋，名古屋大学出版会，2016，443p.

使用した Web 検索機能一覧

１．国立国会図書館．国立国会図書館サーチ．http://iss.ndl.go.jp/,（2019-01-09）.
２．日本児童図書出版協会．“Web 版児童図書総目録”．こどもの本 on the Web．http://www.kodomo.gr.jp/book_search.php?STYPE=1,（2019-01-09）.
３．Google．Google Books．https://books.google.co.jp/,（2019-01-09）.

分析対象文献一覧

１．全国学校図書館協会編．考える読書　第 61 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2016，293p.
２．全国学校図書館協会編．考える読書　第 62 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2017，295p.
３．全国学校図書館協会編．考える読書　第 63 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2018，293p.

課題図書

[63-1] 楠章子．ばあばは、だいじょうぶ．童心社，2016，37p.
[63-2] くさのたき．なにがあってもずっといっしょ．金の星社，2016，95p.
[63-3] ジャーヴィス．アランの歯はでっかいぞこわーいぞ．青山南訳．BL 出版，2016，32p.
[63-4] 岡野かおる子．くろねこのどん．理論社，2016，191p.
[63-5] 茂木ちあき．空にむかってともだち宣言．国土社，2016，120p.
[62-1] 小川祥子．ボタンちゃん．PHP 研究所，2015，32p.
[62-2] ふじもとみさと．ひみつのきもちぎんこう．金の星社，2015，88p.
[62-3] いとうみく．二日月．そうえん社，2015，207p.
[62-4] アンドリュース，F エマーソン．さかさ町．小宮由訳．岩波書店，2015，94p.
[61-1] もりやまみやこ．あしたあさってしあさって．小峰書店，2014，63p.
[61-2] 村中李衣．かあさんのしっぽっぽ．BL 出版，2014，95p.
[61-3] デイウォル，ドリュー．クレヨンからのおねがい！．木坂涼訳．ほるぷ出版，2014，32p.
[61-4] 佐和みずえ．パオズになったおひなさま．くもん出版，2014，111p.
[61-5] 塩野米松．かぐやのかご．佼成出版社，2014，96p.
[61-6] コーンウェル, ニキ. お話きかせてクリストフ. 渋谷弘子訳. 文研出版, 2014, 128p.

[1] 山本隆春編．読書教育を学ぶ人のために．京都，世界思想社，2015，306p.
[2] 山本隆春．“Ⅰ　読書教育の理論　１　本と「読むこと」と人間―読書教育の存在理由―”読書教育を学ぶ人のために．山本隆春編．京都，世界思想社，2015，p.11-12.
[3] 長崎青海．読書と豊かな人間性　学校図書館と子どもたち．大阪，東方出版，1999，246p.
[4] 長崎青海．読書と豊かな人間性　学校図書館と子どもたち．大阪，東方出版，1999，p.25.
[5] 長崎青海．読書と豊かな人間性　学校図書館と子どもたち．大阪，東方出版，1999，p.26.
[6] 長崎青海．読書と豊かな人間性　学校図書館と子どもたち．大阪，東方出版，1999，p.26.
[7] 黒古一夫，山本順一編著．読書と豊かな人間性．東京，学文社，2007，185p，（メディア専門職養成シリーズ，４）.
[8] 黒古一夫．“第１章　現代社会と読書”．読書と豊かな人間性．黒古一夫，山本順一編著．東京，学文社，2007，p.15，（メディア専門職養成シリーズ，４）.
[9] 岩崎れい．“4.3．子どもの読書に関する教育学的研究”．図書館調査研究リポート No.10　子どもの情報行動に関する調査研究．国立国会図書館関西館図書館協力課編．奈良，昭文社，2008，No.10，　p.72-80.
http://current.ndl.go.jp/files/report/no10/lis_rr_10.pdf，（2019-01-09）.
[10] 武者小路澄子．図書館・情報学諸領域における「知識」の位置づけ．Library and Information Science ．2004，（52），p.1-42.
[11] 武者小路澄子．図書館・情報学諸領域における「知識」の位置づけ．Library and Information Science ．2004，（52），p.36.
[12] Ross, Catherine Sheldrick．第１章　読者　２節「フィクション問題」．読書と読者. Ross, Catherine Sheldrick，McKechnie, Lynne (E.F.)，Rothbauer, Paulette M.．川崎佳代子，川崎良孝訳．京都，京都大学図書館情報研究会，2009，p.15-23.
[13] Ross, Catherine Sheldrick．第１章　読者　２節「フィクション問題」．読書と読者. Ross, Catherine Sheldrick，McKechnie, Lynne (E.F.)，Rothbauer, Paulette M.．川崎佳代子，川崎良孝訳．京都，京都大学図書館情報研究会，2009，p.19.
[14] Ross, Catherine Sheldrick．第１章　読者　２節「フィクション問題」．読書と読者. Ross, Catherine Sheldrick，McKechnie, Lynne (E.F.)，Rothbauer, Paulette M.．川崎佳代子，川崎良孝訳．京都，京都大学図書館情報研究会，2009，p.20.
[15] 清塚邦彦．“第三章　主張とミメーシス”．フィクションの哲学．東京，勁草書房，2009，p.75-98．に詳しい。
[16]三浦俊彦．“第４章　虚構的対象とは何なのか 諸説概観”．虚構世界の存在論．東京，勁草書房，1995，p.143-311.
[17] Kroon, Fred，　Voltolini, Alberto．　"Fiction"．　The Stanford Encyclopedia of Philosophy ，Winter 2016 Edition，　Edward N. Zalta (ed.),
https://plato.stanford.edu/archives/win2016/entries/fiction/，（参照：2016-12-21）．参照
[18] Searle, John R.“第三章　フィクションの論理的身分”．表現と意味　言語行為論研究．山田友幸訳．東京，誠信書房，2006，p.95-123．を参照した。
[19] Walton, Kendall L.　Mimesis as Make-Believe．Harvard University Press，1990，450p．を参照した。

[20] 三浦俊彦．虚構世界の存在論．東京，勁草書房，1995，385p．を参照した。
[21] 清塚邦彦．フィクションの哲学．東京，勁草書房，2009，p.274．を参照した。
[22] Iser, Wolfgang．行為としての読書―美的作用の理論―．轡田収訳．第３版，東京，岩波書店，1984，p.85．（岩波現代選書，68）．
[23] Colatrella, Carol．“Information in the Novel and the Novel as Information System: Charles Dickens's Little Dorrit and Margaret Drabble's Radiant Way Trilogy”．Information & Culture．2015，（50），Iss.3，p.339-371.
[24] Lewis, David．反事実的条件法．吉満明宏訳．東京，勁草書房，2007，327p，（双書現代哲学，6）．
[25] Lewis, David．反事実的条件法．吉満明宏訳．東京，勁草書房，2007，p.7，（双書現代哲学，６）．
[26] Lewis, David．反事実的条件法．吉満明宏訳．東京，勁草書房，2007，p.10，（双書現代哲学，６）．より抜粋
[27] Lewis, David．反事実的条件法．吉満明宏訳．東京，勁草書房，2007，p.13-14，（双書現代哲学，６）．を参照した。
[28] Lewis, David．反事実的条件法．吉満明宏訳．東京，勁草書房，2007，p.15，（双書現代哲学，６）．
[29] Lewis, David．反事実的条件法．吉満明宏訳．東京，勁草書房，2007，p.65，（双書現代哲学，６）．
[30] Lewis, David．反事実的条件法．吉満明宏訳．東京，勁草書房，2007，p.65，（双書現代哲学，６）．
[31] Lewis, David．反事実的条件法．吉満明宏訳．東京，勁草書房，2007，p.66，（双書現代哲学，６）．
[32] Lewis, David．反事実的条件法．吉満明宏訳．東京，勁草書房，2007，p.66，（双書現代哲学，６）．
[33] Lewis, David．フィクションの真理．樋口えり子訳．現代思想．1995，23（4），p.163-179.
[34] Lewis, David．フィクションの真理．樋口えり子訳．現代思想．1995，23（4），p.166.
[35] Lewis, David．フィクションの真理．樋口えり子訳．現代思想．1995，23（4），p.167.
[36] Lewis, David．フィクションの真理．樋口えり子訳．現代思想．1995，23（4），p.168.
[37] Lewis, David．フィクションの真理．樋口えり子訳．現代思想．1995，23（4），p.171.
[38] Lewis, David．フィクションの真理．樋口えり子訳．現代思想．1995，23（4），ｐ.170.
[39] Lewis, David．フィクションの真理．樋口えり子訳．現代思想．1995，23（4），p.173.
[40] Lewis, David．フィクションの真理．樋口えり子訳．現代思想．1995，23（4），p.173.
[41] ルイスはこれを「理想化された形ではあるが」と前置きして述べている。
[42] Lewis, David．フィクションの真理．樋口えり子訳．現代思想．1995，23（4），p.175.
[43] Lewis, David．フィクションの真理．樋口えり子訳．現代思想．1995，23（4），p.177.を参照した。
[44] Lewis, David．フィクションの真理．樋口えり子訳．現代思想．1995，23（4），p.177.
[45] Ryan, Marie-Laure．可能世界・人工知能・物語理論．岩松正洋訳．東京，水声社，2006，514p，（叢書　記号学的実践，24）．
[46] もっとも、TAW とそれを取り巻くテクスト宇宙は、テクストによって投影されるものである。
[47] ウォルトンについては Walton, Kendall．フィクションとは何か　ごっこ遊びと芸術．田村均訳．名古屋，名古屋大学出版会，2016，443p．参照

[48] Ryan, Marie-Laure. 可能世界・人工知能・物語理論. 岩松正洋訳. 東京, 水声社, 2006, p.53, (叢書　記号学的実践, 24).
[49] ミメシス言説とは以下の条件を満たす発話行為を意味する。
(1)　ミメシス的発話行為は単称の存在言明を行う（「すべての x について」ではなく「ある x がある」)。
(2)　ミメシス的発話行為は個別の事実や固体化した存在物を記述する。
(3)　ミメシス的発話行為はひとつの世界のひとつのヴァージョンとして（ほんとうに、あるいはごっこ遊びの中で）提示され、その世界はそれを記述する言説とは独立して存在する。
(4)　ミメシス的発話行為はその世界において真偽を判定される。
（Ryan. 2006, p.54.）
[50] Ryan, Marie-Laure. 可能世界・人工知能・物語理論. 岩松正洋訳. 東京, 水声社, 2006, p.55, (叢書　記号学的実践, 24).
[51] Ryan, Marie-Laure. 可能世界・人工知能・物語理論. 岩松正洋訳. 東京, 水声社, 2006, p.55, (叢書　記号学的実践, 24).
[52] Ryan, Marie-Laure. 可能世界・人工知能・物語理論. 岩松正洋訳. 東京, 水声社, 2006, p.111, (叢書　記号学的実践, 24).
[53] Ryan, Marie-Laure. 可能世界・人工知能・物語理論. 岩松正洋訳. 東京, 水声社, 2006, p.134, (叢書　記号学的実践, 24).
[54] Ryan, Marie-Laure. 可能世界・人工知能・物語理論. 岩松正洋訳. 東京, 水声社, 2006, p.135, (叢書　記号学的実践, 24).
[55] Ryan, Marie-Laure. 可能世界・人工知能・物語理論. 岩松正洋訳. 東京, 水声社, 2006, (叢書　記号学的実践, 24), p.135. ①～④の数字と註は訳者による。
[56] Ryan, Marie-Laure. 可能世界・人工知能・物語理論. 岩松正洋訳. 東京, 水声社, 2006, p.126, (叢書　記号学的実践, 24).
[57] Ryan, Marie-Laure. 可能世界・人工知能・物語理論. 岩松正洋訳. 東京, 水声社, 2006, p.126, (叢書　記号学的実践, 24).
[58] Ryan, Marie-Laure. 可能世界・人工知能・物語理論. 岩松正洋訳. 東京, 水声社, 2006, p.127, (叢書　記号学的実践, 24).
[59] ライアンはこの例にフォークナーの『響きと怒り』を挙げている。「フォークナーは倫理上欠陥のある一個人に事故を移転し、その個人は自分を無辜の被害者として描く。内包された話者が『無辜の』ジェイソンであるのにたいし、代理話者はその全人格つまり卑劣な人物なのだ」(Ryan. 2006, p.127.）としている。
[60] Ryan, Marie-Laure. 可能世界・人工知能・物語理論. 岩松正洋訳. 東京, 水声社, 2006, p.128, (叢書　記号学的実践, 24).
[61] Ryan, Marie-Laure. 可能世界・人工知能・物語理論. 岩松正洋訳. 東京, 水声社, 2006, p.130, (叢書　記号学的実践, 24).
[62] 三浦俊彦. 改訂版　可能世界の哲学　「存在」と「自己」を考える. 東京, 二見書房, 2017, 309p.
[63] 三浦俊彦. 改訂版　可能世界の哲学　「存在」と「自己」を考える. 東京, 二見書房, 2017, p.82.
[64] Ryan, Marie-Laure. 可能世界・人工知能・物語理論. 岩松正洋訳. 東京, 水声社, 2006, p.77, (叢書　記号学的実践, 24).
[65] Ryan, Marie-Laure. 可能世界・人工知能・物語理論. 岩松正洋訳. 東京, 水声社, 2006, p.67-76, (叢書　記号学的実践, 24). 参照
[66] Ryan, Marie-Laure. 可能世界・人工知能・物語理論. 岩松正洋訳. 東京, 水声社, 2006, p.72, (叢書　記号学的実践, 24).
[67] Ryan, Marie-Laure. 可能世界・人工知能・物語理論. 岩松正洋訳. 東京, 水声社,

2006，p.73,（叢書　記号学的実践，24）.
[68] Ryan, Marie-Laure. 可能世界・人工知能・物語理論．岩松正洋訳．東京，水声社，2006，p.85-86,（叢書　記号学的実践，24）.
[69] 到達関係Ｂ／同目録で言えば、神や悪魔、UFO といったものを AW の存在の目録に含むかどうかという問題。
[70] 本稿 p.6 を参照のこと。
[71] Ryan, Marie-Laure. 可能世界・人工知能・物語理論．岩松正洋訳．東京，水声社，2006，p.92,（叢書　記号学的実践，24）.
[72] Ryan, Marie-Laure. 可能世界・人工知能・物語理論．岩松正洋訳．東京，水声社，2006，p.92,（叢書　記号学的実践，24）.
[73] Ryan, Marie-Laure. 可能世界・人工知能・物語理論．岩松正洋訳．東京，水声社，2006，p.94,（叢書　記号学的実践，24）.
[74] Ryan, Marie-Laure. 可能世界・人工知能・物語理論．岩松正洋訳．東京，水声社，2006，p.95-96,（叢書　記号学的実践，24）．を参照した。
[75] Ryan, Marie-Laure. 可能世界・人工知能・物語理論．岩松正洋訳．東京，水声社，2006，p.98,（叢書　記号学的実践，24）.
[76] Ryan, Marie-Laure. 可能世界・人工知能・物語理論．岩松正洋訳．東京，水声社，2006，p.100,（叢書　記号学的実践，24）.
[77] 鈴木友里亜．虚構からの知識獲得に対する検討　ライアンの虚構論を手掛かりに．筑波大学，2017，学士論文.
[78] Ryan, Marie-Laure. 可能世界・人工知能・物語理論．岩松正洋訳．東京，水声社，2006，p.117,（叢書　記号学的実践，24）.
[79] Lewis, David. 反事実的条件法．吉満明宏訳．東京，勁草書房，2007，p.83,（双書現代哲学，６）.
[80] Lewis, David. 世界の複数性について．出口康夫監訳．名古屋，名古屋大学出版会，2016，p.121.
[81] Lewis, David. 世界の複数性について．出口康夫監訳．名古屋，名古屋大学出版会，2016，p.120-121．を参照した。
[82] Lewis, David. 世界の複数性について．出口康夫監訳．名古屋，名古屋大学出版会，2016，p.123-124．を参照した。
[83] Lewis, David. 世界の複数性について．出口康夫監訳．名古屋，名古屋大学出版会，2016，p.124 ．を参照した。
[84] Lewis, David. 世界の複数性について．出口康夫監訳．名古屋，名古屋大学出版会，2016，p.124.
[85] Lewis, David. 世界の複数性について．出口康夫監訳．名古屋，名古屋大学出版会，2016，p.125. を参照した。
[86] Lewis, David. 世界の複数性について．出口康夫監訳．名古屋，名古屋大学出版会，2016，p.125．を参照した。
[87] Lewis, David. 世界の複数性について．出口康夫監訳．名古屋，名古屋大学出版会，2016，p.126. を参照した。
[88] Lewis, David. 世界の複数性について．出口康夫監訳．名古屋，名古屋大学出版会，2016，p.126．を参照した。
[89] Lewis, David. 世界の複数性について．出口康夫監訳．名古屋，名古屋大学出版会，2016，p.127. を参照した。
[90] Lewis, David. 世界の複数性について．出口康夫監訳．名古屋，名古屋大学出版会，2016，p.96.
[91] Lewis, David. “第４章　対応者か、それとも二重生活者か？”．世界の複数性について．出口康夫監訳．名古屋，名古屋大学出版会，2016，p.219-299．に詳しい。

[92] Lewis, David．世界の複数性について．出口康夫監訳．名古屋，名古屋大学出版会，2016，p.222．を参照した。
[93] Lewis, David．世界の複数性について．出口康夫監訳．名古屋，名古屋大学出版会，2016，p.67-68.
[94] Lewis, David．世界の複数性について．出口康夫監訳．名古屋，名古屋大学出版会，2016，p.24.
[95] Lewis, David．世界の複数性について．出口康夫監訳．名古屋，名古屋大学出版会，2016，p.9-10．を参照した。
[96] Lewis, David．反事実的条件法．吉満明宏訳．東京，勁草書房，2007，p.83，（双書現代哲学，６）.
[97] Lewis, David．世界の複数性について．出口康夫監訳．名古屋，名古屋大学出版会，2016，p.25.
[98] Lewis, David．反事実的条件法．吉満明宏訳．東京，勁草書房，2007，p.82，（双書現代哲学，６）.
[99] Lewis, David．世界の複数性について．出口康夫監訳．名古屋，名古屋大学出版会，2016，p.25-26．を参照した。
[100] Lewis, David．世界の複数性について．出口康夫監訳．名古屋，名古屋大学出版会，2016，p.26.
[101] Lewis, David．世界の複数性について．出口康夫監訳．名古屋，名古屋大学出版会，2016，p.26．を参照した。
[102]土田友則，青柳悦子，伊藤直哉．ワードマップ　現代文学理論　テクスト・読み・世界．第７版，東京，新曜社，2001，ｐ.169.
[103] Lewis, David．“フィクションの真理”．樋口えり子訳．現代思想．1995，23（4），ｐ.176.
[104] Lewis, David．“フィクションの真理”．樋口えり子訳．現代思想．1995，23（4），ｐ.176.
[105] Ryan, Marie-Laure．可能世界・人工知能・物語理論．岩松正洋訳．東京，水声社，2006，p.99，（叢書　記号学的実践，24）.
[106] Pavel, Thomas J. Fictional Worlds. Cambridge, Harvard University Press, 1986, p.93．訳、（）による補足は筆者による。
[107]河田学．“語る行為の存在論”．フィクション論への誘い――文学・歴史・遊び・人間．大浦康介編．京都，世界思想社，2013，p.280-296.
[108] Searle, John R．“第三章　フィクションの論理的身分”．表現と意味　言語行為論研究．山田友幸訳．東京，誠信書房，2006，p.120.
[109] 河田学．“語る行為の存在論”．フィクション論への誘い――文学・歴史・遊び・人間．大浦康介編．京都，世界思想社，2013，p.286.
[110] 河田学．“語る行為の存在論”．フィクション論への誘い――文学・歴史・遊び・人間．大浦康介編．京都，世界思想社，2013，p.286.
[111] 河田学．“語る行為の存在論”．フィクション論への誘い――文学・歴史・遊び・人間．大浦康介編．京都，世界思想社，2013，p.290.
[112] Ryan, Marie-Laure．可能世界・人工知能・物語理論．岩松正洋訳．東京，水声社，2006，p.122，（叢書　記号学的実践，24）.
[113] 河田学．“語る行為の存在論”．フィクション論への誘い――文学・歴史・遊び・人間．大浦康介編．京都，世界思想社，2013，p.292.
[114] 岩松 正洋．“ 物語論の新展開と可能世界意味論 ：マリーロール・ライアンの類型論を中心に”．フランス語フランス文学研究．1996，69，p. 69. Online ISSN 2432-3152, Print ISSN 0425-4929. _
https://www.jstage.jst.go.jp/article/ellf/69/0/69_KJ00002501305/_article/-char/ja,

（2019-01-09）.

[115] 土田友則，青柳悦子，伊藤直哉．ワードマップ　現代文学理論　テクスト・読み・世界．第 7 版，東京，新曜社，2001，p.27.

[116] Ronen, Voir Ruth. Possible World in Literary Theory. Cambridge, Cambridge University Press, 1994, p.69.

[117] 岩松 正洋．“ 物語論の新展開と可能世界意味論 ：マリーロール・ライアンの類型論を中心に”．フランス語フランス文学研究．1996，69，p. 70. Online ISSN 2432-3152, Print ISSN 0425-4929. _ https://www.jstage.jst.go.jp/article/ellf/69/0/69_KJ00002501305/_article/-char/ja,（2019-01-09）.

[118] 岩松 正洋．“ 物語論の新展開と可能世界意味論 ：マリーロール・ライアンの類型論を中心に”．フランス語フランス文学研究．1996，69，p. 70. Online ISSN 2432-3152, Print ISSN 0425-4929. https://www.jstage.jst.go.jp/article/ellf/69/0/69_KJ00002501305/_article/-char/ja,（2019-01-09）.

[119] 岩松 正洋．“ 物語論の新展開と可能世界意味論 ：マリーロール・ライアンの類型論を中心に”．フランス語フランス文学研究．1996，69，p. 70. Online ISSN 2432-3152, Print ISSN 0425-4929. _ https://www.jstage.jst.go.jp/article/ellf/69/0/69_KJ00002501305/_article/-char/ja,（2019-01-09）.

[120] Goodman, Nelson．世界制作の方法．菅野盾樹，中村雅之共訳．東京，みすず書房，1987，p.32.

[121] 全国学校図書館協会編．考える読書　第 63 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2018，293p.

全国学校図書館協会編. 考える読書　第 62 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集. 東京，毎日新聞出版，2017，295p.

全国学校図書館協会編. 考える読書　第 61 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集. 東京，毎日新聞出版，2016，293p.

[122] 日本児童図書出版協会．“Web 版児童図書総目録”．こどもの本 on the Web. http://www.kodomo.gr.jp/book_search.php?STYPE=1,（2019-01-09）.

[123] 国立国会図書館．国立国会図書館サーチ．http://iss.ndl.go.jp/,（2019-01-09）.

[124] Google．Google Books．https://books.google.co.jp/,（2019-01-09）.

[125] 本稿 p.14-15 を参照のこと。

[126]日本児童図書出版協会．“Web 版児童図書総目録”．こどもの本 on the Web. http://www.kodomo.gr.jp/result.php,（2019-01-09）.

[127]全国学校図書館協会編．考える読書　第 63 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2018，p.18.

[128]全国学校図書館協会編．考える読書　第 63 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2018，p.18.

[129]全国学校図書館協会編．考える読書　第 63 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2018，p.18.

[130]日本児童図書出版協会．“Web 版児童図書総目録”．こどもの本 on the Web. http://www.kodomo.gr.jp/result.php,（2019-01-09）.

[131]全国学校図書館協会編．考える読書　第 63 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2018，p.32.

[132]全国学校図書館協会編．考える読書　第 63 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2018，p.32.
[133]全国学校図書館協会編．考える読書　第 63 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2018，p.48.
[134]全国学校図書館協会編．考える読書　第 63 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2018，p.48-49.
[135]日本児童図書出版協会．“Web 版児童図書総目録”．こどもの本 on the Web. http://www.kodomo.gr.jp/result.php，（2019-01-09）.
[136]全国学校図書館協会編．考える読書　第 63 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2018，p.14.
[137]全国学校図書館協会編．考える読書　第 63 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2018，p.42.
[138] Google．“くろねこのどん　岡野かおる子”．Google Books. https://books.google.co.jp/books?id=SoXojwEACAAJ&dq=くろねこのどん&hl=ja&sa=X&ved=0ahUKEwiwoPCUopjfAhUB62EKHSJXCDoQ6AEIJTAA，（2019-01-09）.
[139]全国学校図書館協会編．考える読書　第 63 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2018，p.97.
[140]日本児童図書出版協会．“Web 版児童図書総目録”．こどもの本 on the Web. http://www.kodomo.gr.jp/result.php，（2019-01-09）.
[141]全国学校図書館協会編．考える読書　第 63 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2018，p.69.
[142]日本児童図書出版協会．“Web 版児童図書総目録”．こどもの本 on the Web. http://www.kodomo.gr.jp/result.php，（2019-01-09）.
[143]日本児童図書出版協会．“Web 版児童図書総目録”．こどもの本 on the Web. http://www.kodomo.gr.jp/result.php，（2019-01-09）.
[144] Ryan, Marie-Laure．可能世界・人工知能・物語理論．岩松正洋訳．東京，水声社，2006，p.145-146，（叢書　記号学的実践，24）.
[145] チャリーンはテクストにおいて、気持ち銀行に銀コインが貯まる時の音の表現である。
[146]日本児童図書出版協会．“Web 版児童図書総目録”．こどもの本 on the Web. http://www.kodomo.gr.jp/result.php，（2019-01-09）.
[147]全国学校図書館協会編．考える読書　第 62 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2017，p.71.
[148]全国学校図書館協会編．考える読書　第 62 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2017，p.93.
[149]全国学校図書館協会編．考える読書　第 62 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2017，p.93.
[150]全国学校図書館協会編．考える読書　第 62 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2017，p.94.
[151]全国学校図書館協会編．考える読書　第 62 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2017，p.94-95.
[152]国立国会図書館．“さかさ町（岩波書店）: 2015｜書誌詳細”．国立国会図書館サーチ. http://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-I026917566-00，（2019-01-09）.
[153]日本児童図書出版協会．“Web 版児童図書総目録”．こどもの本 on the Web. http://www.kodomo.gr.jp/result.php，（2019-01-09）.
[154]全国学校図書館協会編．考える読書　第 61 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2016，p.32.

[155]全国学校図書館協会編．考える読書　第 61 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2016，p.40.
[156]全国学校図書館協会編．考える読書　第 61 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2016，p.41
[157]日本児童図書出版協会．“Web 版児童図書総目録”．こどもの本 on the Web. http://www.kodomo.gr.jp/result.php，（2019-01-09）.
[158]全国学校図書館協会編．考える読書　第 61 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2016，p.28.
[159]全国学校図書館協会編．考える読書　第 61 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2016，p.48.
[160]全国学校図書館協会編．考える読書　第 61 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2016，p.48.
[161]全国学校図書館協会編．考える読書　第 61 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2016，p.48.
[162]日本児童図書出版協会．“Web 版児童図書総目録”．こどもの本 on the Web. http://www.kodomo.gr.jp/result.php，（2019-01-09）.
[163]Ryan, Marie-Laure．可能世界・人工知能・物語理論．岩松正洋訳．東京，水声社，2006，p.174，（叢書　記号学的実践，24）.
[164]全国学校図書館協会編．考える読書　第 61 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2016，p.20.
[165]全国学校図書館協会編．考える読書　第 61 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2016，p.30.
[166]全国学校図書館協会編．考える読書　第 61 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2016，p.71.
[167]国立国会図書館．“パオズになったおひなさま（くもん出版): 2014｜書誌詳細”．国立国会図書館サーチ．http://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-I025968125-00，（2019-01-09）.
[168]日本児童図書出版協会．“Web 版児童図書総目録”．こどもの本 on the Web. http://www.kodomo.gr.jp/result.php，（2019-01-09）.
[169]全国学校図書館協会編．考える読書　第 61 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2016，p.62.
[170]全国学校図書館協会編．考える読書　第 61 回青少年読書感想文全国コンクール入賞作品集．東京，毎日新聞出版，2016，p.63.
[171] 戸田山和久．知識の哲学．第 8 版，東京，産業図書，2014，p.3-4．を参照した。
[172] 一部には「TAW において～したい」「TAW に行ってみたい」など TAW への方向付けも見られる。
[173] Ryan, Marie-Laure．可能世界・人工知能・物語理論．岩松正洋訳．東京，水声社，2006，p.143，（叢書　記号学的実践，24）.
[174] 武者小路澄子．図書館・情報学諸領域における「知識」の位置づけ．Library and information science ．2004，52，p.38.
[175] Brooks, Bertram C．情報学の基礎―その１―哲学的側面．岡沢和世，長田秀一，緑川信之訳．ドクメンテーション研究．1982，32(1)，p.20．を参照した。
[176] Brooks, Bertram C．情報学の基礎―その１―哲学的側面．岡沢和世，長田秀一，緑川信之訳．ドクメンテーション研究．1982，32(1)，p.20.
[177] 緑川信之．「情報」概念の再考．Library and information science ．2006，56，p.32.